

イロハ  
上卷

69  
68

(M)

69  
68

あはれ

名所と美術の案内

上巻

子 變 和 式 二 三  
美 東

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

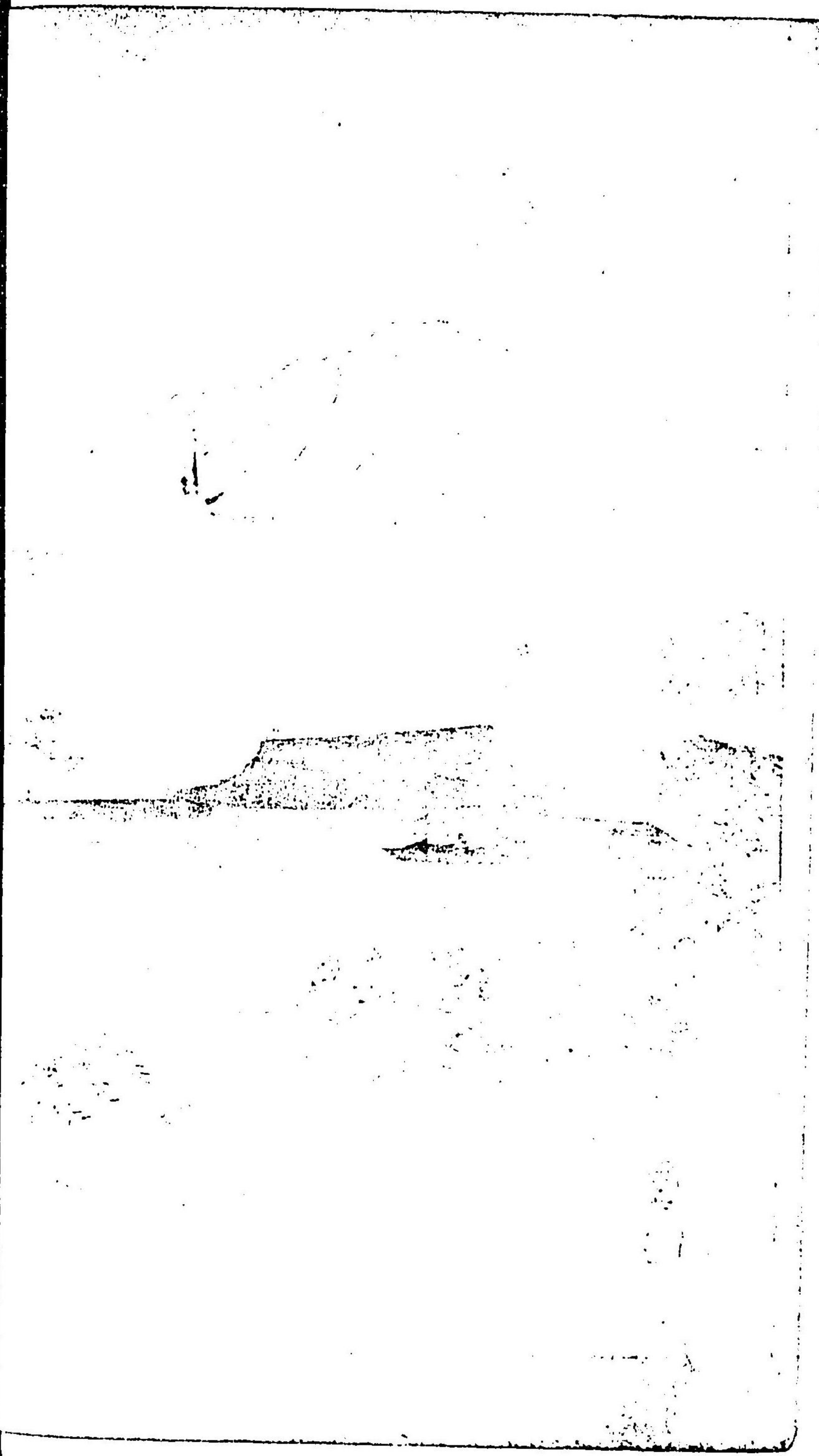
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

不 三



山崎  
印



きやうと目録

第一編

- 緒言 一丁
- 凡例 五丁
- 京都畧史 九丁
- 延暦遷都の京城并に大内裡圖 二十一丁
- 皇宮沿革小史 二十一丁
- 明治維新前の宮城圖 三十一丁
- 美術小談 三十一丁
- 京都及び近傍明細圖 三十一丁

第二編

- 三條大橋 四十三丁
- 三條小橋 四十四丁

きやうと目録

目録

一

- 新京極 哲願寺、和泉式部の墓 四十四丁 ○蛸薬師 觀音、天光寺 四十五丁
  - 四條大橋 園、新地 四十六丁 ○八坂神社 祇園、櫻 四十八丁
  - 智恩院 附、系櫻、淺黄櫻、什寶 五十一丁 ○植髮御影堂 青蓮院 五十四丁
  - 栗田神社 吉水園 五十五丁 ○栗田、陶器 附、栗田燒史 五十六丁
  - 疏水運河 イソクライン、道 五十九丁 ○南禪寺 細川、園、什寶 六十丁
  - 永觀堂 附、岩垣、楓、什寶 六十三丁 ○若王子社 如意輪、千手、十一面の瀧 六十五丁
  - 黒谷、光明寺 附、燈懸、松、什寶 六十七丁 ○眞如堂 附、什寶 六十九丁
  - 法然院 善氣水、安樂寺、談合、七、如意、鐵 七十丁 ○銀閣寺 附、茶室、什寶 七十三丁
  - 吉田神社 神樂岡、北、白河 七十五丁 ○第三高等學校 七十七丁
  - 百萬遍 附、什寶 七十八丁 ○織物會社 七十九丁
- 京都勝覽第二日 東部南の方、東福寺に、至り更に圓山に還る
- 建仁寺 附、赤松、圓心の塔、安井金毘羅社、珍皇寺の辨 八十丁
  - 六波羅密寺 附、什寶 八十五丁 ○五條大橋 八十六丁

- 大佛殿 大鐘、耳塚 八十七丁 ○豊國神社 豊國山、秀吉墓 八十九丁
  - 妙法院 附、什寶 九十丁 ○智積院 附、什寶 九十丁
  - 帝國博物館 九十一丁 ○三十三間堂 九十二丁
  - 東福寺 附、天橋、月輪殿、什寶 九十三丁 ○泉涌寺 附、歴朝の帝寶 九十七丁
  - 西大谷 目鏡橋、島邊野、開寺、高倉帝の、雙小僧の塔 九十九丁 ○清水寺 音羽、瀧、地主、現社、地主、櫻、子、安塔、朝倉堂、田村堂、歌、中山、清 百一丁 ○清水坂陶器 附、燒、清水、略、史 百六丁
  - 八坂塔 百九丁 ○高臺寺 附、雨茶屋、傘、茶亭、什寶 百十丁
  - 双林寺 性昭の塔、西行の塔、西行庵、阿の塔、芭蕉堂、大雅堂 百十三丁
  - 靈山 表忠の銅碑、木戸孝允墓 百十七丁 ○東大谷 百十八丁
  - 圓山 瀧泉浴場、長樂寺、圓山陽の墓 百十八丁 ○將軍塚 百二十一丁
- 京都勝覽第三日 東部なる大極殿に始まり北部に回り市内を經過して還る
- 大極殿 附、大極殿由来 百二十二丁 ○平安神宮 百二十五丁
  - 熊野神社 百二十六丁 ○聖護院 百二十六丁

- 高等女學校 百二十七丁 ○療病院 百二十七丁
- 梨木神社 百二十八丁 ○師範學校 百二十八丁
- 下御鑿 百二十九丁 ○美術學校 百三十丁
- 京都博覽會場 百三十一丁 ○仙洞御所大宮御所 百三十一丁
- 皇宮 踏殿、諸門及御  
苑内、白雲神社、御  
學校、看病婦學校、  
圖書館、紀念文庫 百三十二丁 ○同志社學校 普通學校、豫備學校、神學  
校、理科學校、政法學校、女  
百三十三丁 ○相國寺 附  
音樓、曲變堂 百三十四丁
- 上御鑿祭神 百三十七丁 ○妙覺寺 附 什寶 百三十七丁
- 妙顯寺 附 什寶 百三十七丁 ○本法寺 附 什寶 百三十八丁
- 白峯神社祭神 百三十八丁 ○同志社病院 百四十丁
- 護王神社祭神 百四十一丁 ○京都府 百四十二丁
- 盲陞院 百四十二丁 ○京都市議事堂 百四十三丁
- 本能寺 附 什寶 百四十三丁

京都勝覽第四日 北部下鴨社より西部に回り六角堂に終る

- 下加茂神社 葵祭、札の森  
御手漕川 百四十四丁 ○上加茂神社 祭神、山、由來 百四十五丁
  - 今宮神社 百四十七丁 ○大徳寺 附 什寶 ○眞珠庵 百四十七丁
  - 建勳神社 舟岡山 百五十丁 ○金閣寺 附 什寶 ○鏡湖池、岩下、水、龍  
床柱、萩枝の  
連樹、衣笠山 百五十一丁 ○平野神社 祭神、夜櫻 百五十三丁
  - 北野神社 附 什寶 百五十四丁 ○釋迦堂 百五十五丁
  - 西陣織物 附 什寶 京都市 百六十六丁 ○二條離宮 百六十丁
  - 神泉苑 百六十一丁 ○六角堂 生花師池の坊 百六十二丁
  - 尊攘堂 百六十三丁
- 京都勝覽第五日 市内を經過し西南より西に回る
- 佛光寺 附 什寶 百六十四丁 ○因幡藥師 百六十五丁
  - 東本願寺 附 什寶 京都市 百六十六丁 ○藪内紹智、邸 附 紹智、原茶 百六十七丁
  - 本國寺 附 什寶 百七十丁 ○本願寺 附 什寶 京都市 百七十一丁
  - 興正寺 百七十四丁 ○六孫王 百七十四丁





- 善峯寺十輪寺 二百卅二丁
- 西岩倉金藏寺 二百卅三丁
- 大原神社 二百卅五丁
- 男山神社 二百卅七丁
- 安樂壽院冠石、梅 二百四十丁
- 三鈿寺變嶽 二百卅二丁
- 勝持寺瓦礫子、隅居の遺跡 二百卅三丁
- 天王山寶積寺 二百卅六丁
- 淀町 二百卅九丁

南方隔遠の名區

- 鷲峰山金胎寺池、多輪、波樂、嶽、廻、率、瀧、等の諸名蹟及空鉢、鉢 二百四十二丁
- 大智寺八景 二百四十三丁
- 明神大瀧内、挑、貝、吹、岩、千、手、瀧 二百四十三丁
- 有市炭酸泉 二百四十二丁
- 笠置山文珠院、西壽院、笠置石、虛空藏、石、太鼓、石、息、居、遺、跡、千、年、窟、胎 二百四十三丁

東南隔遠の名區

- 稻荷神社祭神、辨 二百四十六丁
- 石峰寺五百羅漢の石像、名壽士若冲基 二百五十丁
- 寶塔寺元政基、深草里 二百五十一丁
- 瑞光寺 二百五十一丁

- 藤森神社 二百五十三丁
- 伏見町 二百五十五丁
- 觀月橋 二百五十六丁
- 宇治町附、日本茶史、宇治橋、橋姫岡 二百五十七丁
- 縣神社 二百六十九丁
- 朝日山旗尾山 二百七十丁
- 黄檗山萬福寺十二勝景 二百七十二丁
- 醍醐寺下、醍醐、上、醍醐、三寶院、千疊敷 二百七十四丁
- 牛尾山音羽瀧、鏡子瀧、經岩、蛇ヶ瀧 二百七十六丁
- 三保崎疏水口、日岡、逢坂山、輝丸神社 二百八十二丁
- 三井寺 二百八十四丁
- 石山寺 二百八十六丁
- 御香宮 二百五十六丁
- 巨椋池 二百五十七丁
- 平等院附、芝、竹、寶、鐘 二百六十六丁
- 興正寺 二百七十丁
- 離宮八幡 二百七十二丁
- 御室戸寺喜撰嶽 二百七十二丁
- 勸修寺 二百七十八丁
- 山科陵安祥寺 二百七十八丁
- 唐崎の松 二百八十四丁
- 近江八景 二百八十八丁

附 錄 近 江

○美術師人名索引

第四編

美術の業

○繪畫諸名家畧傳

附 支那畫曆代人名  
日支洋年代對照

○彫刻 佛工、金工、木  
牙彫工等 妙手傳

○髹漆 蒔繪、螺鈿、堆  
朱、沈金等 名工傳

○陶磁器製造名家傳

附 錄

○刺繡 三百八十二丁 ○染物 三百八十四丁

第五編

雜 部

○七條停車場スプリング 氣車賃銀表 三百八十九丁 ○電氣鐵道 三百九十丁

○人力車 賃銀價目 三百九十丁 ○舟高瀬川、保津川 三百九十一丁

○客舍 三百九十二丁 ○料理店 三百九十三丁

○郵便電信局 郵便條例摘要、郵便爲替規則 三百九十五丁

○通運會社通運賃銀表 四百五丁 ○銀行及諸會社諸商店 四百六丁

○畫工及彫利蒔繪師 四百廿七丁 ○病院 四百廿九丁

○醫師 四百卅一丁 ○藥局 四百卅二丁

○看病婦雇規則 四百卅二丁 ○内外尺度比較表 四百卅四丁

○内外衡量比較表 四百卅四丁 ○内外貨幣比較表 四百卅五丁

附 錄

○京都府管内物産 四百卅五丁

索引と目錄終



る風景及び眞物とそまゝ寫し出すにあらすや所謂天然は美術の良師なりとの金言は最も能く日本人によりて實踐せられたるを知る、されば世界に卓越せる天然の美中にありて其美術の世界に卓越するは當然の事なるのみ云々

斯て日本は世界の勝地たる如く京都は日本の勝地たり、美術に於る亦然り抑も京都は千七十餘年間の帝都にして、山河風月の幽趣なる、春花秋葉の艶麗なる、實に本邦の最たるなり、この地に帝王の御世を重ねさせ給へること七十餘代の多きに及びたれば、由緒ある名所舊跡、少ならず、且梵刹神祠等には、許多の珍器什寶を藏せり、この故に本邦の景勝名區を探らんと欲せば、先づ杖を京都に曳ざるべからず、又本邦の美術寶器を見んと欲せば、必ず轎を京都に向けざるべからず、景勝と美術とは實に京都の特有たり、而して京都の特有たる此兩者を案内して、京都に遊ぶ内外の人士を便する良書、いまだ世にいでず、來遊の客は不便を感ずべく、景勝と美術

とは紹介を失ひて嘆すべし

但し名勝を記せし書には山城名勝志、山州名跡志、雍州府誌などいふ者もあれど、事舊て日新の今日には無用に属するもの多く、且浩瀚にして見るに不便、携帶に亦不便なるが上に、美術の事は固よりなし、近來まゝ坊間に業内記やうの小冊子の目に觸るゝことあれど、鹵莽杜撰のもの多く、して用に足るべきは殆んど稀なり、京都の美術を記せるものに至りては、僅かに諸家什物の名目を掲げたる京都美術のしるべといふ小冊子の他には不完全なる者だになし、頗る缺點といふべし

この故に余その缺點を補ひて、景勝と美術とに富める京都を國の内外にあらはさんと思ひ準備はせしものから、未だ果さずして、年経しが、當夏偶々閑を得れば、多年の宿念を遂るは、この時にこそあれど、筆硯を三伏の友として、青梧欄下に涼を納れつゝ、起草にかゝりぬ、此書は京都に來遊する内外人士に、日本勝景の最、東洋美術の府たる京都を紹介し、且案内せん

とするにあれば則ちその名を稱して京都とよばん

明治廿七年の夏

凡例

- 一 本書は緒言にもいへる如く京都の名勝と美術とを弘く世にあらはすを以て目的とすれば名勝を案内すると共に梵刹神祠等に蔵する所の什寶を紹介し天造と人造との両美を指示説明す
- 一 本書は遊覽者の携帶に便せんとすれば簡易を旨とするが故に名勝美術を指示説明するに當り古書舊記の類参考に備へしもの數百卷あれど繁を厭ひて一々書目を掲げず
- 一 本書は名所舊跡のその名存すれどその跡定かならず又はその跡ありとも覽るべき價直なきものは皆省けり然る歴史文學もしくは工藝美術に要ありと認るものは繁を厭はずして之を記載し且古書に徴して細かに辯明を加へたり
- 一 本書はまゝ古人今人の詩歌を掲出して探勝の雅客に一層の興味をそへ又その感を深くし後日もなほ之によりて當日を想起し身再び勝區

に入るが如き娛樂あらしめんとす

一 本書は第四編に美術の乘てふ項を設け什寶美術の年代を詳かにし往々その作者の小傳をかゝけて一は時勢と技藝との係はり一は人の性行と美術との與かる所を知らしめ快樂と實益とを併せ得しめんとす

一 本書は方今歐米諸國に行はるゝガイドブックとは固より其趣きを殊にすればと旅客に便益を予ふる所のその好部分ばかりの書に倣ひて貨幣衡量の比較、瀛車、馬車、人力車等の賃銀、旅亭并に宿料、郵便局、銀行、諸會社、病院、看病婦、醫師等おほよそ旅人のために要用と認るものは皆かゝけて第五編なる雜部に出せり

一 本書は名所を記するに張ち方角によらず又郡區をとはず只巡覽の便にしたがひて記し三條大橋を以てその起點とす、三條大橋は昔より諸街道元標のある所にして旅客おほくはこの邊に宿り且三條通りは上下京の中央たればなり

一 本書は目錄に第一日、第二日と順次に日を記せしと雖も見るに粗密あり人によりて同じからず殊に什寶等を熟視せんには一個所にて一日を費して尙足ざることあるべし、此はたい路順の便にせしまでなれば強ち日子に拘泥すべからず

一 本書は遠隔の名山勝區を別に分ち方角によりて順次に記載す、比較山鞍馬、大悲山、宇治等は一日もしくは二日を要して他の箇所とも巡覽するを得ざればなり

一 本書は稀に京都外の勝地名區を記することあり、保津川舟の快を試みんとする人のために丹波龜山城の由來を記し、疏水の洞源を見んとする容のため三井寺、唐崎、石山等をかゝけたる類是なり

一 本書は内外人に便せんためなれば一は邦語を以てし一は英語を以てす、邦語の方に力を添られしは木村忠彦氏にして、英語の方に専ら勞を執れしはオプアエロトル 服部他助氏なり、又この書のために注意を加へ

英語の訂正に助力せられしは同志社教授オールドン博士なり本書幸ひに  
京都遊覽の内外人士に便益を予ふるを得ばその功三氏にあづかる所お  
はし茲に鳴謝す

明治廿七年十二月

著者 誠

京都畧史

京都は山城國にあり、山城國は東、近江に隣り、西、丹波、攝津に界し、南、伊賀、大和、河内に連り、北は近江、栗太郡及び丹波の北桑田郡に接す、東西凡そ六里、南北凡そ十五里、群壑起伏して東北西の三面を圍み、西南は開豁坦美にして加茂宇治等の諸水淀に會して西に注ぎ、地味膏腴、風景亦秀麗なり、氣候は冷暖變り易く、陰晴常ならず、冬時極寒三十一度、夏時極暑九十五度、郡は葛野、愛宕、乙訓、紀伊、宇治、久世、綴喜、相樂の八に分る、而して京都市は葛野、愛宕部の兩郡に跨がり、東西一里二十九間四尺、南北一里二十四町八間、三條通りを中央として、其以北を上京とし、其以南を下京とす、上京區は面積一方里一分強、市坊六百四十戸、數二万七千七百三十六戸、人口十三万九千六百八十四人、下京區は面積零方里七分強、市坊六百十戸、數三万六千八百四十戸、人口十五万六千九百五十五人を有し、市街潔整にして北に比叡の高嶺を望み、東に鴨川の清流を帯び、山景水色相映じて、皇都を修飾せり、こ

の愛すべき山水の勝は依然として舊時のまゝなれど京都市街は今昔同じからず幾多の變遷を経て終に現在の形狀とはなれるなり今その由來沿革を畧述せんに太祖神武天皇都を大和の橿原に奠めさせ給ひし以降帝都の遷移せしと四十餘回概ね一朝一都たるが如し而して文武天皇の御宇紀元千三百六十餘年大化の制度修成せられ八省百官設備せらるるに及ては又昔の質素の世に似ず遷都の煩はしきこと古への比にあらざれば天皇百世一都の制を立んとして慶雲四年に相地を議せしめ給ひしが果さずして崩し元明天皇その遺志をつぎ和銅三年西紀七に至りて遂に都を大和國添上郡奈良に遷し大に規模を弘めたまふ之を平城宮と稱す斯て七代元明、元正、聖武、孝謙、淳仁七十餘年を経て桓武天皇にいたり孝仁革命の後を承け大に帝業を振興せんと圖り給ふに當り平城の地勢なほ其鴻模に適せざるを以て更に地を相して萬世不易の皇都を開かんと欲し延暦三年西紀七百藤原種繼の建議を納れて山背國乙訓郡長岡の地に都城

を經始し宮殿を營作せしめ十月天皇長岡宮に遷らせ給ふ然るに新都十年を經過して猶成らず工費勝て計るべからず和氣清麻呂これを憂へ葛野郡に重ねて遷都あらんことを奏請す天皇これを許して延暦十二年二月大納言藤原小黒麻呂左大辨紀古佐美等を遣し山背國葛野郡宇太村の地を相せしめ同三月天皇親ら行幸して新京を巡覽し百姓の地の新京宮城内に在るものは三年の價を給し五位以上及び諸臣の主典以上に令して役夫を進つり宮城を築かしめ同六月諸國に令して宮城の諸門を造らしめ十三年七月に及びて東西市を新京に移し且廩舍を造りて市人を移し同年十月車駕新都に遷御し給ふ斯てこの歲十一月詔して宣曰く此國は山河襟帶自然に城を作す故に形勝によりて新號を制し山背國を改めて山城國と爲すべしと又子來の民異口同辭に謳歌して平安京と呼べり當時の京城は南北一千七百五十三丈東西一千五百七十丈大内裏はその北端に在て南北四百六十丈東西三百八十四丈皇居及び百官諸司みな此



内にあり、四面に十二門を設く、その南門を朱雀門といひ、南極の郭門を羅城門といふ、其間に弘さ二十八丈の一直大路あり、之を朱雀大路と稱して東西の中央たり、之より東を左京とし、西を右京とす、兩京いづれも劃りて九條とし、北より數へて南に至る、條毎に名あり、一條を桃花坊といひ、二條を銅駝坊といひ、以下は左右名を殊にし、三條は左を教業坊、右を豐財坊、四條は左を永昌坊、右を永寧坊、五條は左を宣風坊、右を宣義坊、六條は左を淳風坊、右を光德坊、七條は左を安衆坊、右を輔財坊、八條は左を崇仁坊、右を延嘉坊、九條は左を陶化坊、右を開建坊といふ、而して一條の内に四坊あり、一坊の内に四保あり、一保の内に四町あり、一町の内に四行あり、一行の内に八門あり、一門は即ち一戸にして、長さ十丈、弘さ五丈より成る、然ば左右京各々坊三十六、保百五十、町六百八あり、坊毎に長一人を置き、四坊に令一人を置いて、戸口を檢按し、奸非を督察せしめ、又左右京職を置いて、京中の事を奉行せしめ、東西市司を置いて、賣買の眞偽をたゞしめ、都外の事は府を乙訓

郡河陽に置き、國司をして之を領せしむ、京城の宏壯整齊、前古未嘗有にして、經國治略亦これに倣ひ、萬世の皇基こゝに堅立す。

然ども榮枯稠落の免れがたきは世の常にして、百王不易の都も時に盛衰なき能はず、村上帝の天德四年西紀九百六十年、皇宮災にかゝり、帝神嘉殿及び職曹司等に遷御まし、しを始とし、其後の御代々々にも、幾度となく内裏炎上して、土御門内裏、三條内裏、六條内裏等こゝかしこの里内裏に假に住はせ給ふことゝなり、保元西紀千平治西紀千九百の亂後は、京師しばゝ兵馬に踏あらされ、或は祝融の災にかゝり、或は風伯の暴怒にふれ、都民生を脚する暇なく、昔の皇都の面かけは、次第に變りて、復た見るべき影なきに至りぬ、鴨、長明おのが目撃せし、當時の慘狀を方丈記に述べて曰く、凡そ物の心を知りしより、以來、四十餘りの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、稍や度々になりぬ、去ぬる安元三年西紀千七百四月廿八日、かどよ、風烈しく吹て、靜かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火

出で來りて西北に至る終には朱雀門大極殿大學寮民部省まで移りて  
 一夜がほそに塵灰となりなき云々或は煙にひせびて斃れ伏し或は焰  
 にまかれて忽ちに死しぬ或は又僅かに身一幸くして遁れたれども資  
 財を取出るに及ばず七珍萬寶ながら灰燼となりなき云々男女死者  
 者數千人馬牛の類ひ邊際を知らず  
 又治承四年西紀千八百卯月廿九日のころ中御門京極のはそより大なる  
 旋風起りて六條あたりまで驟しく吹けること侍りき三四町をかけて  
 吹きまくるに其中にこもれる家ども大なるも小きも一として破れさ  
 るはなしさながら平に倒れたるもあり楯柱ばかり残れるもあり云々  
 かの地獄の業風なりともかばかりにとぞ覺ゆる家の損亡せるのみな  
 らず之を取繕ふ間に身を害ひて片輪づけるもの數を知らずこの風未  
 申の方に移りもきて多くの人の歎をなせり旋風は常に吹くものなれ  
 を斯ることやはあるたゞ事にあらず然るべき物のさとしとぞ疑ひ侍

りし

又同じ年の六月のころ俄かに都遷り侍りき平清盛がはからひにて都を  
の治らざるを恐れ同年のいと思の外の事なり云々之を世の人たやすか  
冬再び本の京に復しきらす憂ひあへるさま理りにも過たり然ぞとかくいふかひなくて御門  
 より始め奉りて大臣公卿悉く遷り給ひぬ世に仕るはその人誰か一人  
 故郷に残り居らん云々軒を争ひし人の住居日を経つゝ荒れゆく家は  
 毀れて淀川に浮び地は目の前に島となる云々  
 この後はそなく源平の戦ひ起り平氏遂に亡びて源氏の世となり頼朝幕  
 府を鎌倉に開き西紀千八百天下に號令するに及びては兵權政權ともに武  
 家に歸し鎌倉はますく榮えて京師はいよく衰へたり斯て元弘三年  
西紀千三百に至り北條高時誅に伏し建武後醍醐帝中興の業成り大内營造  
三十三年せられ省司諸制舊式に復せられしと雖も瞬間にして挫折し天皇南遷し  
 たまひ足利尊氏別に帝を京師に擁立す是より南北兩朝となり尊氏室町

に幕府を置て大政を握れり、三代義満の時南朝の元中九年西にいたり南北合一せしかば擅横さらに加はり子孫將軍の職を襲ひて十數世に及ぶされど足利氏代々治平甚だ稀にして亂臣賊子世毎にあらはれ其季世にいたりては殊に甚だし應仁の亂には大軍輩下におし入て足利義視と義隆と起り細川勝元と山名持隆との戦争となり勝元は兵十萬を率ゐて東に陣し持隆は兵九萬を率ゐて西に陣す是より戰亂打續き殆んど十年に及ぶ西紀千四百六十七年花洛は修羅の街と變じ市坊は悉く焦土に化し都民皆に安んずること能はずして右方左方に逃散りければ皇居の御垣もかたぶき破れ公卿の邸宅市民の肆塵は草茂り獺狐狸の住所となり果しを永祿年間西千五百六に及び織田信長京畿諸國を畧定して京師に入り宮闕の頽廢を修治し離散の民を安集しければ稍や京都のすがたを挽回せんとするをりから信長弑せられ尋で豊臣秀吉興り京都のなほ荒涼にして四方の際いづれともなく田舎の在郷の如くなるを歎き細川幽齋を召して洛中洛外の塚を定めしめ千本の時の土堤は存す皇室に供御料を獻じ親王門跡及

び公卿にも領地を附しなごしければ上下相和し都民安堵の思をなし京師漸く舊態に復する緒につけり斯て徳川氏の世となり家康幕府を江戸今のにひらき慶長八年家康征夷大将軍に任じ政權を掌握せし以來子孫相嗣て將軍の職を襲ひしかば政治の實權とももに繁榮は江戸に歸せしと雖も京師は依然至尊のまします皇都たれば海内の文華こゝに集ひ美術工藝園中に冠たり世すべて上等なる物品をさして京物といひ優美なる形様をさして京風といふに至る且二百六十餘年の昌平にともなはれて百業進歩し京師の繁盛次第に増加はりぬ然るこの長年月の間には多少の天災地異なきにあらず其中の大なるものは天明八年西紀千七百正月三十日の火災とす東は鴨川より西は千本通に及び公卿大名の邸百三十社寺九百廿民家十萬三千戸死者二千六百三十餘人にして皇宮も亦炎上せり將軍家齊松平定信に命じて造營を司近くは元治元年西紀千八百七月長兵の京師亂入とす長瀬の士福原元佃伏見に至り上書して毛利父子勤王の情を

陳べ七卿文久三年三條實美、三條西季知、東久世通禧、澤立嘉、四の復職を請たれど容られず、剩さへ長州脱藩の士を討んとしければ、長人憤激して之を當時の所司代松平容保の讒構とし、讒者を瘞して君側を清んとて兵を京師に入れ大に輦下を擾がし、飛丸宮闕に及び宮中の雜隊一方ならず、市街亦兵燹の爲に大半焼る、慶應三年西紀千八百六十七年正月にいたり、今上皇位に登らせ給ひ、この歳の十月將軍慶喜政權を奉還し、鎌倉以來武門の手に落たりし大權始めて皇室にかへり王政復古のめてたき御世となり、明治元年江戸に行幸したまひ、江戸を改めて東京と號し、皇居を茲に定めさせ給ひしと雖も、京都はなほ依然として都名を存し、皇居をもそのまゝ保存せられ、殊に大嘗會天皇即位の儀行する大典等の國典はこの地にて舉行せらるゝを恒例とす、且つ府廳設置せられて、京都及び山城一圓、丹波五郡、丹後五郡を統治し、疏水開通して工業及び運輸の便ひらけ、第三高等學校、同志社學校等ありて、四方より修學の徒群集し、都人は美術に長じ、工藝に巧にして、各種の物産盛んに

出れば更に衰頹の色なし、加旃延曆遷都以來時に動靜あり、世に治亂ありて、都民の聚散、皇城の榮枯なきにしもあらず、れと聯綿として、明治の東遷にいたるまで一千七十六年間の帝都なりしかば、其根ふかく其基かたくして、幾多の災變も全く荒廢に終らしむること能はず、復た興り興りて遂に今日のすがたとなりぬ、今は延曆建都の始めの壯觀には遠く及ばずして、當時京城の中央たりし朱雀大路の跡は、今いふ千本通市街の西なりと聞ければ、右京は夙に荒殘して多くはみな田野となりたるを知る、然とそその勢ひ更にまた東に移り、維新の後は、鴨東次第に人家を増し、疏水の利によりて、工塲建連り前の郊野は今市街となり、近年これを市に加へ、今回また茲に大極殿を建て、勸業博覽會も開設せらるゝに至りたれば、西に失ひて東に得、京都はいよゝゝ旺盛に赴く象を現はせり

さまゝにうつりゆく世もうこかしな

とほすめろきのすゑし基ぬは

皇宮沿革小史

上古質素の世には皇宮京城などの制も定らず、たい昔しながらの式にしがひて宮殿を營造し至尊こゝに坐して政を親らし給ひ、民みづから來りて調貢をさしげ、上下簡朴にして後世の煩冗なるに似ず、百姓農を以て生を聊すれば、簞下に居を移すの必要なきが故に當時いまだ都會起らず、都民なければ皇居を遷させ給ふこと難からず、故におはかたは御代ごとくに皇居を遷させ給へり。此は遷都にはあらず、皇居を遷させ給へるなり、而して皇の御成長の地にて直ちに位に即き然と世の中やゝに進み紀元千三百年そのまゝ天下を知しめし給へるなり

代西紀六百に至ては大化の革新もありて朝廷のさまも俄然かはりたれば文武帝の御宇西紀六百始めて京城の制もたち皇宮の制も定められたり、而して元明帝の和銅三年西紀七百年に大和國奈良に都城の地を相し左右京を立て條坊を區劃し皇宮を造り結構備はり規模大に張れり、その後また桓武帝都を山城に遷し之を百王不易の帝都たらしめんと欲し、更にそ

の規模を恢弘にしたまひ、皇室の制も甚だ大にして輪奐の美前古に類ひなかりき、爰にその皇室の制を述んとするに先だち神武帝以來の宮室の状況を示してその沿革を知らしむるは無要のわざならじと思へば更に古へに立かへりて之を略述せん

神武天皇中州を平らげ大和國橿原市郡に始めて帝宅を經營したまふこの時手置帆負彦狹知二神の孫に之を造らしめ給へり、手置帆負神彦狹知神は天照大神の瑞殿を造れる高天原の木匠なり、今その孫に造宮のこゝを命じ給へるは即ち高天原の典式に則らせ給へること著し、かくて其宮殿のさまは地を穿ちて土中の石をそのまゝ礎石に用ゐ、丸木の巨柱をその上に立てて萱を以て屋を葺き、斷木を屋上に列ね、之を榑風の兩端を高く突出して空を衝けり、之を干木或は比脫といひ、其極めて高く出當時天皇を稱へ申し、語に畝傍の橿原に底つ磐根に宮柱太敷たて高天原に榑風高知り始取天下すめらみことといへる是なり、今も伊勢の神宮にて其

梗概は知らるゝなり、斯の如き宮造をミアツカ或はミヤといひて天皇の殿と神宮との他には此稱を用ゐざりき、皇室の構造は紀元九百年代西紀十六七の頃までは皆おなじき様なりけんを應神天皇以降韓國の工人しはしば渡來せしかば韓風はより、紀元千二百五十年代西紀五百年に至りては隋唐の交通始まり次第に支那の風つたはりて宮殿の様もやゝに變りゆきぬ、然ば平城の宮も唐制を酌量して宜きに從はれ平安の宮城も唐制を取捨して善なるものに就れしなり、平安の大内裏一たび經始せられし後は永くその制をかへ給はず、世に治亂あり時に隆汙ありて或はすたれ或は及ばざるの歎なき能はざりしと雖もその標準としたまふ所はみな延曆創建の大内裏ならざるはなし、故に皇室のこゝを知んとせば平安京の大内裏を知らざるべからず、今これを述ん

大内裏即ち宮城は京城の北方一條と二條との間にあり、今の大宮其廣さ東西八町南北十町にして周圍に十二門あり、南面にあるを美福、東朱雀、中



の又次に南面したるは承香殿その又次に南面したるは常寧殿なり此殿もとは皇后の御座所にして后町とも稱せしが後に弘徽殿に移り給へり、  
 彌終にありて南面したるは貞觀殿なり一に中宮、應とも云て皇后の内職をさこしめす所なり此殿を御櫛箱殿とも稱す、その御櫛箱は特に婦人の職に關するものなれ、以上の五殿は中央にならび、東側にまた六殿あり、皆西面なり、南にある第一を春興殿といひ、その次に隣るを宜陽殿といふ、此殿は累代の御物を藏する所なり、その次に綾綺殿并に温明殿あり、温明殿の内には内侍所あり、綾綺殿の北に麗景宣耀の二殿ならべり、此二殿は女御或は後宮奉仕の女房の曹司なり、西側にも同じく六殿ありて皆東面せり、南の第一を安福殿といひ、その次に列べるを校書殿といふ、文字の如く文書を校する所なり、故に校書所藏人所もこの殿の中にあり、又北に隣りて清涼殿あり、此殿は天皇日常の御座所なり、故に身舎に畫御座あり、北の妻戸の内を夜御殿とす、東廂南の方に石灰壇あり、伊勢宗廟遙拜の所なり、この殿の後

に後涼殿あり、北に弘徽殿登華殿と相並べり、此二殿も女御その他の曹司なり、以上諸殿のはかに朱器殿、太子宿昭陽舍、畫淑景舍、畫北舍、東側進物所作物所、藏人町屋、飛香舍、畫疑華舍、畫襲芳舍以上西側等あり、また閤門内垣の門を云と中隔門外垣の門を云との間に華芳桂芳、蘭林の三坊あり  
 延暦遷都のち百七十年を経て村上帝の時にいたり天徳四年九月禁中火あり、温明、宜陽、春興、安福、仁壽等の諸殿ごとく、炎上し、其後、圓融帝の貞元元年西紀九百七十六年五月禁内火にかゝり、二年七月この時帝職曹司に遷りして同天元三年西紀九百八十年にも禁内火ありて殿舎ごとく、焚けて帝また職曹司に遷りして同四年七月新宮に遷りしたまふ、續てまた同五年十一月に炎上し、一條帝の長保元年西紀九百九十九年同三年、寛弘二年西紀千三條帝の長和三年西紀千四年同四年その後も次々重ね、回祿にあひ且は延喜西紀九百以後皇室衰微し、官庫空乏せしより遂には内裏も舊時に復せず、朝堂、院、豐樂院、その他の官舎等の顛倒破壊せしをも修繕すること能はざるに至りたれば、後は内裏再建のことも止み、皇居は宮



城の外となり此處彼處に遷らせ給ひて之を里内裏と稱しぬ、まして政柄の武門に歸せし以來は皇室いよゝゝ委靡せしが後醍醐帝のとき建武中興の業成り一時大政奮に復りて大内裏も造營せられたれど幾時もなく世はまた乱れて南北朝となり再び政權足利氏の手に移りその季世にいたりては皇室の衰へ極度に達しゆゝしき事ども多かりき、應仁略記は當時の皇宮のさまを歎きて曰く

花浴の体を告来るに二條より上、北山東西ことごとく焼野の原となりて其残る處は將軍の御所ばかりなり、禁裏、仙洞は定めて陣屋となりて南園の異類玉殿を汚す、變夷の夜る盡る誓固を勤めし陽明門、郁芳門乃至偉鑿門、達智門等四方十二の御門以下は凡て六畜の臥土となり、古へは名をだに聞かざる殿上の小庭、内外の大床、紫宸殿の錦張、賢聖の繪圖、悉くも姑射山の仙居、皇居の寶闕、かけても恐ろし云々

皇宮の状はかくも淺ましき極みなりしが永祿六十餘年の頃となりて

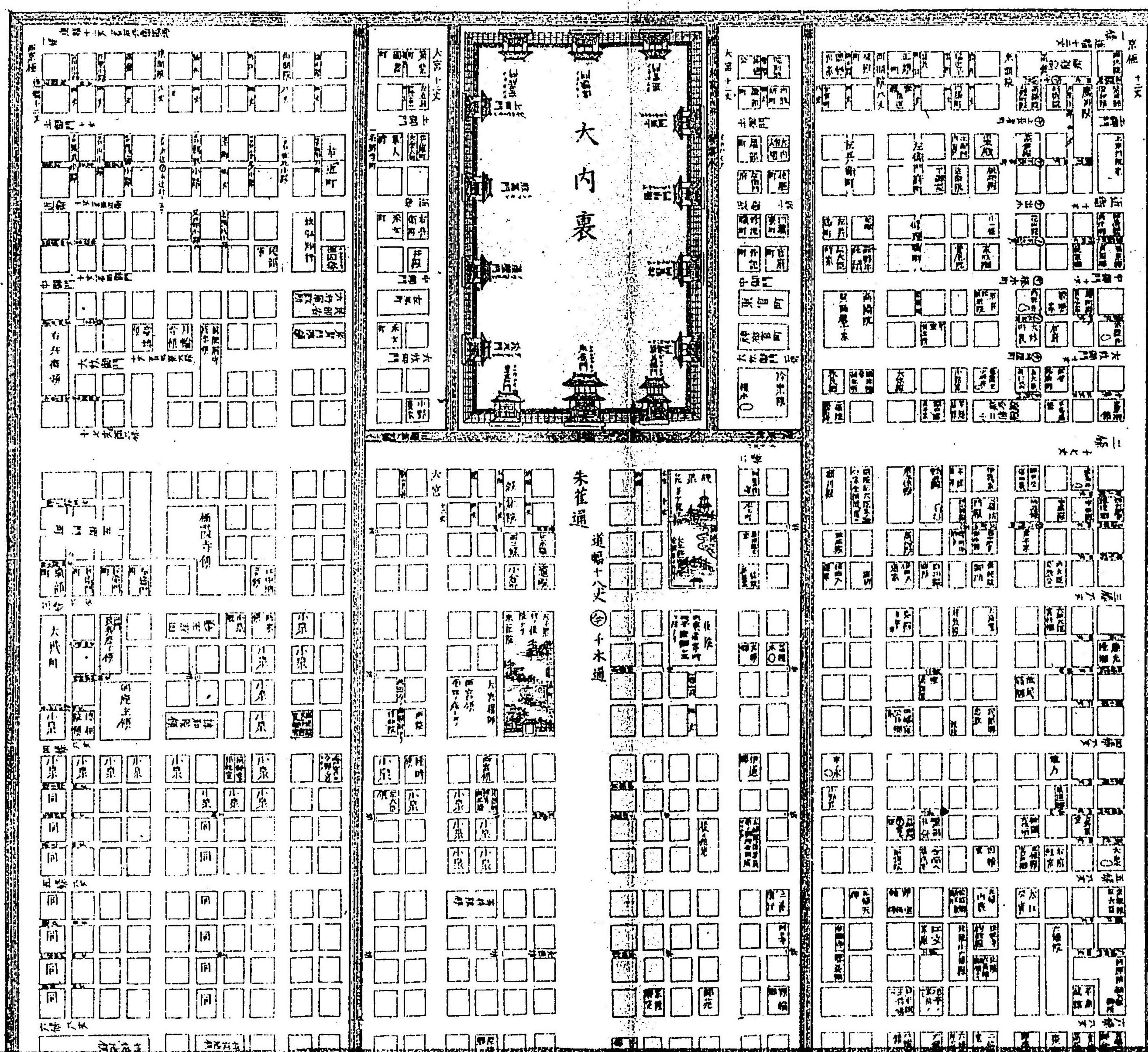
漸く三冬盡き一陽來復せんとするの期にゆへり、織田信長、徳川秀吉、竟にその功を成し其後慶長年間百餘年に至り、家康、禁裏、仙洞の境域、東北各一町餘を弘め其四方に石を壘み、石に刻て後世に遺す、且、兩所の宮殿を經始す、然るその後幾度となく炎上しては新築し、承應二年、炎上、同三、上、同二年、新築、延寶元年、炎上、同五年、新築、焚るも速かなれば建るも亦早し、何れも假殿の如き制なりしなるべし、故に天明八年、西紀千七百の炎上の上、將軍家、齊松平、定信に命じて造營を司らしめしに、定信、從來の皇居、卑隘にして其構造の式に合ざるを歎き、有職の士に就て古制をたし、其規模を大にせしかば、紫宸、清涼等の諸殿は、舊規に復したりといふ、造營費は上の大名に命じて、獻金せしむ、寛政二年、西紀千七百九十年、建殿、然るこの皇宮は、嘉永七年、西紀千八百に炎上し、安政二年、西紀千八百にまた造營す、全國人民の寄附金、現存の皇宮は、即ち是なり、今上天皇にいたり、王政復古し、皇室の御稜威も、かゝりやき渡り、宇

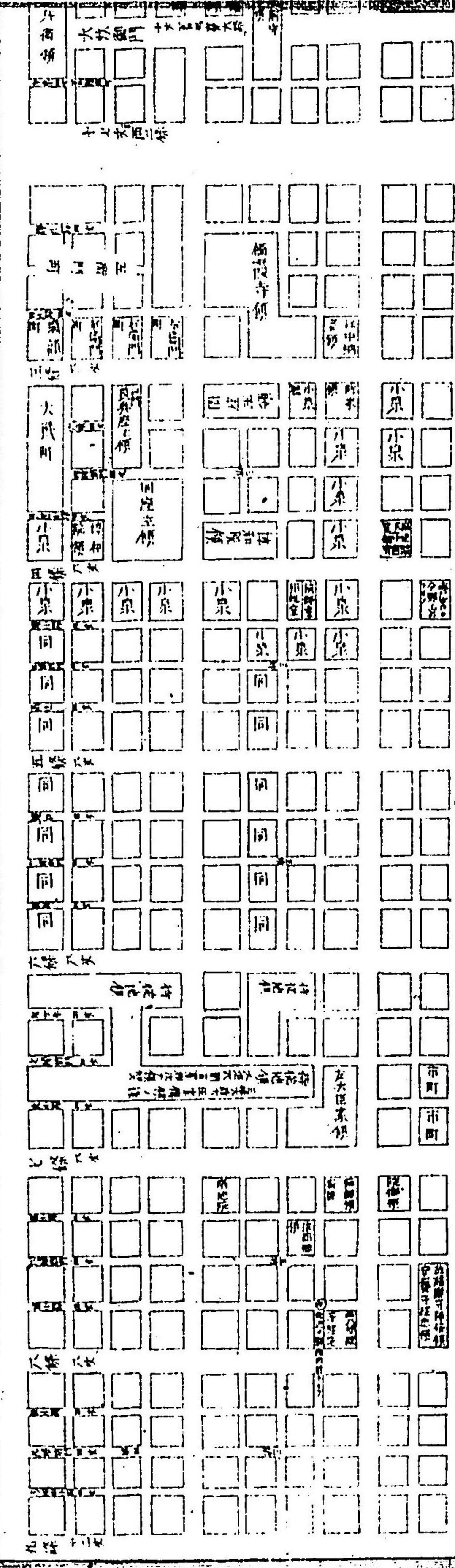
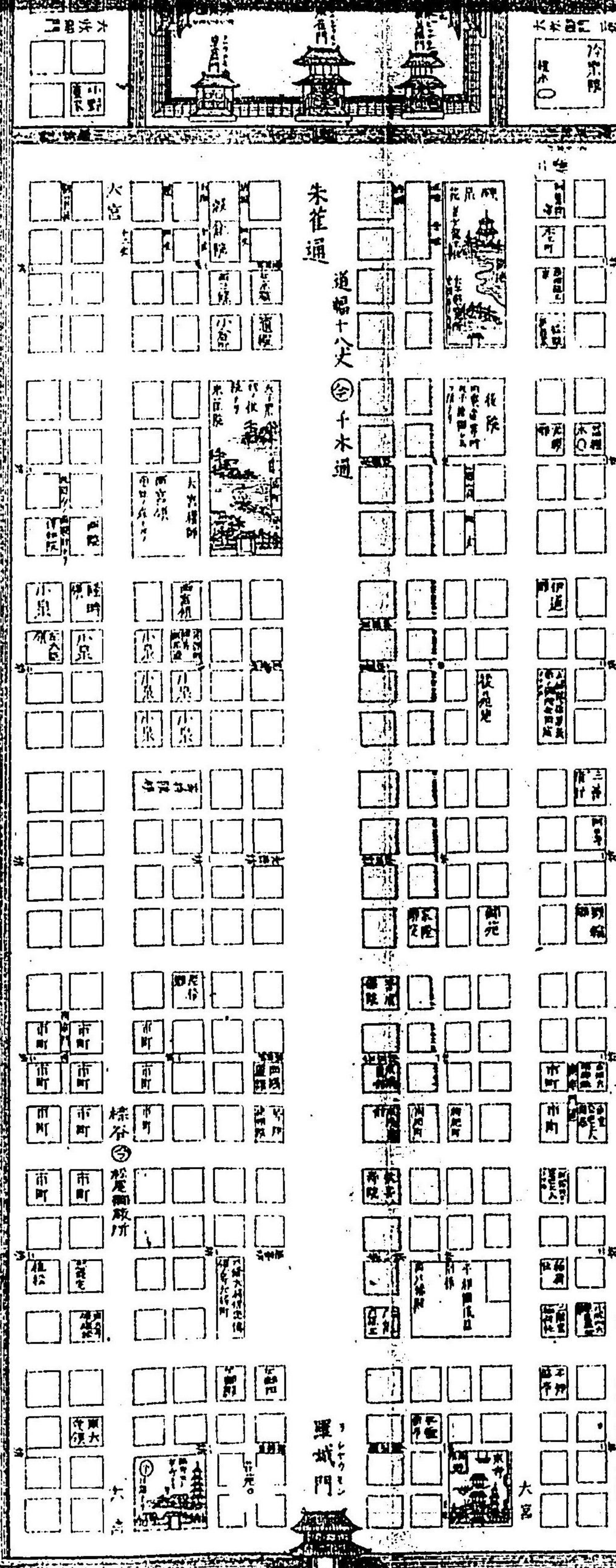
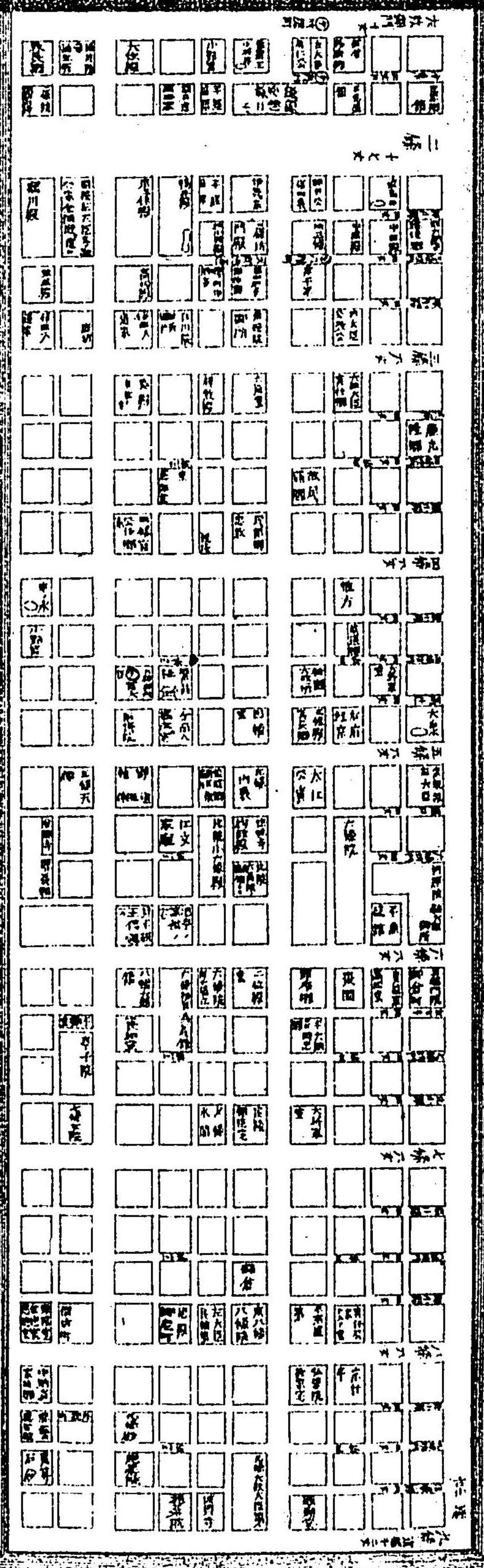
内外國の交通も開けたれば萬機を統べたまふ便により維新の初め江戸  
 城に遷らせ給ひて真本丸を皇居と定められしが明治六年祝融の災あり  
 更に舊西丸の地を卜定して皇城を經始し二十二年一月新宮に徙御した  
 まひぬ十七年十月起工して二こゝに於て千七十餘年來の帝城たりし京都の  
 皇宮は常に鎖されて寂寥たりと雖も天皇あつく愛護して之を保存した  
 まへば舊形なは依然たり皇室の榮ひますと共に延曆聖帝の鴻圖は永遠  
 に存してその蹟つひに亡ぶることなからん

うつりこし世にも雲のみわらかは

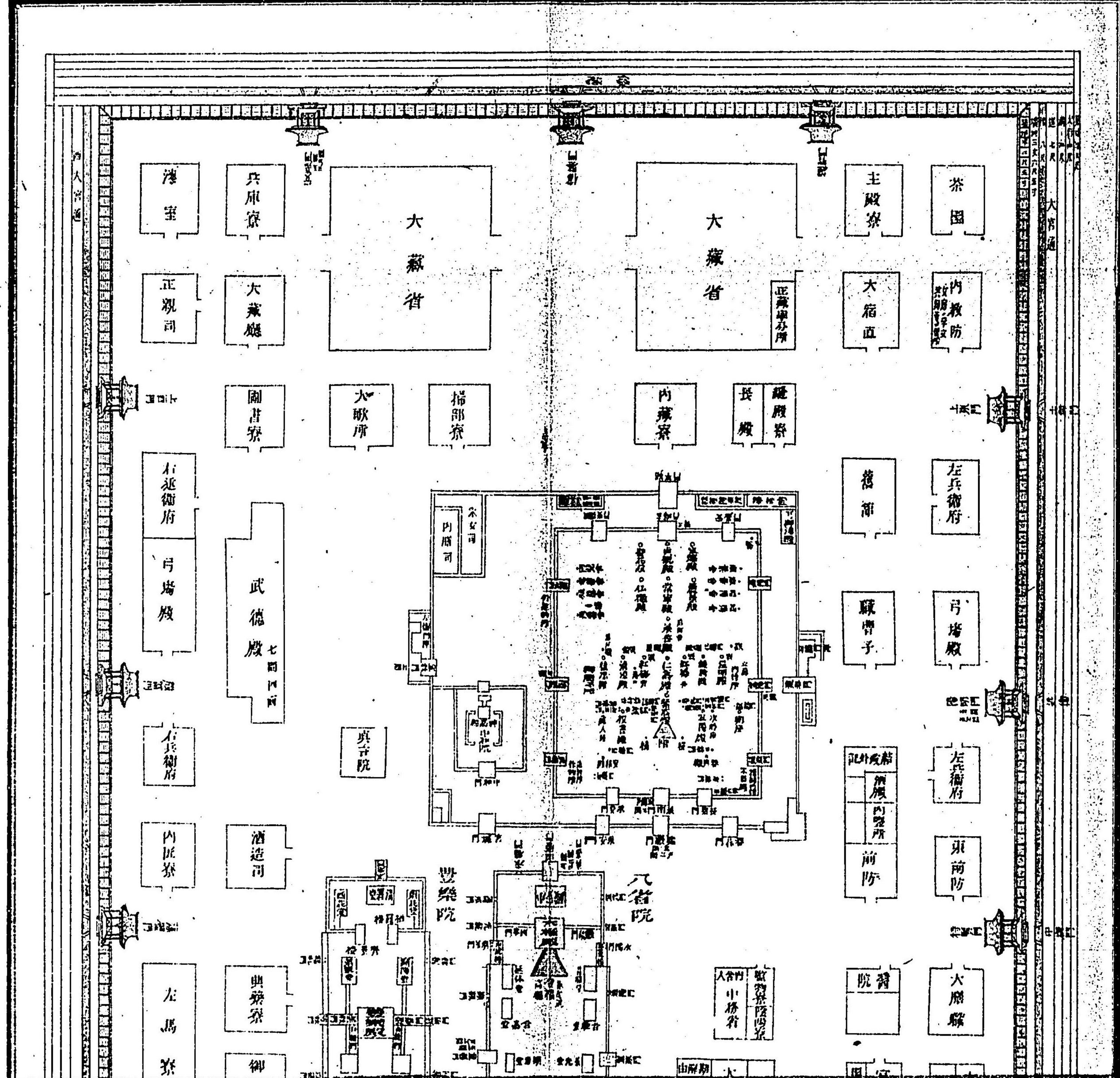
むかしなからに仰かるゝかな

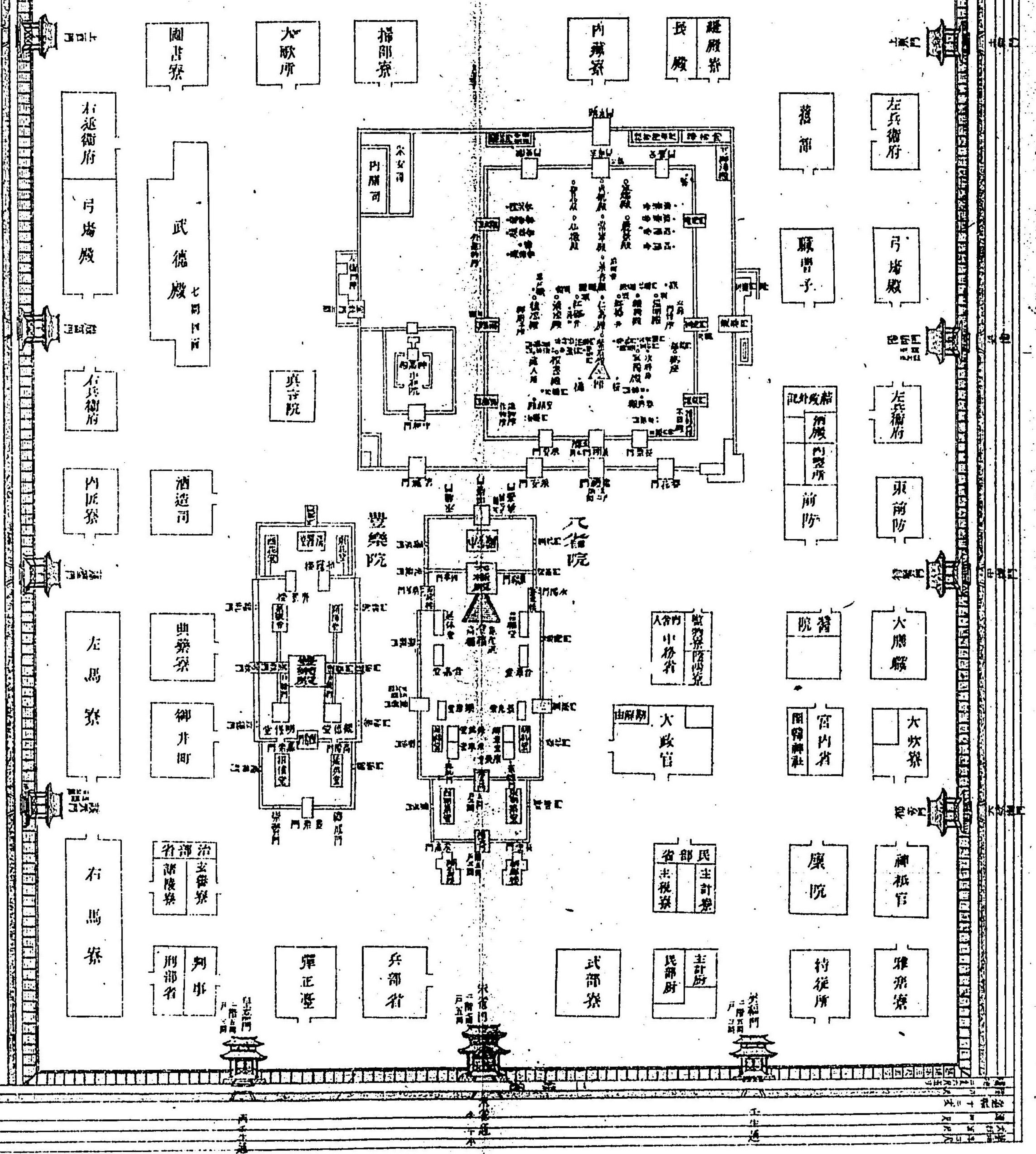
大内裏京都總圖





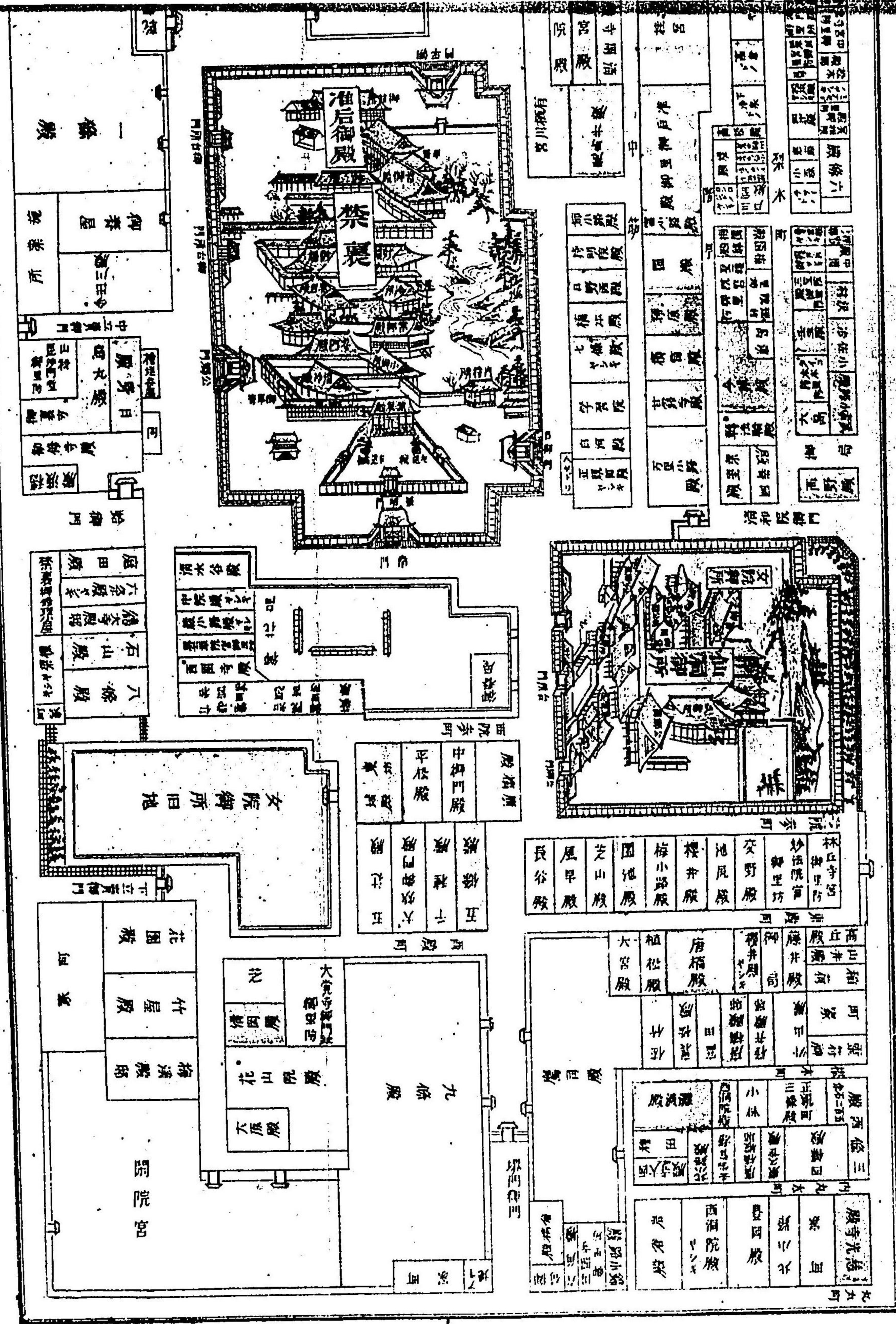
大内裡圖





此圖係根據  
清宮圖說  
繪製







美術小談

本邦の美術國たることは宇内に隠れなきことなるが單に美術國と稱するのみにては尙ほ足らず、美術の富國とこそ稱すべけれ、凡そ美術に屬するもの皆具足して缺るところなし、繪畫、彫刻、製陶、繡織、髹漆および金銀銅鐵の技にいたるまで一として他邦に劣らず其意匠の高雅なる其工作の巧妙なることは常に外人の歎賞する所なり

各國亦かならず特有あり何れの國にも他邦の及ばざる美術あるべし、然るその數多くも二三に止まりて我日本のごとく總てに渡れるは殆ど稀なり、而して他邦のその勝れるものも我國に入來れば更に一層の光榮を増し又や久うして終にはその本國の風を脱し日本固有の体に化して日本物となるを常とす其狀恰も世人の奇とする化石洞のごとし、百物かの洞に投すれば石に化し万技わが國に傳はれば日本に變ず

本邦上古より既に多くのものを創造せり、神代の時日本紀元前を稱す西紀前六百四十一年より先

石凝姥命いしりよめのみことあり銅を以て鏡を造り鏡工の始天目一個命あり、瓊瑤青瑯玕等を以て各種の玉を製し玉工の始玉柵機姫命あり、璽糸及び楮麻糸を以て緋羅、倭文布、和多閉、荒多閉等を織り織工の始又陶工ありて、甕、毗良迦、手扶、埴、罎の類を造り陶工の始木匠ありて宮室殿舎を造り、彫刻の端緒も當時すでに開けをりて石片に刻きめる人像、古器に彫彫たる神代文字等のたましく存して今に遺れるがあり

然を時なは素朴の世に屬し百工の業も未だ發達せざりしが紀元六百三十四年垂仁帝三年、西紀二百七十七年にいたり先に新羅より歸化せしもの子孫天日神に從ひて歸化せし者近江國鏡谷にて陶器を造る、これ新羅陶法の本邦に入し始めにして其後千二百二十三年雄略帝七年、西紀四百六十二年のころ雄略帝いたく工藝の事を獎勵し給ひて韓國の陶工高貴を徵して河内國桃原に居らしむ、これ百濟陶法の本邦に傳はりし始なり、この後遙かに隔りて後堀河帝の御宇西紀千二百二十二年及ぶ尾張國春日郡瀬戸邑の陶工加藤四郎左衛門景正といふ者支那

宋に渡りその陶法を傳受して歸る、これ支那陶法傳來の始めにして以降彼より我に來りて製陶に従事せしもあり我より彼に往て其業を學び歸りしもありて支那様の陶器盛んに製造せられたり永正年間、西紀千五百四十年勢松阪の人神宗といふ者支那に往て磁器の製法を學得て歸り其法を肥前唐津の工人に傳へ萬治二年西紀千六百五十九年明の遺臣陳元寶歸化して尾張の名匠元寶燒是なり

繪畫の如きも其起り固より本邦にありしと雖も須佐之男命の首に畫額を畫のありし雄略帝の御時西紀四百七十九年に至るより百濟より因斯羅我きたりて其國の畫法を傳へ、武烈帝の御代西紀四百九十九年に至る魏の文帝の裔なる辰貴といふ者ありて畫を善くし、崇峻帝の御時西紀五百九十二年までの間百濟より畫工白加きたり、推古の御宇西紀五百九十五年僧曇徴高麗より歸化す、曇徴は尤も彩畫に巧なりき、是等はみな三韓及び李唐以前の畫風の我に傳はりし者にて大に本邦繪畫の發達を促せり、斯て紀元二千三百餘年の頃はひとなり西紀千六百四十年支那は明亡びて清興り前朝の臣民多く歸化せしが其中には

書畫に巧なる者少ならず陳元贊の如きは尤も之を善くし明末の畫を傳へたり其後享保年間西紀千七百三十四年に及び清の商客伊孚九南宗の山水を巧にし沈南蘋花卉を善くせしかば是より此流の畫風大に世に行はれ人之を文人畫といふ

機織の業の外國より入て我が發達を助けしは應神の十四年西紀二百八十三年支那人融通王百二十七縣の秦民を率ゐて歸化し大に蠶織の業を興し支那様の紺帛製法を傳へ、その後また百濟の照古王より織工西素を獻じ、雄略帝の時には西紀四百五十七年百濟の織工定安那徴に應じて來り始めて韓様の錦を織る所謂韓錦是なり、後世にいたり天正年間には西紀千五百支那の織工泉州堺に來り明様の紋紗および錦を織り、慶長年間には西紀千六百和蘭陀の法を傳受して羅紗を製し、又南蠻の法に倣ひて毛字留を織り、寛永年代には西紀千六百和蘭陀の法によりて天鵝絨を織出せり彫刻建築等の業も佛法の傳來ともにも佛工造寺工の渡來せしによりて

其技著しく進歩す佛法は欽明帝の十三年西紀五百五十二年に傳はり、佛工は來朝も同帝の御代に始まり其後崇峻、推古の阿朝にも佛工造寺工を百其他わが濟より貢し皇極帝の御時には西紀六百四十年支那風の建築も起れり其他わが國の文物技藝おほくは皆よその文明に誘はれて發達進歩せしことは史籍も之を證して疑ふべき廉なし、然る日本の工藝美術はみな他邦よりの輸入にして今在るところの者は悉皆摸倣に成れりと想ふは甚しき誤想にして日本美術の皮相だに未だ見能はざるものなり、日本は摸倣國にあらず成美國なり、そは陶器、機織、繪畫、彫刻など三韓支那の工人來りて各その國の様式を傳へしと雖も三韓支那の形跡はいつしか絶えて美妙ますます加はり他に比すべきやうなき一種の特色を以て東洋に卓立するに至ればなり

朝鮮には今は陶器の見るべき者なし支那は陶器の本所とおもひチヤ、ニースウエルの名稱をさへ陶器に負すれども其實歐洲諸國にて第十七八世紀の頃より美術品として愛重せしものは皆わが日本の陶器なり、又

レスチアの蒐集品中にてその多数の部分を占めたるは日本陶器なり  
と英國の美術家某もいへり

繪畫に於ても平城朝以前のことは暫くいはず、文徳帝の御宇西紀八百の  
百濟百濟河成河成字多帝の御代西紀八百の巨勢巨勢金岡金岡本勢本勢氏氏世世書書をを善善くくすす後後世世日

白河帝の御時西紀千七の宅摩宅摩爲成爲成また戲畫戲畫に名高名高き鳥羽鳥羽僧正僧正覺覺猷猷すするる鳥

羽羽土佐土佐風の畫祖畫祖とも稱すとも稱すべき藤原藤原隆能隆能本勢本勢氏氏世世書書をを善善くくすす日日高倉高倉帝

の御世西紀千七の藤原藤原光長光長高倉高倉のの時時光信光信後後土御門土御門の時時光起光起藍元藍元の時時ををいいふふ

土御門帝の御時西紀千七の慶恩慶恩住吉住吉法眼法眼と稱すと稱す後世後世等名手等名手枚擧枚擧するするに暇

なし、此等の畫様は何れもみな韓にあらす支那にあらす所謂日本風にし

てその精妙高雅遙かに支那の上に出づ、白河帝の頃とかや支那人わが國

人の扇面に畫ける平遠の山水を見てその精妙に驚き支那の妙手もい

で及ばんとて歎稱止まざりきといふ、織物にも是と同じきことあり孝徳

帝の御時西紀六百四織部司織部司を置給ひしが其所屬工人の織出せし錦頗る精

巧にして華章明美なりしかば支那人歎賞して之を神錦と稱したりき

髹漆、詩繪、螺鈿、象眼の種類は歐米諸國にても之を日本固有の妙技として

疑ふものなければ茲に論せず、彫刻に就て少しく辯せん、是亦その技の發

達は既に述しどとく三韓支那の輔導によれ世を歴るともに精巧に

進み彫工かの一機軸をひらき終に日本美術の佳郷に入るに及びて

は三韓支那と全くその趣を殊にせり、古くは佛師稽文勳、稽文會父子元明

等西紀七百十餘年の人にて大和の長谷寺法隆近江國の高男丸高男丸八八百百二十二十餘餘年年の

佛工ありて多武多武條條大臣大臣の像を造る造るる、同同時時に志古志古麻呂麻呂といいふふ、會理會理阿闍梨阿闍梨の手手手觀音

及及びび虛空虛空觀觀音音の像を造る造るる、佛工佛工の名手手にして勳勳を奉じじて多多く佛佛像像を造る造るる

子子を定朝朝といいふふ父父に經緯緯の名匠匠にて其其作作巨巨利利蓄蓄寺寺法眼法眼院院助助二二男男に定朝朝の子子子

紀紀千千百百二十二十餘餘年年の人なりなり西西法印法印運慶運慶て有有名名の佛師師なりなり其其子子湛湛慶慶亦亦妙妙工工なりなり是

等は何れも佛工の妙手にして康圓康圓運慶運慶の孫孫孫にて鐵鐵倉倉彫彫はは此此人人に權輿輿すすももい

りり淨淨阿彌阿彌具具を合合合せせ塗塗るる、之之を木木木蘭蘭造造と稱しし鐵鐵倉倉彫彫の少少少しくしく變變體體せせししもも五五色色の畫畫

美術小談

三十七

千人は龜山帝ころの人にて西紀康助花園帝の頃(西紀千三百餘年)の二人にして鎌倉等  
 は鎌倉彫の名匠なり、刀飾の彫工には後藤祐乘(西紀千五百餘年)の一人にして後藤  
 柄笄の類に鑲めり、小後藤光乘(西紀千六百餘年)の一人にして後藤即乘(西紀千六百  
 西紀千七百年)の一人なり、彫刻は後藤家三作と稱し、祐乘(元祿年間)即ち横谷宗珉  
 享保の頃(西紀千七百二十年)の名工にて、鑲金といふ一種の彫鏤を創意と  
 信に受し、もと彫刻の圖案を有名の書工元及び鐫の名工には明珍信家(天明  
 (西紀千五百三十四年)の人にして有名なる信立の彫法性の甲を作る、又鐫とい  
 嵌することを巧にせり、此より前天授のころ(西紀千三百七十餘年)明珍宗安とい  
 並びに唐威の鋲を作りしは宗安なり、假面の妙手には三光坊(後土御門帝の  
 七十年頃)の人にて其弟子是開吉満(文祿年間)西紀千五百九十餘年)の一人、木彫の名  
 手には左甚五郎(後水尾帝の時)西紀千六百二十年頃)の人、奈良宗貞(奈良彫の祖  
 少くは五郎に一宮長常(京師の彫工にして鳥生に妙を得たり)奈良利壽(寛永ころ  
 百二十年頃)の人にて奈良彫中興の妙等あり、少かにても美術に心あらん人は  
 此等の名工の作を見れば我言の浮誇ならざるを知るべし

海外の學士美術家も夙くこゝに着目し、彼是日本美術に就きて品評せし  
 ものゝ多かる中の一を擧て慧眼なる歐洲美術家の日本美術を歎賞する  
 梗概を示さん、ルソー、フォールト、アルコツツ氏の説に曰、日本國美  
 術品の特性を目撃すると同時に又その美術の品位、起原、進歩等を研究す  
 ることは少しく美術に志あるものゝ尤も悦ぶ所なり、蓋し日本美術品に  
 は一種特別な光澤を有するが故に殊に然りとす、余全世界に於て古今  
 未だ日本のごとく美術上新奇の意匠に富る國あるを見ず、これ決して過  
 言にはあらざるなり、實に日本人は字内の美術界に於て一大新派を造り  
 出し、者なり、斯て日本の美術はその理想を一度は支那に取しといへど  
 も中古以來日本は日本固有の美術を發達せしめたるを以て今日に於て  
 之を見るときは日本美術は遠く支那美術の上に超過せり云々、又曰、諸金  
 屬の細工を見るにその製作その技能、實に非凡なり、日本人は世界の大達  
 人なりと叫呼せざるを得ず、彼等はたゞに歐洲人の未だ解し能はざる秘

法を以て歐洲人の決して成能はざる好結果を生出するのみならず、その模型及意匠に用ゐる原料を自在に處辨し一種特別なる品格をその製作物に與へ清廉の風雅美の体を之に有せしむ、殊に金、銀、銅、鐵、類の象眼、鍍金の技倆にいたりては、パリ、ベルリン等の大製造場の製作者も遠く企及し能はざる所なり云々

然ばわが日本の美術國にして百物みな美術の性質を帯び外來各種のものをも我が美に化せしむる不可思議の美術力を有することは外に歐洲識者の辯明あり内に古今事實の徵証あり他に亦何をか贅すべき、斯て前條述來れる日本美術の大要を知るを得ば各種の美術品に目を下して大槪その眞を探るに難からし

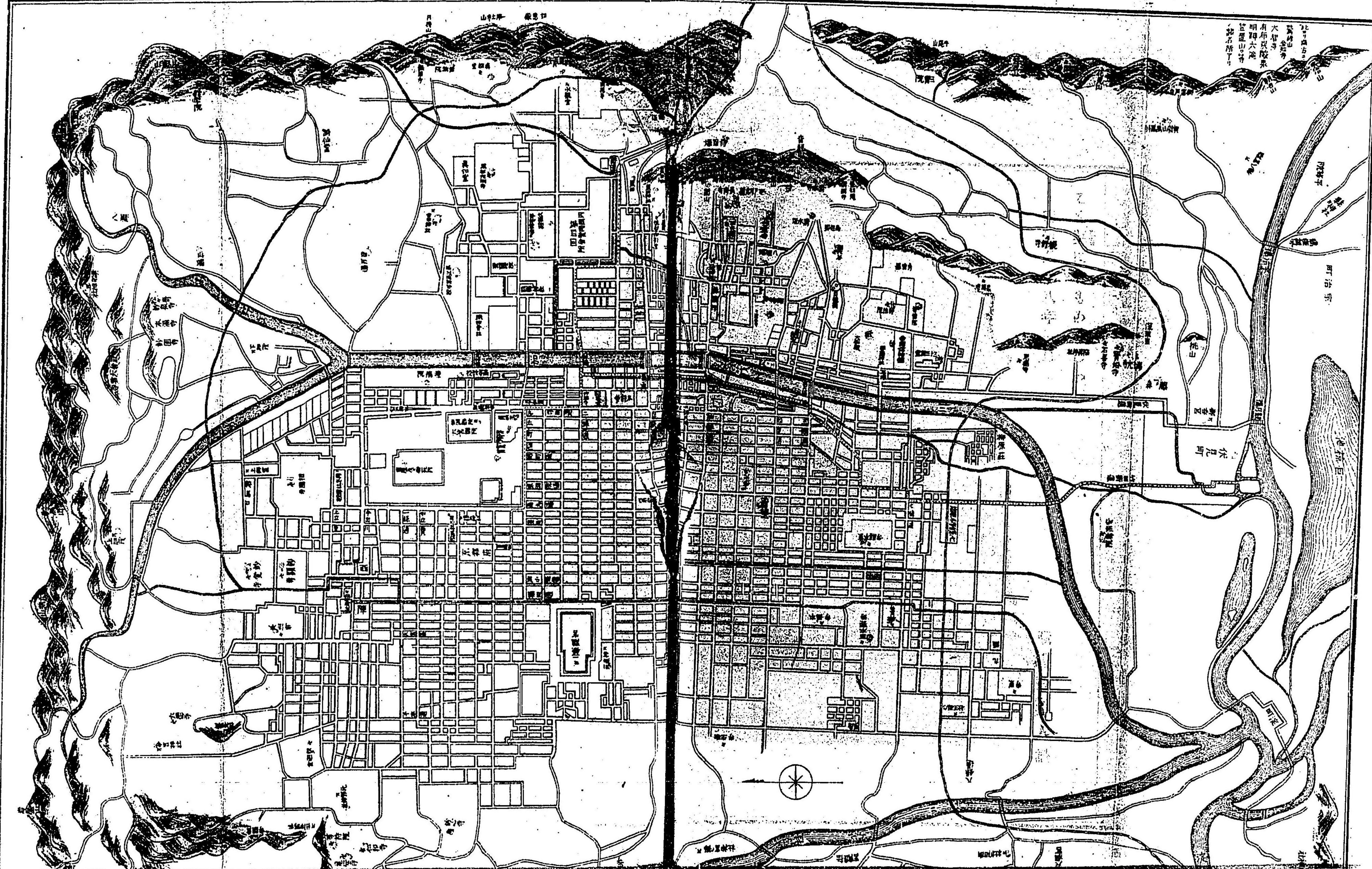
爰には日本の美術をいふが主なれば他邦との關係は論じられざるにその美術の事は言はざりき、關係も亦上古より尤も親密なりし三韓支那のことは陳しがその他には及ばざりき、然るその實他邦との關係は韓支のみには限らず間接には佛法の東遷とよもに印度、希臘等にも關係ありて其文物の我に傳へられしも少なからず降て足利氏の季世に至ては南洋諸島及び歐洲各國とも交通して其文明の巧技を我に輸入したれば日本美術の關係を細かに論せんには容易のことならず、然る我が日本の美術に於る特性に就ては變る所なく、且つ日本美術の情況を概知するには前段の陳述にて略ば足ぬべし

而して我に關係ある諸國の美術品は彼我對照して參考の益となる多し、況んや彼の美術品の中その優等なる者には希有の珍品も亦少なからぬに於てをや、嘗て三韓支那等より我に傳へしもの、中には彼しばく革命の亂に遇ひて國の珍品重器を失ひ偶々我に遺りて存するものあるに於てをや、幸に京都には日本美術品の他に此等の外國美術品をも藏する舊廟名刹少しとせず、その所藏の什寶を列擧して内外の美術を示し且つその作者年代等を詳かにせば或は之によりて美術社會に小補を與る

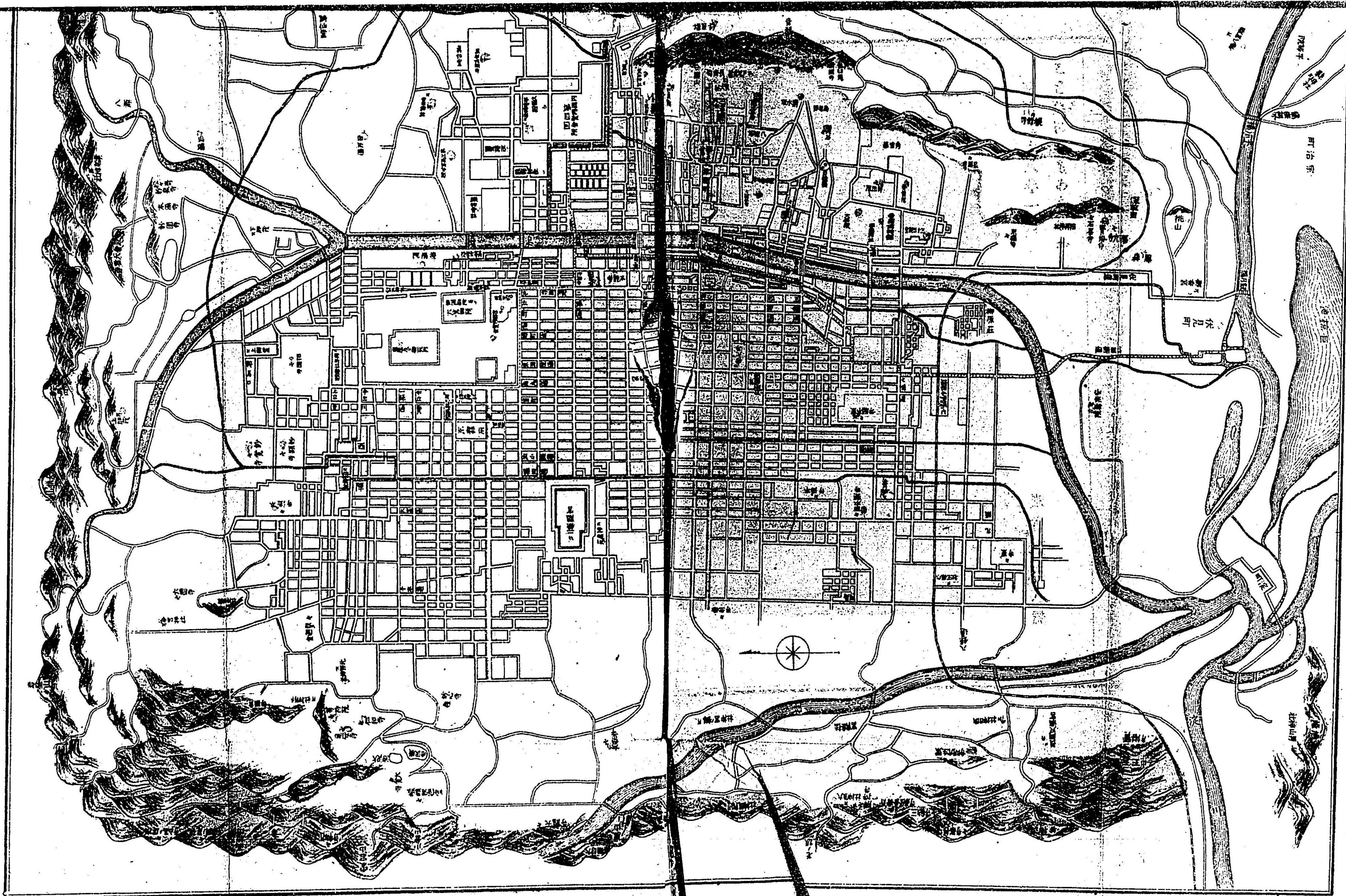
こと莫<sup>モ</sup>にしもあらじかし  
明治二十八年一月

黙香廬主人識

京 都 及 近 傍 明 細 地 圖







きやうと

第二編

京都勝覽第一日 三條大橋より四條大橋

◎三條大橋 三條通に架す 京都三條大橋の一なり 當橋に四條大橋と稱す 初め

天正十八年 西紀千五百 豐臣秀吉その臣増田長盛等をして之を造らし

む長六十三間 幅四間五寸 欄干の擬寶珠は紫銅にてみな諸侯の寄附な

るが明治十四年の改造にも同廿七年の修築にも擬寶珠はそのまゝ襲

用したれば今なほ擬寶珠に寄附者の姓名および土功の銘歴然として

存し人をして坐ろに三百餘年の昔を追懐せしむその橋銘に曰く

洛陽三條之橋 至後代 化度往還 人士石之礎 入地五尋 切石柱六十三本

蓋於日域 石柱橋 濫觴乎

天正十八年庚寅正月日 豐臣初之御代奉増田右衛門尉長盛造

當橋は東海東山北陸等諸街道の起點にして里程元標も亦こゝに在り

故に諸道の旅客輻湊して晝夜往來絶えず旅亭軒を並べて橋の東西に櫛比せり、大江資衡が三條橋の詩に曰く

畫橋雲裡出、千尺彩虹懸、絡繹行人影、飄然似上天。

◎三條小橋 高瀬川の西中町許 橋下の流を高瀬川といひ加茂川の支水にして南方伏見に達し淀川に入る、慶長年間吉田了以の開墾せし所にして百貨運輸の通路たり、この橋の東詰より北に入れば高瀬川の東に沿ふて一街あり木屋町といふ、旅亭、貸席、割烹店等軒を並べ鴨水その家の東に流る、亭榭水に臨みて遠くは叙岳を望み近くは東山を眺め四時の景とも佳し

◎新京極 三條小橋の西二丁餘り三條通 この地もと誓願寺の境内に屬せしを以て誓願寺と稱したりしが明治維新のち道路を開通し更に呼て新京極といふ、こゝは都第一の熱鬧場にして演劇、音曲、輕技、軍談、落語その他種々なる遊樂物および飲食店並に色々なる商舖等みな此一通衢の中にありて遊人肩摩晝夜雜踏を極む

因に云、誓願寺は天智帝の創建にして初め大和にありしを平安遷都のち山城乙訓郡に移し後また今の元誓願寺通り小川の西に遷し、天正年中七八十年に至り秀吉の命によりて現在の地 京極三條東に移しゝなりといふ

寺の南に一基の石塔あり傳へて和泉式部の墓と稱す、式部は西紀千年頃の時に上東門院に仕へ文學式部老後尼となりて誠心院立にて後世之を和泉式部のに住す院はもと一條の北小川に在りて誓願寺に隣りしを誓願寺と同時に移しゝ由なれば式部が墓もその時移したるにや

◎蛸薬師并に鋪天神 蛸薬師は永福寺と號し本尊は即ち薬師如来にて石像なり傳へて傳教大師の作と稱す初めは叙山の北谷に在しを後に二條室町に遷して堂を營み水上薬師堂といひ又その境内

に水澤あるを以て澤薬師堂ともいひしを後世こゝに移し遂に澤薬師を誤りて蛸薬師と呼び祈誓を立るもの蛸を禁ずるに至れりとかや神佛にこの類のことも多しその愚憐むべく其迷笑ふに堪たり

錦天神社はもと紫苔山観喜光寺時宗にして開の鎮守にして河原院の舊趾 邸内の枳殻にありしを天正年中 西紀千五百 豊臣氏の命により寺院を今の地に移せる時にも遷座せし者なりしが維新のち神佛混合を禁止せられしにより佛寺の所屬をはなれて純然たる神祠となり新たに社殿を造營せり神靈は菅公自筆の畫像にして其名高く境内は繁華の中央に位するを以て賽人常に絡繹たりまた観喜光寺の什寶に一遍上人の繪傳十二卷あり圓伊法眼の筆にして北野神社の天神縁起に次ぐべき著名の者なり

◎四條大橋 四條通り加 京都三大橋の一なり、祇園社家條々記録を開するに永治二年近藤帝この歳即位ありて康治始めて祇園四條橋を造りし

こと見え、その後も或は流失し或は造築せしこと彼是の書に見ゆ、今の鐵橋は明治七年の改造にして洋風を模したれば舊形を失ひしと雖も是また新装の壯觀ありて三大橋の名に耻す、夜來電燈かゝりやきて四邊白晝のごとく水影遠くきらめきて橋下銀波を流せり、夏期に至れば水上磯頭に假床をならべ席をまうけ燈を點し篝火をたき夜を徹して雅俗雜踏す之を四條河原の納涼といふ往時は西曆六月七日の夜より十八日びて川開きをなすことせり梅窩山樵が詩に曰く

不<sub>レ</sub>泛<sub>二</sub>游<sub>一</sub> 船<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>架<sub>レ</sub>棚 小床臨<sub>レ</sub>水有<sub>二</sub>餘情<sub>一</sub>  
晚風柳外人如<sub>レ</sub>織 半里平砂既<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>

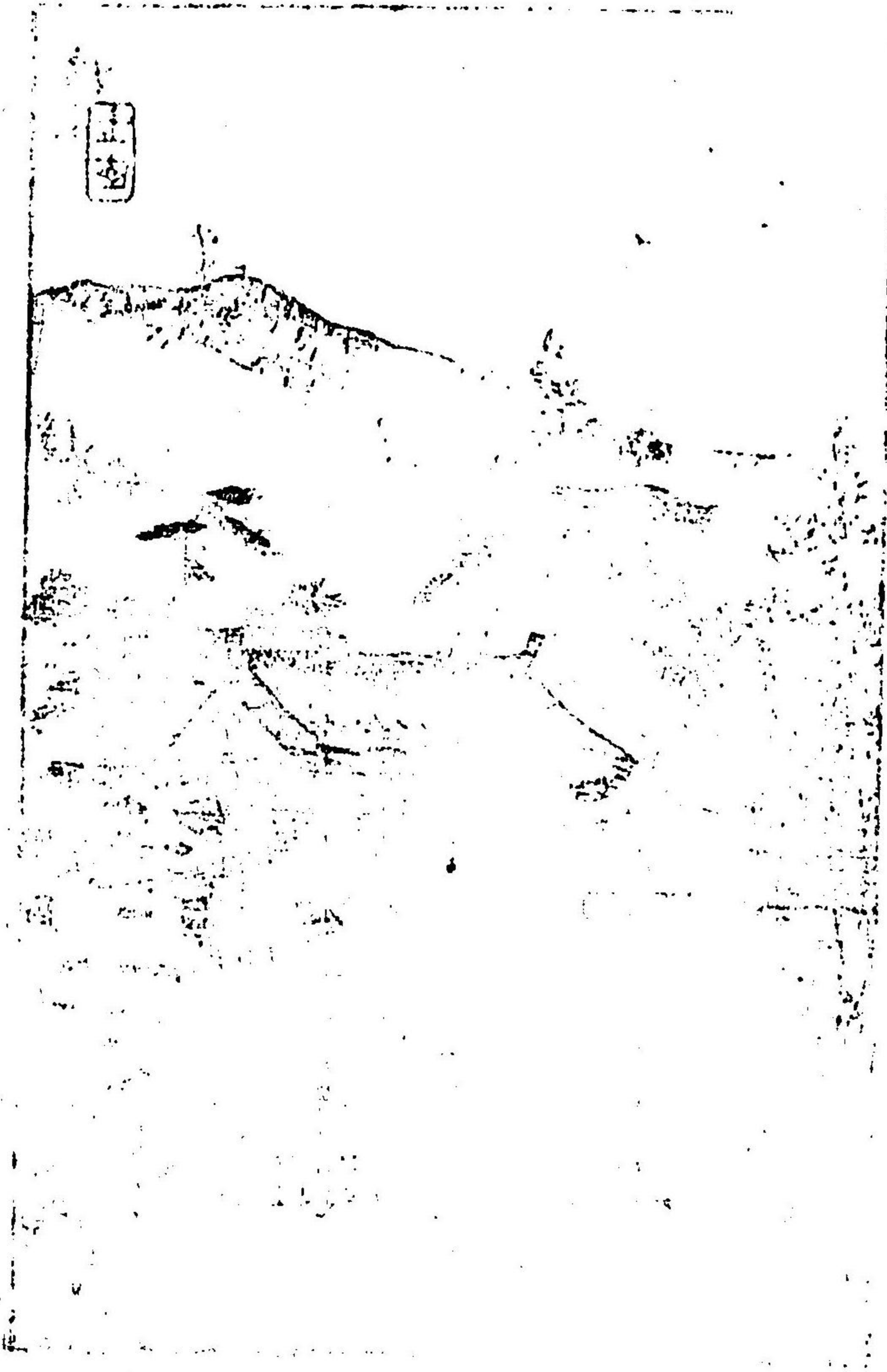
すゝみする鴨の川原は都人錦をあらふ江にこそ有けれ 有功  
船もなき鴨の川戸をふき渡る風にのりても涼む夜は哉 景樹  
當橋の東詰に劇場あり南芝居北芝居と稱して両座相對へり此處を四條仲町といひ爰より以東を祇園新地と稱し酒樓妓院軒をならべ歌音

やしんとうさや  
Yasaka Temple.



戸々に起り、柱聲樓々に湧く人こゝに來りて平生を誤らざる者殆ど稀なり、實にこの地は京都の銷金銅たり

◎八坂神社 祇園新地の東端 當社の濫觴を尋ぬるに聖武天皇の天平五年 西紀七百三十四年 吉備大臣唐土より歸朝の日素盞烏尊に牛頭天王の名を附し始めて播磨國廣峯に祀り貞觀十一年 西紀八百六十九年 に山城國八坂郷なる感神院に移し、同十八年に藤原基經威験に感じて新たに社殿を造營す、その模形紫宸殿を表したりき 後世改造するも雖も皆その様式による、故に 其の居殿を移して神社に進らしむと云は誤なり 此歲時疫流行せしかば之を疫神の崇りとして卜部日良麿といふ者京中の男女を率ゐて六月七日と十四日とに疫神を神泉苑に送る、然るに其翌年も疫病流行しければ百姓また神輿を神泉苑に送る、爾來例となりて毎歲この神事を行ふ之を祇園會と稱す、後世にいたり市内の諸町より各種の山鉦を曳出し、て繰りめぐる、その行粧の美にして壯なることは花浴祭禮中にも多く



見ざる所にして頗る著名の祭なり、年々この祭を觀んがために遠近より集る老若男女の數はその幾萬なるを知らず、この祭を祇園會といひ祭神を牛頭天王といひ其社を祇園社といふは皆神佛混合より出し稱なるを維新の後はその混合の風を除きて之を純然たる神社となし例祭は七月十七日と廿四日とに定めらる十七日に神輿を本社より出して四條として廿四日に至りまた本社に還幸す

因に云、本殿の中央は素盞鳴尊伊弉諾尊の御子西間は稻田姫尊東間は八王子天照大神と素盞鳴尊の盟約の時に生を祀る然ども佛者は天竺の佛神に附會し陰陽家は曆道の神に配合し世人をして遂にその由るべき本所を知らざらしむ而して普通一衆に稱し來れる牛頭天王及び祇園の號は慈惠大師の傳に天延二年西紀九百七十四年云々蓋斯神は素盞鳴尊にして播に在ては廣峯と號し尾に在ては牛頭天王と稱し陽成院の御宇に當り來りて京師に化す且兒に託して曰く我は祇園

勝覽第一日

四十九

精舎を護る神なり因て名となすなと云ればその起りの甚だ古きこと知られたり又これを疫神とせしも佛説秘密心點如意藏王陀羅尼經に固より佛經にはあるに凡そ天王に十種の反身あり曰く武答天神曰く牛頭天王云々曰く疫病神云々牛頭天王癩鬼を縛撃して疫難を禱除すと云る等に専ら依れるなるべし然る西域の神と本邦の神と關係なし固より妄誕不經の説なれと世人を惑はし來れること久し

營社の境内には嘗て櫻樹多くして花のころは殿堂樓閣さながら白雲の中につままれたるが如くなりきといふ祇園の御神詠とてわが宿に千もとのさくら花さかば植おく人の身も榮えなんどわりて此御歌によりて櫻樹を奉獻する人多かりしといへば然もわりけんされと近來は櫻樹昔しはせにはわらざれと社の東方に一株の垂枝櫻あり人これを祇園櫻と稱して昔しは許多の櫻に負はしと名稱を今は一樹に負ふ

に至れり巨幹繁枝高く空をつき廣く四方に垂れ一株にして數百株の林をなすに似たれば祇園櫻の名を已一株に負ひしも實に故なきにあらすその花爛漫の候にいたれば夜櫻とて人みな夜の艶色を賞し夜夜觀花の客ひきも斷ず篝火暗をてらして花光と相映じ醉顔紅裙相照して亦燃るが如し

高架火篝映萬枝 一群裙屐晚歸時 醉餘暫倚繩床坐

花氣暖來欲泌肌 梅窩山樵

◎智恩院の東北神社 華頂山大谷寺と號し淨土宗の總本寺なりこの地もと南隣の圓山と一封域にして叡山の別院南禪院に屬せしが山門十二代の座主慈鎮和尚これを法然上人に與へしかば上人一向專修のため





さあふらひ  
in-mind



上人の塔あり又東南の丘上に鐘樓あり方四間にして洪鐘を懸く  
 丈八尺直徑九尺厚九寸五分寛永例歳正月十九日より七日間御忌大法會  
 年所(西紀千六二十餘年)に終遣す  
 わり其時これを用ゐれども日常は之を撞打せず當山櫻樹多きが中に  
 糸櫻淺黄櫻の二株尤も世に名高し

輕暖輕寒二月時 櫻花最早是垂絲 欲知春色繫情威  
 先問福庭鐵飽枝 齋餅居士

當寺にはまた什寶頗る多し○觀經小經の兩曼荼羅の拵なりといふ○  
 地藏菩薩の立像寺傳小野 ○彌陀三尊の座像李龍 ○彌陀勢至觀音の三幅  
 對宋の張 ○五百羅漢能宋の法 ○五髻文殊僧都珍 ○二十五菩薩來迎の圖惠心  
 ○後白河法皇の肖像土佐古將 ○淨土曼荼羅元の勝 ○九品曼荼羅元の幸  
 ○花鳥の畫二幅呂紀 ○荷葉の畫徐熙 ○籠に牡丹の畫元の勝 ○咸陽宮の  
 圖二幅雄子 ○山水人物の圖仇英 ○毘沙門天に群鬼寺傳金剛の筆 ○十王

の圖十幅信宋の陸 ○袈裟張四曲屏風俊乘坊より圓光大師開祖法然の ○法華經斷酒一卷弘法 ○十六觀經紅紙金泥寺傳唐 ○大方廣佛華嚴經經の紅紙金泥宋 ○玄宗の花軍及び源氏の圖の屏風二隻 ○十八羅漢の帖斷欠十一葉明 ○蓮華の畫一幅照華除 ○文珠の圖一幅寺傳金 ○圓光大師行狀繪傳四十八卷勅筆にして後伏見帝及び後二條帝の宸筆その他親王 ○羅漢の圖一幅寺傳光 ○地藏曼荼羅一幅信忠筆陸 ○文珠二童子の圖寺傳梁 ○鳳凰に鶴の畫二幅紀の筆 ○桃李園沈香亭の圖一幅 ○金色の彌陀三尊の圖一幅惠心 ○妙音辨財天の圖一幅寺傳飛彈 ○黃鶴樓と岳陽樓の圖二幅司殿 ○布袋の圖に一休和尚の贊一幅 ○厨子入十一面觀音寺傳行 ○勢至菩薩の座像寺傳傳教大師の持來りしを後に奥州の ○銀の花瓶一個 ○鍍金の板佛二葉この他にも數十點あれどその重なる者を擧て餘は畧す

●植髮御影堂川三條通白 舊は青蓮院々内に在しを近年堂舎をこゝに移し本尊阿彌陀佛の右脇の壇に親鸞上人植髮の像を安置すこの像は上人九歳の春青蓮院慈鎮和尚の許にて雜髮せしが和尚その時の容貌をうつしおき剃り落し、翠髮を像の頭に植る者なりといふ之を植髮の尊影と號し眞宗門俗の偶像する所にして美人常に群をなせり

青蓮院はこの南隣に在り始祖傳教大師のより大僧正行立師實の息 興し覺快法親王第七皇子の爰に坐りたまひし以降代々法親王の御治職ありし名に高き寺にして書の一御尊圓流又粟田を開かせられし尊圓親 王伏見帝もこゝに住職したまひぬ斯る由緒ある寺なれば什寶も多かりしが惜いかな去明治二十六年の春回祿の災に罹り輪奐の美も什寶の珍も悉皆烏有に歸せり其後朝廷よりも恩金を下賜せられ有志者も饑

●粟田神社青蓮院の東 當社は明應年中西紀千四百 卜部兼俱の勸請にして武將の若公名源義輝の本居と崇信せられし社にて祭神は八王子なり八王子といへば蘇我氏東國の祭神と舊は粟田天王或は威 神院新宮など稱したり

當社の東の高丘に吉水園と號する遊園あり、近來こゝに貸席を新築して遊人の便に當つ、南に山を負ひ東北西の三面ひらき前に黒谷の高塔翠松の間よりあらはれ遠く四明鞍馬愛宕等の諸嶽を望み脚下に花浴の諸街を俯視す景色の絶佳たどふるに物なし

●栗田口の陶器より京師に入る路口なり、左右に陶器師の家軒をつらぬ、京都名産の一にして昔は大日山の土をとりて製す物を煮るに火にかけて撰せず、その煮たるもの味ひ亦美なりといふ之を栗田焼と稱してその名世に高し

附 栗田焼史 寛永元年 西紀千六百の頃、尾張國瀬戸より三文字屋九右衛門と云者始めて栗田の里に來り住して専ら茶器を製造す、其後九右衛門關東へ召され三代將軍より茶盃の御用命せられ年々各種の茶盃を燒て調進し數代つゞきて燒物御用を勤む、薄玉子色の盃をかき召京焼御茶盃と唱へ、淡黄色の盃を少くかけ中程より下に赤目十色なるを御茶盃と唱へ、淡黄色の盃を少くかけ中程より下に赤目十色なるを御

召赤目御茶盃と唱へ、燒物師にては青燒と稱す、黒の御茶盃に用かゝる、この他にも御好御座茶盃御野茶盃な初代九右衛門の陶窯は栗田口今道町南側人家の裏字華頂畑と云ふ所にありて製陶の用土は建仁寺の東なる遊行といふ所また神明の邊及び東岩倉山、神明宮、栗田大路の傍の上にて、寺眞性院といふ大伽藍ありしが應仁の亂に兵火に罹り今は僅に小堂あり、故に世人呼ぶ大日山ともいふ、等より取しが後にはその地絶て元祿十年 西紀千六百 關東に請願し江州野洲郡南櫻村の山を給せられ其山の土を以て陶器を造る、同里に陶工多し、昔九右衛門の當時専ら燒出し、ものは茶入、茶盃、猪口、鉢、香爐及び禽獸、蟲、魚、偶人の体にして、人の巧致を賞翫す、後年次第に同職の者増加し、寶曆八九年の頃、西紀千五百十には凡そ二十軒ばかりとなりぬ、然る此頃は重に世用の土瓶、茶盃、その他雜品のみを燒出し、九右衛門の家は追々衰微して御用の茶盃品物柄年々に愈惡に流れしかば、惇信院、徳川の代栗田口の茶

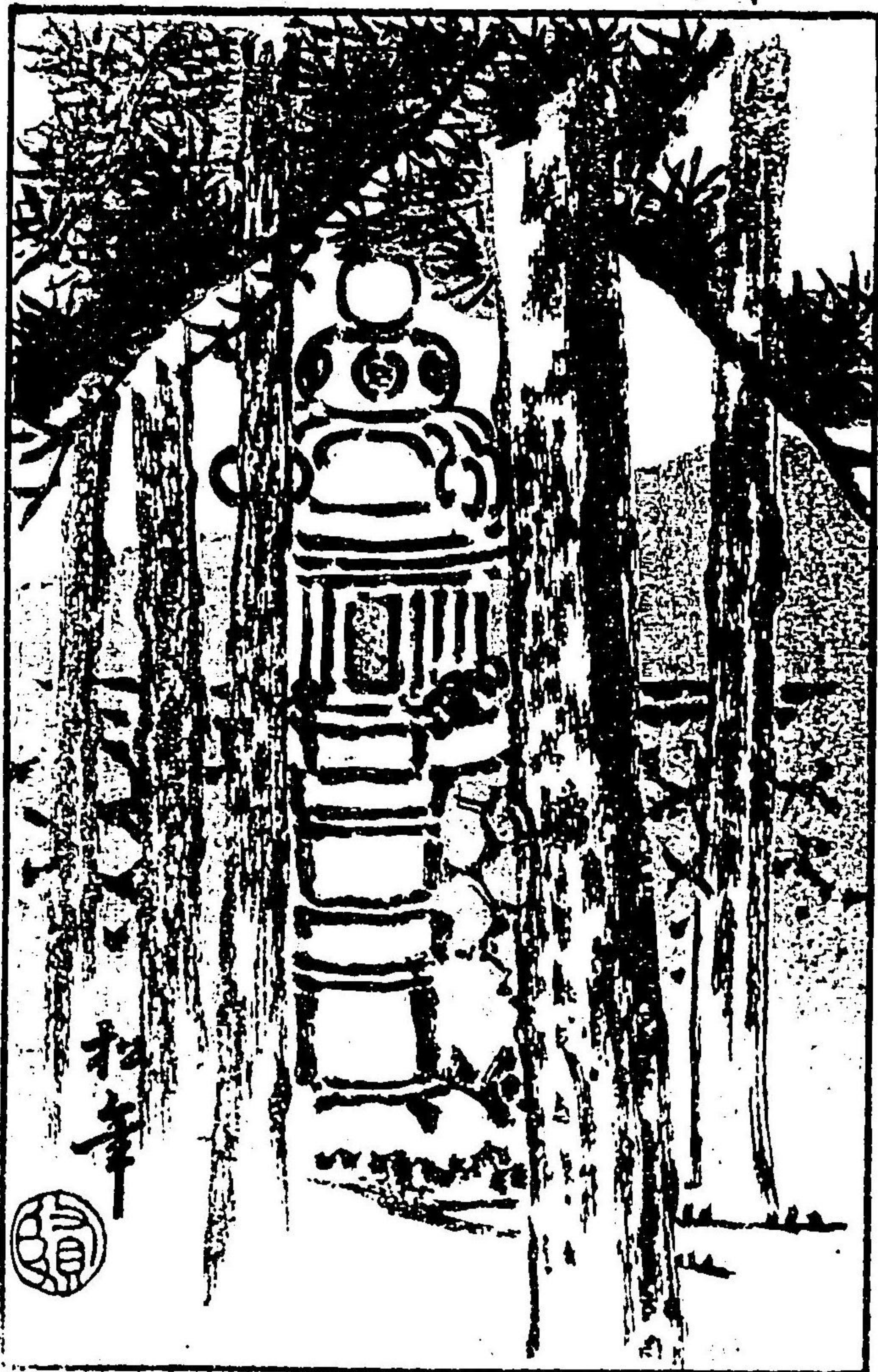
盃師等を取調べられて其時青蓮院宮の御用陶工錦光山鋸屋喜兵衛  
 岩倉山鋸屋吉兵衛兩人へ更に御召御茶盃の御用申付られ六寶曆九右  
 衛門の跡はその後子孫の相續者累絶せり而して元祿年中に關東よ  
 り給せられし江州の地は粟田の里よりは道程十里餘ありて御用の  
 製造に不便なるを以て寶曆八年に之を返上しその後洛東岡崎村  
 の邊にて地主相對を以て土を買取り御用の茶盃を製造す錦光山、岩  
倉山等に  
 入に金參拾兩づゝ年崩しにて關東より貸與へたりといふ一また帶山帶屋  
 與兵衛と云ふ者ありて禁裏の御用職を勤め毎年正月大福の御茶盃  
 を燒き津玉子色の藥をかけ紺青にて其他臨時の御用にて各種の品物  
 を燒く諸侯がたの館入御用陶工には寶山茶盃屋文蔵といふ者あり  
 この外にもなほ窯持の陶工數人ありて茶器の類並に土瓶茶盃急須  
 燒行平及び世用の品々を燒立て諸國へ盛んに賣弘めしが近年にい  
 り其技いよゝゝ進みて精巧を極め和澤富潤彩畫艶麗にして善美を

盡す現時名を知られたる陶工は錦光山宗兵衛丹山陸良實山文蔵帶  
 山與兵衛等にして其製品の海外に輸出せらるゝもの亦多く製陶の  
 業月に年に盛なるに至る

◎疏水運河 幹線の水南禪寺の前にあつたり博覽會敷地の南 明治十八年に  
 起工し同廿五年に及びて竣成す近江國大津町三保崎より琵琶湖の水  
 をひき三井寺の山麓を穿ち二千三百七十餘間の隧道を通じて山城國  
 宇治郡山科村にいたる更に曲折たる溝渠を経て日岡山に達しまた六  
 百餘間の隧道を過て蹴上に出づこゝに舟溜所ありて荷物はインクッ  
 ンによりて南禪寺前の舟溜所まで運搬を上下し水流は小隧道に入  
 て南禪寺の南に出で煉火石造の水道に瀉ぎて西に走る水道は鱒虹の  
 ごとく蜿蜒として翠松の間に隱顯す是亦疏水の一壯觀たり斯てその  
 水幹支の二線に分れ幹線は南禪寺前なるインクッラインの下を流れ遂  
 に加茂川の新運河に合し支線は若王子の前を過ぎ鹿谷淨土寺等を経

ろうと、おんぜんあ

Nanzen-ji: Stone Lamp-post.



て更に西に折れ加茂川の川底を通り京都市の北を遡りて堀河の上流に入る

磯道なに事もひらくる世とて足引の山の下にも舟のゆきかふ

鳴神のくしき力をつかふ世は山に舟さへゆきしにけり

●南禪寺 東三條の北、南 瑞龍山太平興國南禪々寺と號し京都五山の上に

置かる 五山とは天竜寺、相國寺、慈仁寺、東福寺、万壽寺、初め京都の中に在しを明

て、宗は派なりし此地に往昔三井寺の別院最勝寺、或は最勝光四天王寺又と

云るが有りて爰に道智僧正の僧正住す、その後年歴るに隨ひ替廢に

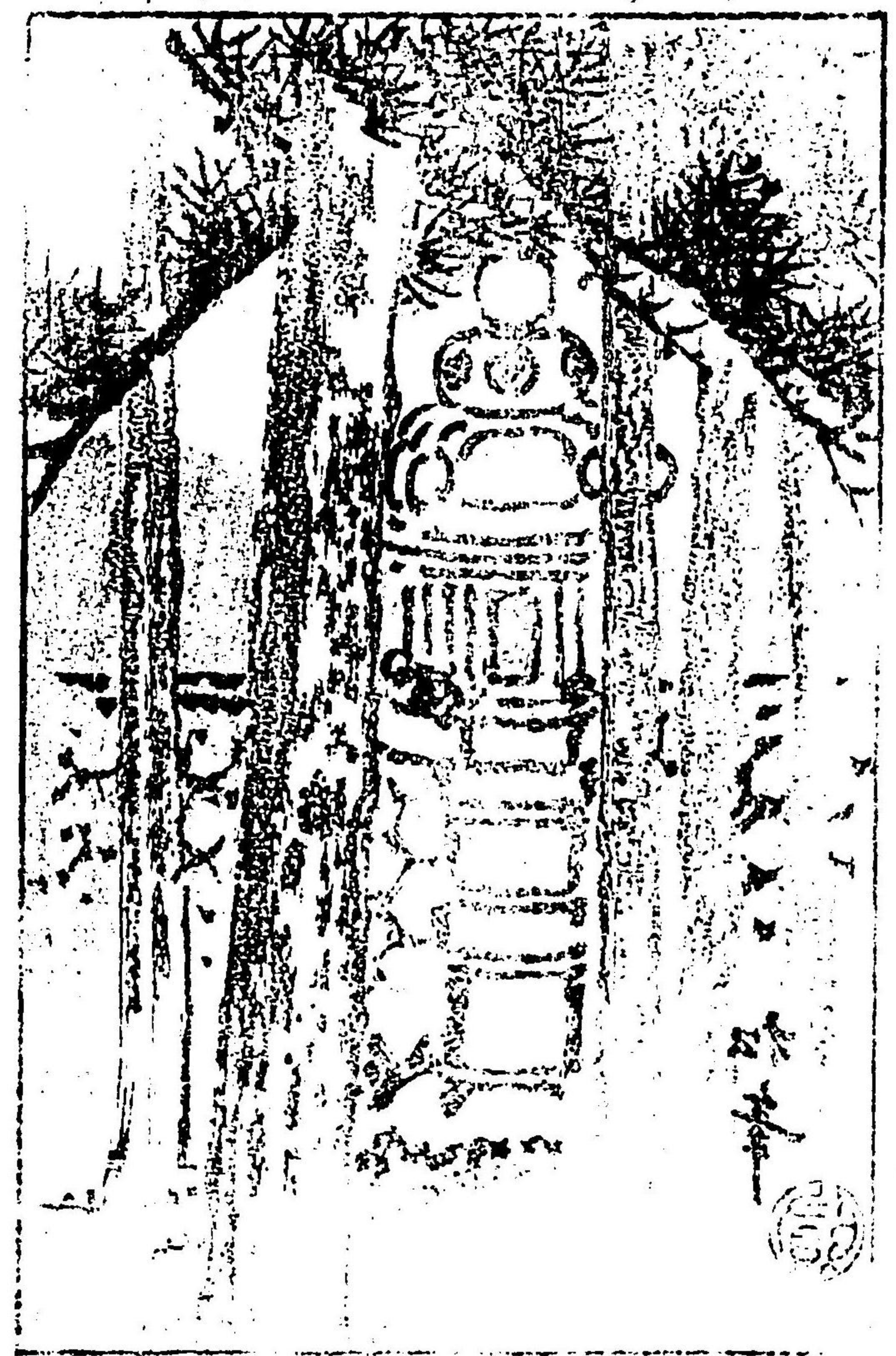
及び弘安年中西紀千二百にいたりて龜山上皇離宮を營み給ふにより

宮外には公卿の館舎をたつらねて滔々たりしが正應の始め西紀千二百

宮中に物怪ありて障をなし衆人しばしも安寝すること能はず、陰陽頭

に之を卜はしめれば故最勝院の道智の靈この地を愛惜して障を

なすなりといふ、この時南都北嶺の諸師下は呪術巫祝に及ぶまで百計



たい手を拱くのみ、同四年勅して東福、釋普門開山無闍和向を召給ひしに  
 物怪跡を匿して上下安寝す、上皇叙威の餘り宮を革めて寺となし更に  
 大佛殿、祖堂等を増建したまひ樓閣、伽藍、巍々として金碧煥煌實に五山  
 の上位たるに恥ざりしと雖も應仁西紀千四百の乱にあひて兵火に災  
 上し其後いたく荒廢して今は僅かに小部分を餘すに過ぎず、山門の如き  
 も始めは龜山上皇の築かせ給ふ所にして五鳳樓その上に聳む建治帝  
 後宇多親ら瑞龍山、太平興國、南禪々寺と筆を築させ給ひしが是亦はろ  
 天島多親ら瑞龍山、太平興國、南禪々寺と筆を築させ給ひしが是亦はろ  
 びて今在る山門は寛永四年西紀千六百藤堂高虎藩主の伊勢津の再建に  
 係り閣上に大阪出陣のとき從者の討死せし徒の靈牌を安す、門前に石  
 造の大燈爐あり、高二丈餘、軸長五尺六寸、廻一尺餘、寛永五年佐久間大膳亮勝之  
 の寄進なり、山門を入れて右方の山腹に龜山院の御陵あり、山門の南なる  
 天授庵には開基大明國師の墓あり、同所にまた細川幽齋の墓あり、正四  
 川元常の殿子にして實は足利十二代義晴の四男なり、歌道を窮め茶道に通ず、

世これに文武兼備の名將を仰ぐ歳七本堂の傍より東に進み山徑をゆく  
 こと敷丁にして駒瀨あり巨巖左右に岨ち飛泉その間より落ち老樹蒼  
 鬱として畫なは暗し古來こゝを神仙の佳境と稱す

涼しさに心のよりて來て見れば岩はしるなり駒か瀧つせ 眞彦

當寺の什寶には支那人の手に成れるもの頗る多し○山水漁舟の畫横

物一幅三松 ○山水樓閣の畫鶴の間の襖に張付く寺傳 ○墨竹の畫二幅子越

固 ○睡鴨の圖一幅萬國 ○山水の畫二幅然師筆高 ○山水の畫一幅北殿 ○

山水の畫二幅呂紀 ○山水の畫二幅秋景一は聖相文珠の像

寺傳李龍眼の ○十六羅漢の像一幅寺傳足利義持の ○藥山李翱禪會の圖

一幅馬公 ○羅漢一幅西寺傳印度の ○釋迦三尊思恭筆 ○十六善神の像寺

には張思恭の筆と云ふ宅磨良賢 ○涅槃像一幅寺傳張思恭の筆普通の圖

一種の妙あり或説に恐らくは西紀 ○觀音像一幅寺傳金 ○觀音の像收

○十六羅漢十六幅美術のしるべ云内三幅は宋畫なるべし ○融道縁起二卷

土佐光 ○若に雁二幅林良 等なり此他にも無名の畫幅に見るべきもの少

なからず塔中の金地院にも亦什寶あり○山水の畫一幅村 ○山王祭

の圖屏風一雙不詳 ○菅雁の畫一幅○木造の地藏二軀同拈華の釋迦像

一軀また其方丈の間の畫は狩野尙信の筆にして庭前の林泉は小堀遠

州の作なり南に隣りて東照宮の廟あり竹を欄にたり樓門 唐門 等あり

りてその形式は日光廟祠の風を摸せり

○永觀堂南禪寺 聖衆來迎山禪林寺と號し淨土宗西山流西谷派の總本

山にして無量壽院と稱し又俗に永觀堂と稱す當山はもと東山進士藤

原關雄の山莊なりしを文德帝の齊衡年間西紀八百 眞紹僧都請て佛刹

とす第二世宗叡の時清和帝之を歸依し貞觀五 その後十數世を歴て永觀律

師の住職たりしとき衆僧と共に行道念佛を修せしに彌陀佛壇より下

てともに之を行ふ律師信威の餘り暫く乾方に向ひて躊躇しければ本

尊左を願射て永觀通しといひ其後面貌もとに復らず世に之を見返り本

の形より後世遺附會せしものにて寺社の縁起には此類のことも多し固より信すべきに非ず次に尋たる來迎の既も亦然りこは山鏡より附會せしなるべし律師威涙を流し是偏に末世の衆生を攝取引接の證鑑なりとて自らその由縁を記し此像を本尊とす斯ることより堂を永觀堂と稱せりといふ以上の奇蹟は永保二年二月二十五日の朝ありまた聖衆來迎山と號する故は寛治二年西紀千八百九十八年九月八日の夜律師聲を勵して念佛しけるに忽ち光明かきやき聖衆來迎して星のごとく庭前の松樹の上に集會せしに因る本堂の前には柏木とされいふ門を入て右の方に蓮池あり池邊一圓みな楓樹なり四時の風光ともに佳と雖も晩秋梢を染るころの美觀にまた及ぶものなし

古寺の庭のみみちを見かへれば秋なから日も遅きかけ哉 正裕  
東山はなはかりかは霜もまた 笈齋

祖祠堂石壁の下に岩垣楓と稱する老楓一株あり古今集なる關雄が「奥山の岩かき紅葉ちりぬべし照る日の光みる時なくてといふ歌に因み

て後世好事家の造り出せるものならん然ぞこの地の紅葉は古きものなること此歌にても知らるゝなり

當寺にも亦見るべき什寶少なからず○赤衣の釋迦と十大弟子三幅對

子夏筆中唐 ○來迎佛一幅 信筆源 ○廿五菩薩一幅 心筆 惡 ○山越の阿彌陀

佛一幅 同寺上 ○十六羅漢十六幅 筆者詳ならずその中の十一幅は新畫を以て捕

筆方遊助なり或云宋人の筆か將 ○藥師如來一幅 基筆 惡心筆とあれど春日

た宋畫を寫し日本畫なるべし ○藥師如來一幅 基筆 惡心筆とあれど春日

ありの既 ○十界の圖二幅 代の巨勢畫なるべしといふ 木造の地藏一体 佛

空海の作 ○願阿彌陀一體 本堂の本尊 惡心僧都時代 ○銅の唐磬等なり

◎若王子社 永觀堂の北に隣る一に若王寺に作る舊は梁々院と號したる神宗にして

當社の祭神は熊野大權現なり後白河法皇紀州熊野三所權現を崇信し

卅三度まで御幸したまひしが渴仰の餘り葦下近きはとりに三所を移

さんとして此所彼所尋ねたまひしに此地は台嶽の南にあたり山中に

三の瀧ありて神妙の靈地なりければ法皇叙感斜ならず即ち當山を那



智と定め永曆年中西紀千五百紀州那智山の土砂を運ばしめて権現をこ  
 りに勧請したまふ皇居の正東なるを以て正東山と號し又熊野權現の  
 若宮女一王子の神名に因て若王子と稱す曩昔は神殿壯麗にして樓門  
 廻廊建つらなり境内には櫻樹多くして古へより花の名所にありき  
 然るに應仁の兵亂のとき此邊は軍士の屯する所となりたれば遂に荒  
 廢に及び今はたゞ僅かに數字の小祠あるのみ然と社背の山は依然と  
 して絶佳の風光を存し泉石亭舎幽趣あり且梅櫻楓樹及び杜鵑花等數  
 多くして四時みな宜し溪谷の水清冽にして老杉鬱樹の間を過ぎ上流  
 三所に瀧をなして落つ第三を如意輪瀧といひ第二を千手瀧といひ最  
 も奥なる第一を十一面の瀧といふ瀧のはとり溪谷の間には三伏の日  
 なは炎暑なし故にこの地は花紅葉にて世に知られたるのみならず消  
 夏の最良地たるを以て亦名高し

花もみち瀧の響きの名にそへて

從二位 實 仲

ぬならぬ色の世に流れけり

名にたかき瀧の白糸されはこそ

正三位 有 功

花の錦もかりいたしけれ

若王子の瀧のはとりにて 延 之

くる人のたぬまをおのか物にしてむすふも涼したきのしら糸

◎黒谷、光明寺若王子の西紫雲山金戒光明寺と稱し淨土宗鎮西派四箇の  
 一、本寺なり舊はこの地を栗原岡といひしを淨土宗の始祖法然上人こ  
 りに住しその初めに居し叙山の西塔黒谷の名をとりて新黒谷とよな  
 へしが後には新の字を省略してたゞ黒谷とのみ稱するに至る安元元  
 年西紀千五百創建のころは白川禪房といひて別に寺號もなかりしを後  
 宇多帝の御宇西紀千二百にいたり始めて今の寺號を下賜せられたる  
 なり、本堂に圓光大師上人自作の像あり其西脇に親鸞聖人自作の像  
 あり、阿彌陀堂本堂の前の中央なる阿彌陀佛は惠心僧都の作にして僧

都がいやはての彫刻に係るを以て乙の如來といふとどまた觀音堂  
 の本尊千手觀音は行基の作なりこの觀音堂は往古行基が開基せしにて  
 冠せる大臣の座像を安す始めは善正寺の邊にありて吉田寺と號せしが後世  
 寺の額を掲げたり且觀音の像は天平五年西紀七十三三年吉備眞備唐  
 土にて墨木を得て歸り行基と心を合せて作りし所のものなりといふ  
 堂前に一株の松あり鑑懸松と稱す傳へいふ熊谷直實遁世し法然に就  
 て髪を剃すと其着せし鑑を池にて洗ひこの松にかけしより名づく  
 と方丈の北庭に鑑池といふあり即直實は出家して法力房蓮生法師とい  
 ふ承元二年西紀千二百八十年其詠める歌に  
 いにしへの鑑にまさる紙衣風のいる矢もどほらさり懸

極樂に剛の者とや沙汰すらん西に向ひて後ろ見せねは

當山第一の什物として秘藏せる一枚起請文と稱するものあり開祖法  
 然大徳の神勅によりて浄土安心の要文をかきたるなりと言傳ふ  
 この他の什寶には○出海の文珠一幅寺傳唐書とすれど或云千五百〇彌

陀三尊の像一幅寺傳惡 ○屏風本尊の繪三個中は山越の彌陀三尊左右は  
 〇千代の地藏一幅野傳小 ○釋迦十六羅漢の上に涅槃像を彫りた  
 る大理石一個幅二寸四分西紀傳來といふ 等なり

◎眞如堂黒谷光明寺の北に 鈴聲山眞正極樂寺と號す眞如堂はその本堂  
 の名なり本尊阿彌陀佛は慈覺大師の作にして舊は叡山の常行堂に安  
 置せしが圓融院の御宇永觀二年西紀九百の春叡山の戒算上人靈夢に  
 感じて元眞如堂の地の北東下段に遷すこゝは白河女院一餘帝の母后の  
 離宮たりしが女院も亦上人と同じ靈夢を得給ひければ先阿彌陀佛を  
 殿中に移し尋で正曆三年西紀九百の秋本堂を建立し莊嚴人目を眩す  
 る計りなりしと雖も兵亂などのために各所に轉遷し終には本尊彌陀  
 の像をも焼失し今の像は其後元祿五年西紀千六百洛陽一條町に在て火  
 災に罹り同六年に今の地に遷る境内老楓數株ありて紅葉に名高し鎮  
 守稻荷の社前には櫻樹林をなして花時亦佳し

秋季眞如堂觀楓、晚間遇雨。

中島規

楓寺、葬山、山、山、色、開、老、紅、寒、翠、映、行、杯、

不妨、急、雨、驚、吟、席、一、洗、幾、多、秋、錦、來、

よきもの、餅屋はさひし花の時、芹、舍

當寺の什寶見るべきもの三四あり○普賢の像一幅寺傳○廿五菩薩

の像、一幅寺傳○不動の像一幅寺傳○木造の地藏、

一軀寺傳○法然院眞如堂の東、鹿谷村に在り此地は法然上人開栖の舊蹟にして其徒弟住蓮坊

も亦こゝに住す然るに故ありて中絶しや久しく廢せしを延寶八年

西紀十年智恩院卅八世萬無心阿上人たゞ復興して新たに經藏を造

築し一切經和をこゝに納めて寺を萬無寺と稱す客殿の庭前に清水の

り之を善氣水といひまた山號を善氣山といふ當寺は老松古杉の中に

ありて寂々寥々また人實の事をさかず清風俗塵をはらひ青苔世垢を

といめされば茲に遊ぶ者は身を清淨無塵の佛界に入れし想ひあるべ

し

南隣に住蓮山安樂寺と號する寺あり是また法然上人の如法念佛執行

の古跡にて當時その徒弟住蓮安樂の二僧に附屬したりしが後鳥羽院

の愛妃松虫鈴虫の二婦一向專修の勤めをさきて發心しこの二僧に隨

ひて大内をしのひいで此庵室に來りて髪をおろし尼となりければ上

皇いたく怒らせ給ひて二僧を死罪に行ひその師たる法然を土佐に流

し給ひしを以て一時この庵室も廢滅せしを幾多の星霜を経てのち念

佛弘法の舊跡の永く絶んことを惜み寺院を建立して即ち住蓮安樂の

二僧を開山とす今は荒廢してたゞ僅かにその形を存するのみ

此の邊をすべて鹿ヶ谷と稱し東の方三四丁の所に談合谷といふ地あ

り是を法勝寺の執行俊寛僧都の山莊の舊跡にして治承年間西紀十年

新大納言成親平判官康頼俊寛等平氏を滅さんとして密會謀議せしより

此名を存したりといふ今も山莊の跡として二段の平地平家物語に云ふ

東山鹿の谷といふ所は後ろ三井寺に續きてゆるしき城郭にてぞ有ける、それに倭寛僧都の山莊あり、彼に常は寄合ひく平家亡すべき謀をぞ回らしける、或夜法皇も御幸なる云々

寛公別墅已泯然 慷慨爲惟壽永年 寂寞談溪風雨夜

水聲添恨轉潺湲

巖 恭

ひすひつゝ鹿か谷間の岩清水

古尾 重 伴

もれすは遠く流れさらまし

談合谷の上に瀧あり樓門、瀧といふ樓門此昔如意寺この邊にありて其高凡そ九丈二尺遙かに之を望めば恰も練糸の樹頭より垂るゝに似たり、この又東に高く聳ゆる峻嶺を如意嶽といひ俗に大文字山ともいふ、往昔この麓に淨土寺と稱する伽藍ありしが一とせ回祿の災にかゝりしに本尊阿彌陀佛如意嶽に飛去りて光明を放つ、爾後于闍盆會ごとに光明の

かたちを作りて火を燈しけるに弘法大師これを大文字に改めしが年を経て文字の跡もうづもれしかば足利義政相國寺の横川和尚に命じて復もとの如くに作らしめ毎年七月十六日の晩に點火す大字横の十一間左の壁の一疊八十間餘、右の一疊六十八間、慈照寺之に由て大文字山の稱あり皆川恩が東山大文字を詠せし詩あり云く

何人巧思畫山成 村炬秋輪一夕明 巨筆飛丹光的歷

積薪焚翠勢崢嶸 烟含遠影浮龜水 雲伴昏星落風城

清賞由來片時散 空餘孤月照三更

ふみはみなやきし代もあるを東山 雪 臣

名におは文字は火もて造れり

◎銀閣寺法然院の北淨土寺村に在り 文明十五年西紀千四百八十年 足利義政こゝに邸宅を新築して移る天子勅して東山殿の號を賜へり、没後遺命によりて寺となし其法名慈照院をとりて慈照寺とよなへしが北山の金閣にならひ

じくろふき  
Ginkaku-ji.



文庫園圖

て二層の銀閣あるを以て世また之を銀閣寺と稱す宗は禪にして臨濟  
 に屬し夢窓國師を開祖とす佛殿の釋迦牟尼佛は日護院と稱し鴨瀨の中  
 住持の作にして各室の畫は諸名家の筆なり客殿中の間の仙人畫し  
 は海北友雪東の間の山水は逍遙軒西の間の山水は狩野隆也の畫は  
 土佐光興また芦と辨とを畫ける屏風は相阿彌の筆なり東求堂は義政  
 の持佛堂にて今はこゝに法服を着せし義政の像尺四寸五分三厘を安置  
 す東北にならびて茶室あり義政の數奇を盡ししものにて連棚の張付  
 の梅の畫は狩野古法眼元信の筆帳臺の腰障子なる琴書畫の圖は狩  
 野永納兩腋の蘭と水仙の畫は相阿彌の筆なり此は四疊半茶室の瀟灑  
 なりといふ庭園は相阿彌の經營せし所に於て山水の風光眞妙佳絶天  
 下の勝景ありつたりて一望の中にあり奇巖怪石こゝかしこに散在し  
 石、藤、石、天柱、峯、香爐、清泉、懸崖、にかゝり、洗方、に瀧あり、躑躅、花、紅、にして、夕  
 陽、に、映、じ、池、の、向、に、落、照、に、岡、と、稱、す、丘、白、沙、色、清、く、し、て、月、光、を、と、い、め、客、殿、の、控、前、に

七十四



あり一を向月、四時の觀とも宜し池に數橋を架す  
 雲橋等ありて多  
 くは昔名分界橋といふを渡れば二重の高閣屹立す世にその名高き銀  
 閣は是なり下を湖音閣と名け上を心空閣と名く、後滿の築造せし鹿苑寺の  
 閣に銀閣ありしと思ふは誤なり

大平時節守成難

豈料兵戈起宴安

兩腋風生銀閣上

憐君盡日倚闌干

太宰純

大樹蕭々秋帶風

無如猿犬各稱雄

獨有玲瓏數舉石

從君建置小園中

賴山陽

石も木も時代の苔やあきの雨

西吟

當寺の什寶見るべきもの二三を舉れば○渡唐天神の像一幅土佐光○

山水の畫一幅横九寸三分、豎九寸四分○冬夏の山水二幅吳筠○不動明王畫

像守傳巨勢畫或云公望の筆ならん

◎吉田神社銀閣寺の西 祭神は武甕槌命 齋主命 天津兒屋根命 姫

大神の四柱にして貞觀年中西紀八百六十七年中納言藤原山陰始めて勸請す當社は南都春日社と同じく藤原氏の尊崇せし所なり天津兒屋根命即ち宣藤原氏の祖神なり宣胤卿記に云く

奈良京の昔は春日社を以て氏社とし興福寺を以て氏寺とす平安城の今は吉田社を以て氏社とし法成寺を以て氏寺とす社頭の興廢に隨ひて藤門の榮衰を測るべし云々

當社の上方の山を神樂岡といふこの邊より西へかけて吉田の里なれば俗に吉田山とも稱す南北四町ばかりの丘山にして四方を見晴し眺望絶佳なり延暦廿年四月天皇こゝに御幸したまひしこともありき丘上は緑の松のわひくくに紅の躑躅わひまじり其盛りのうるはしさ殊に春は花の白雲このもかのもに柳引き秋は紅葉の錦をちこちに緞掛け四時のながめ盡ることなし此岡の北に一すぢの瀧わり白河といふこの河にそひたる山本の村を白河村と稱す昔はこの邊より鴨河の東

九條邊までを白河といふなへ南と北にわから今白河村の邊は北白河とよび古來このわたりの風景を賞し花松卯花等を詠せし歌少なからず

春といへばさねゆく風に立浪の花に埋める白川の里 定家  
波のおとは松の嵐にきこもなり卯花かほる白川の里 家隆

◎第三高等學校吉田神社の西 當校は明治元年大阪に舎密局を建設せられたるに創まり爾來數多の沿革を歴て明治六年開明學校と稱しその後外國語學校と改め同十二年 専門學校と改稱し其翌年また大阪中學校と改稱し同十八年 明治十九年に大專分校と改稱しその度ごも組織及び規則の変更あり 明治十九年に至り新に發せられたる中學校令四月九日 及び其官制四月二十に依りて同廿二年八月一日移轉す而して廿七年高等學校令三月二十 出るに及び高等學校と改稱し九月十組織大にかはりて法工の二科を置くのちつひにこも國までも白ふらんよし田の里のわか櫻花

◎百萬遍北田中村に在り 淨土宗西本山の一にして長徳山知恩寺と稱す草創は慈覺大師にてその始めは天台宗なりしが法然上人加茂の神勅に依てこの寺と附與せられ爰に住して専修の法要を談せしより遂に今の宗となり即ち法然上人を開祖とす第八世空圓善阿上人の時にいたり元弘元年西紀千三百一十一年の秋國中疫厲流行して民多く死せしかば天皇後之を憐み給ひ善阿に勅して祈念せしむ善阿餘行を修せず七日を限りて念佛すること一百萬遍にして疫病止みければ天皇叙威ありて百萬遍の號を賜ひ又弘法大師の書せし六字の名號を賜ふの文字畫所かな御をなすを以て利銀の名號と稱す爾來百萬遍の稱名を修する時この寺舊は今出川北小路に在て當時神宮寺又は加茂の川原屋川原屋は五寺といふを居て用かし號なるべし西暦院伊勢宮寺の忌闕に佛を立スグは思と稱して上下加茂社の法樂修法の寺なりしを義滿相國寺を創せんとして之を油小路一條北に遷し水徳三年西紀千三百八十三其後また秀吉の時

京極土御門に移り寛文二年西紀千六百六十二年今の地に轉す

當寺の什寶は○善導大師の像一幅寺傳大師の自○涅槃の像一幅寺傳○釋迦文珠普賢の三幅對寺傳○行基左○當麻の曼荼羅一幅寺傳○蝦蟇鐵拐の畫二幅寺傳○十体阿彌陀の像一幅筆者不詳願

◎續物會社御幸橋の東 明治二十年の創立にして縞子紋織その他名種の織物を製造し傍ら染物、捺染等の業を營めり初めは佛人を雇ひ入れ又西洋の機械とも設置して歐風を専らとせしが後には和洋その宜をとり技術頗る進歩して其製出する所のもの實に精巧美麗を極む現今使役する職工七百五十餘名にして煙筒の煙り晝夜絶ることなく鴨東の風光これが爲に害なはるゝの恐ありと雖も亦以てその業の隆盛をトするに足る

京都勝覽第二日東部南の方、東福寺に







羅右源三位頼政なりこの社舊は觀勝寺に屬す往昔藤原鎌足この地の  
 勝景を愛し自ら紫色の藤をうゑて家門の長久を祈りしが其樹いやま  
 し榮え盛りに花を着ければ世に花の寺と稱せらる崇徳天皇この藤  
 花を愛し屢次鳳輦を巡らし給ひ遂に殿舎をこゝに營み寵妃阿波内侍  
 を居らしめて臨幸絶えざりしが保元の亂に讃岐國に遷幸ましく内  
 侍はその後も爰に止まりて且暮慕ひ奉りしかが讃岐より形見にせよ  
 とて御自筆の尊影并に御隨身二人の像を畫きて内侍に贈り給ふ斯る  
 縁由あれば文永年中西紀千二百六十七年こゝに一字の佛閣を建立して尊靈を  
 鎮め奉る觀勝寺光明院其後兵火にて燒滅せしが元祿八年西紀千六百九十五年  
 至り洛西の安井村より蓮華光院を遷し又新たに讃岐國象頭山の本社  
 を撰造す象頭山は那珂郡平村に在り大己貴神を祭り後にまた崇即ち安  
 井金毘羅なり本殿の東北及び表門の邊に藤樹ありて晩春の頃はやか  
 りの色深く咲亂れかの帝のめで給ひし昔しのばれて戀々去りがたき  
 心地す

まどわして見れどもあかね藤浪の 天曆 御 製

たゞまく惜しきけふにも有かな

高はたにみけしおるかどみゆるかな 上田ちよ子

やすむの松にかゝるふちなみ

●六波羅密寺 五條の南 普陀落山と號し空也の草創なり天曆五年西紀九百一十一年京畿疫して死屍相枕せしかば空也いたく之を憐みて自ら十一面  
 大悲の像を刻みて車に乗せ洛内を巡廻して祈禱をなす斯て四衆を勸  
 めて一寺を創め之に自作の觀音を安置す洛内を引廻せし境内に姿見  
 の池と稱する池あり空也おのが姿をこの池水にうつして自己の像を  
 彫刻せしより名づけたりといふ開山堂に安置する像は即ちその像な  
 りとかや六波羅は屢々歴史にあらはれたる顯著の地にして平相國清  
 盛の邸平正盛忠盛も共に六波羅に住したり清も此地にあり建長七年西紀

千二百五 北條義宗 居北方に 式部丞時輔 居南方に 相共に政を施し、河六波羅も亦この邊の地なりき 義宗の第は密寺の西に並び、時輔の第は清盛の邸の跡なりきといふ

嘗寺の什寶には○十二天の圖 十二幅 卯月 ○桃源の圖 題辭は董其昌にして、嘗て嘗寺開張ありし時、無村連日參觀 ○地藏菩薩一軀 小野 〇四天王 木四軀

○梵字の銅古印一個

●五條大橋 五條通に架せり、此橋いにしへは今の松原通に架せり、これ實の五條通にて現時大橋の在るところは六條坊門通りなりしが豊臣秀吉五條橋を此處に移し、より従前所在の名稱を用ゐて五條大橋と呼びしかば遂に六條坊門の名をいはずして五條通といひ本の五條通は本稱をすて、松原通と稱するに至る蓋し往昔京極の西四五丁の間に松の並樹ありしを以て松原通の名を得たり、この橋も三大橋三條、四條の間に一にして舊は石を以て造り、欄干に紫銅の擬寶珠を用ゐしが其後木造となり明治十一年に洋風に改造し、同二十七年に再び舊制に復し欄干

擬寶珠を附して木造とせり

舊の五條橋の濫觴は醍醐天皇の勅定によりて、一百餘間の橋梁を用ゐ東西の大路に續くと水月集 青蓮院釋純法 に見えたる是なり、慶長年間六條坊門通に轉架せし後はこゝに假橋を架し松原徒杠といふ、清水寺へ參詣人の通路なれば往還つねに賑はへり

●大佛殿方廣寺 町南に在り、馬 天正十四年 西紀千五百 豊臣秀吉の創建にして此役に與る國廿一、佛像は銅にては其成ること晩きが故に木像となし漆膠を以て之を塗り五彩を以て之を飾る、堂の高二十丈、佛の高十六丈、石燈籠敷石、或は石垣の大石など寄附の諸侯おのゝ家名または紋所および其出所を石面に鏤す、惜かな慶長元年 西紀千五百 大地震にて悉く崩壊しければ同七年豊臣秀頼再建し銅像を鑄んとして失ちて焼亡し、また十五年更に金銅を以て造りしに五十餘年の後二年また震災に罹りて其像破壊せしにより復た木像に改造し、寛文七年 西紀千

十七に成就して殿堂巍々たりしが寛政十年西紀千七百九十八年七月雷火の爲に佛殿丈像二王門廻廊すべて灰燼となり近時漸く大佛の半像を造りて僅かに懐舊の感を惹起せしむ

晉費黄金十萬駄 鑄成百丈大沙那 佛與檀起俱灰滅

耳塚蕭條春草多 世中何者免無常 千尺佛身今則亡 只有彌陀峯頭月

雲間遙拜白毫光 當寺に大鐘あり高一丈四尺厚九寸九分慶長十九年秀頼の鑄造せし所にして其銘は東福寺の僧清韓の撰なるが國家安康大小釋迦迭爲主伴云々どわ

りしを家康讀て已を呪詛するものとなし是より遂に物議を生じ大阪滅亡の種因となりしは史に於て人の知る所なり 大佛正面通の南に大なる塚ありこれ世に聞えたる耳塚にして秀吉朝鮮を征せしとき敵兵の首を獲ること幾萬級なるを知らず從役の諸將

これを悉く秀吉の展覽に供ふること能はざれば則ち削り取れて京師におくりたるを茲に埋む

授誠歸來此築墳 可憐萬里背親恩 和歌不入殊方耳

強唱唐詩慰旅魂 此に來てなげ郭公その聲を 芳樹

きくべきための耳塚のうへ

●豊國神社大佛殿 豊臣秀吉の靈を祀る慶長三年西紀千五百八十八年八月十八日秀吉歳六十三にて薨じ九月上旬その遺骸を阿彌陀峰山社の後に葬る國山に葬り同四年三月社殿回廊拜殿三門等悉皆落成しければ朝廷勅して豊國大明神の神號を贈りたまふ然るに徳川氏の代にいたり廢亡して復ひかしの面影みえざりしが明治十年あらたに土工を起して現今の所に社祠を建立し之を別格官幣社に列したまふ表門は桃山城門を移しゝにて社前の鐵燈籠は慶長五年釜匠與二郎の鑄造せしなり

◎妙法院 大佛殿の東 開基は延暦寺惠亮僧正にして代々法親王御相續ありて山門の座首たりき舊は祇園の南にありて小坂殿また綾小路宮など稱せしを豊國社創建のとき爰に移す

什寶 ○花鳥の畫一幅 紀傳呂 ○如意輪觀音一幅 馬道 ○不動の畫像 一幅 後白河帝 ○豊國神社臨時祭の圖六枚折屏風 贈野内 ○不動の畫像 呂紀 ○踊の圖六枚折屏風 筆者不詳或云岩 ○内裏歌合一卷 西行法師 ○唐金の水指 高七寸、取一貫百四十 ○頼阿法師の碣 泥なり ○秀吉の裝束一式并に朝鮮人の衣服八領、裳一枚、脚絆一双、沓一兩 朝鮮人衣服等は同國王の服業を關るに足る ○後白河院御肖像 筆自 ○古鏡一面 徑三寸八分、柄面に蓋衣冠尊勝願の六字あり秀吉の遺物なりといふ

◎智積院 豐國社の西 豐臣秀吉その子樂君の早世を哀しみ菩提のため一寺を建立して祥雲院と號し妙心寺南化和尚を開基とすその後故ありて之を妙心寺の玉鳳院に移し、徳川家康の世に至り眞言新義の門徒根來寺の廢絶を歎きて屢々愁訴しければ祥雲院の建物をそのまゝ賜ひて根來寺智積院と稱し即ち眞言新義の總本山たらしむ

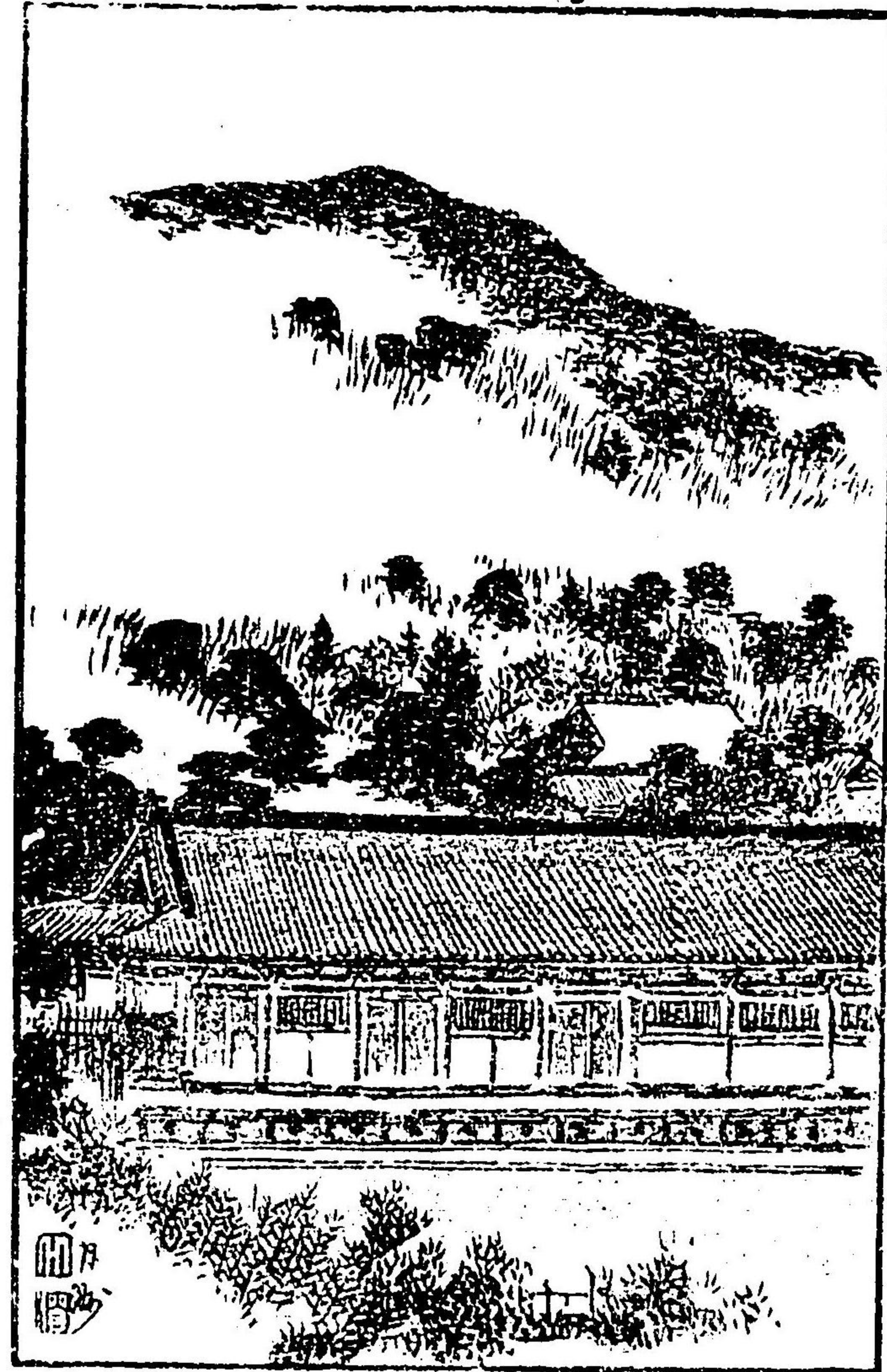
根來寺は眞言新義派の宗祖覺上人の開闢所なりしが天正年中豐臣秀吉の寺の坊徒が動もすれば兵器を弄して武家に敵するを惡み遂にこれを滅しいたかりて再興するを得たり 方丈の各室は名畫おほく庭中の林泉は頗る佳景なり

什寶 ○松鶴の圖一幅 吳春 ○山水の畫 遊筆馬 ○牡丹に獅子の圖瀧に二獅子の圖瀧見觀音の圖、藥師十二神將の圖 以上四幅共 ○浪岸の圖一幅 摩訶鉢 永眞 ○孔雀明王の圖 永眞 ○五大尊の圖 大師傳 永眞 ○五字の文珠二幅 永眞 ○不動の像一幅 大師傳 永眞 ○乾建婆王十五鬼神の圖 吳春 ○縫字妙音品より船載 ○瀧見觀音の大幅一軸 長唐十四歳 ○不動の座像一軀 ○愛染明王の像一軀 ○銅像の地藏一軀 ○華嚴經一卷 天平十二年書 一阿含經一卷 寺傳 天平

◎帝國博物館 豐國神社 明治廿五年六月の起工にして同廿八年に落成

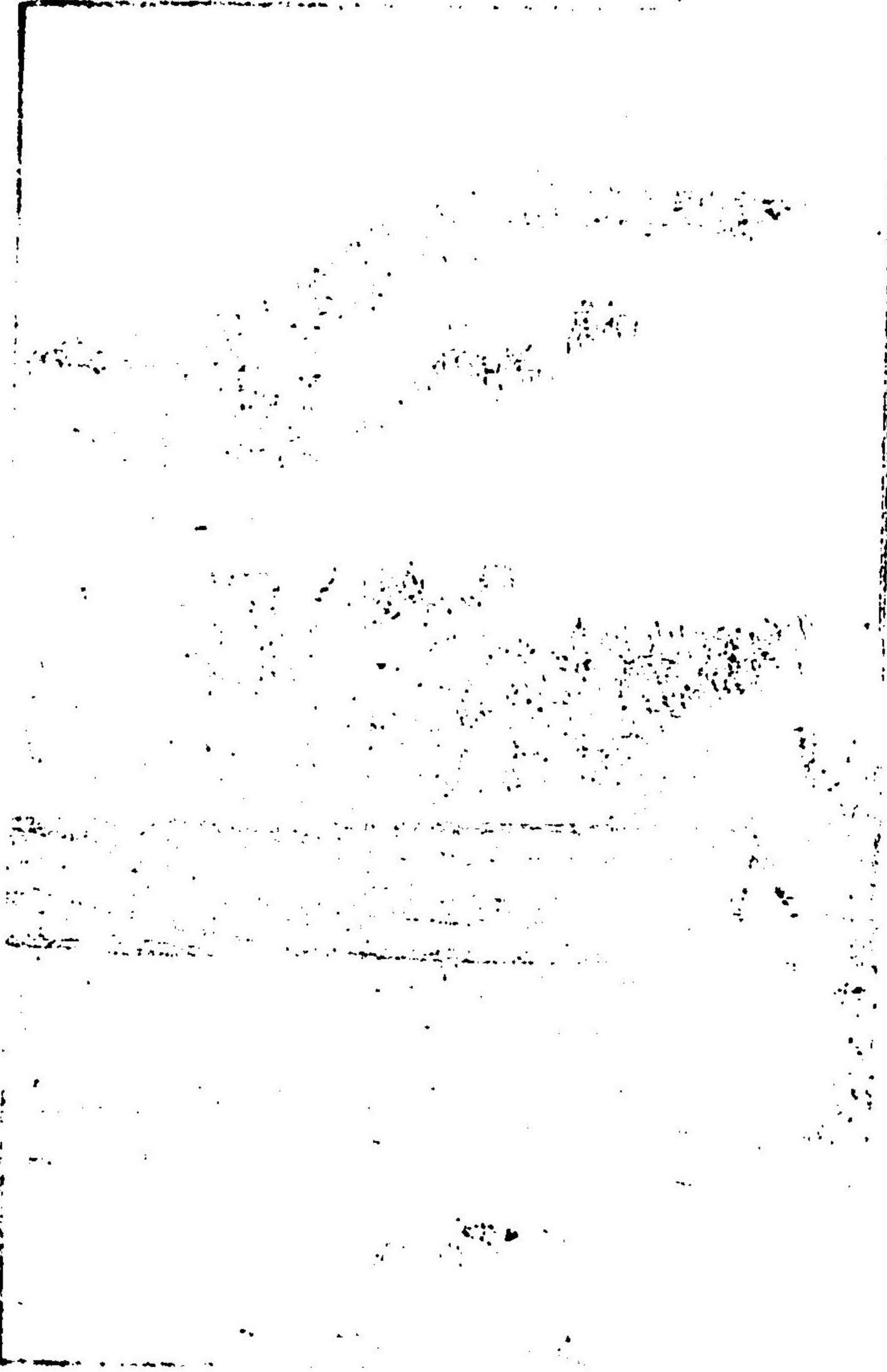
うだんげ三十三

Sanju Sangendo.



す間口四十一間奥行卅五間六分の建物にして玄關の間口七間奥行十  
 間はかに間口五間に奥行三間の石段ありて其左右に長三間幅一間の  
 御影一枚石を敷詰り左には普賢菩薩唐獅子乗の銅像右には文殊菩薩  
 象乗の銅像を置くその装飾の優雅なるその構造の壯麗なるは實に日  
 本帝國の美術の府とも稱すべき京都の博物館たるに恥ざるなり

●卅三間堂 南に在り 初め鳥羽上皇長承元年 西紀千二百に卅三間堂を此  
 地に造營し得長壽院と名けて一千一編の觀音を安置したまひけるが  
 後また長寛三年 西紀千五百に後白河上皇更に卅三間の堂を建立し一千  
 一編の觀音を安置して蓮華王院と號す兩寺とも寶治二年に回祿の災  
 にかより文永三年 西紀千二百に再興せられしが此時兩寺合一して蓮  
 華王院と呼び得長壽院の方はその名うせたり現存の堂は即ち文永再  
 興のものなり 本堂南向にして南北六十間一尺四寸六分東西八間三尺七寸  
 堂内は垂木等にまで彩色を施したりと雖も今を去る凡そ六百卅年



前の建築なればその多くは剣落して圖畫明了ならざるは遺憾なり本  
 尊は千手觀音法像長八尺大僧正行慶康二十八部衆師運慶作佛一千体の千  
 手觀音立像各五尺許内三百餘尊康慶永の作にして二百餘尊は運慶の作

昔時は堂の裏縁側にて賭藩の士年々弓勢を試ることをなせり初め  
 は堂下の芝生にて射を練り然るのち堂上に登り百射或は千射又は  
 日矢數等おのゝ隨意に之を行ふ而して大矢數射試る時の射術を  
 行ふときは日暮より翌朝まで舞をたき夜を徹して射を試み傍らに  
 は通矢檢證の役人居並び要所々々には消火役繩を振立て、非常を  
 警むる等その様いと嚴かなりき從來大矢數に名譽を博せし者の類  
 かず、堂にかゝげたれば今なほ其人を知るを得るなり

●東福寺伏見街通第 禪宗臨濟派にして京都五山の第四に位す嘉祿二  
 年西紀千二百九十六年九條相國道家當寺を創建し其後寛元元年西紀千二百  
 至り之を聖一國師に予へて開基とす備辨圓真貞元年宋に渡り運山寺の

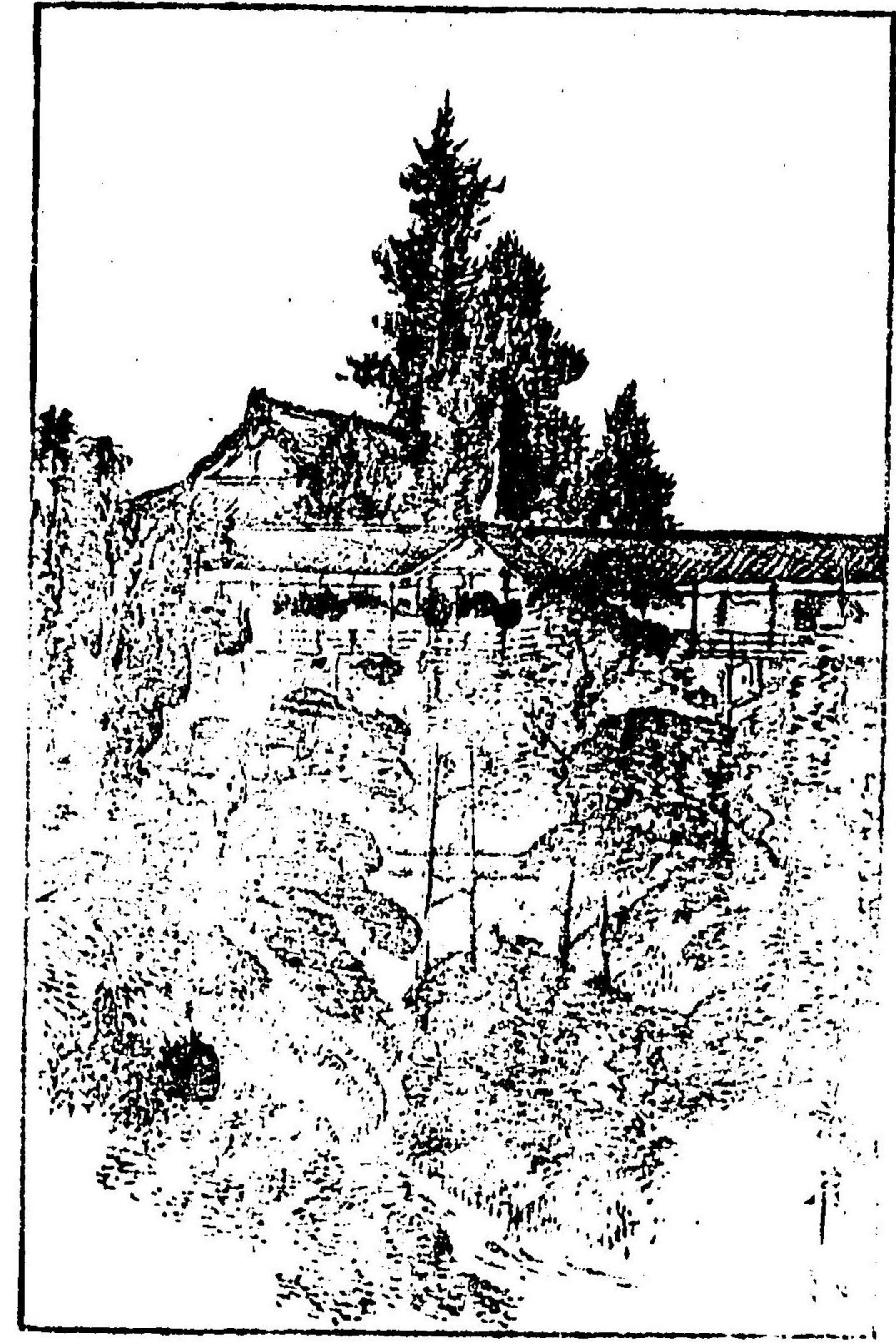


ふてらつ、くふうと  
Tōfuruji: Ten ten.



師の二年に師朝し、花園帝の御宇に至りて聖一國山號は惠日山と稱し其創め宏に  
 鉅材を構ひ洪基を東大に亞ぎ成業を興福に取ら名けて東福寺といへ  
 る由なれば當時の壯麗想ふべし然るに前年開山堂常樂庵等は燒亡し  
 て再建になりしが幸ひに伽藍のみは往昔のまゝにて在しを是亦近年  
 回祿の災にかゝり悉皆烏有に歸せしは惜むべきことなり現今僅かに  
 堂舎の再建成りたるもあれを假立に過すその舊觀に復するは何れの  
 日ならん乎されど今なほ寺域廣漠五万九千四百六十坪山にそひ溪にまたがり  
 老杉古樹蒼鬱として幽靜を極め境内一步をいるれば自ら名刹の區た  
 るを知る殊にかの著名なる通天橋昔明國師始てこの橋を架す通天の類  
は即ち國師の年なり橋下の溪流を洗玉瀧  
 ふいは依然として舊形を存し滿溪の楓樹昔しながらに色をあらため  
 ず毎歲毎秋紅わふかく染なして兩崖相映照し橋下の水はさながら錦  
 織の浮びながるゝに似たり此地古へより官傳へて東山紅葉第一の勝  
 とす實に過稱にあらす

5000, 0000  
 .net .org : ig ninnofol



通天橋

頼山陽

橋底停車酒半醺 仰看霜樹亂紛々  
 豪來卻上玉龍背 踏過一溪紅錦雲

尋ねきて秋の錦をけふとみる柳櫻の春はしらねと 大平  
 星ならて紅葉のはしの往來かな 信徳

當寺什寶多きが中に尤も世に知られて其名の高きは光殿司の揮毫せ  
 る涅槃像の大幅なり 聖三丈九尺、横二丈六尺、應永十五年二月十四日  
 五兩日之を佛殿にかけて參詣人に縱覽せしむるを以て貴賤群集す中  
 島規の詩あり云く

涅槃勝會引都人 爭看光公道筆真  
 爲想崇新門外寺 那誰名蹟得相均

又おなじ殿司の畫ける五百羅漢の像五十幅あり 運筆の巧妙凡筆の企  
 越て戦風その他の事故にて全幅の中をばく散映せしを後また探出し 體是も  
 越の者等より皆進したれば略は其補充しと雖も今なほ三幅を欠く

寺和方殿

勝覽第二

九十五

亦正月五日には僧堂にかけつらねて法事を修す之を羅漢供といふ此  
 他にも殿司の筆になれる観音三十三幅遠摩一幅聖一國師の像一幅高  
 僧の像四十幅十八天部二像蟬蟻鐵拐二幅寒山拾得二幅等あり斯く光  
 殿司の畫けるもの多き故はかれ當寺の大道禪師を師とし應永年中  
 西紀千三百東福寺の殿司となりて南明院塔頭寺に住せしに因る殿司は  
 九十餘年其碑は明光字は吉山と稱す彼殿司のほかに○釋迦文殊普賢  
 名にりして其碑は明光字は吉山と稱す彼殿司のほかに○釋迦文殊普賢  
 の三幅對子傳吳○維曆居士の像之筆○文珠の像一幅寺傳吳道子といへ  
 いふ○八相涅槃の像寺傳吳道子といへ志亦疑はし恐○無準の像宋傳○  
 釋迦三尊の像立本筆○墨梅二幅補○雲門禪師の像牧溪筆○羅漢十  
 六幅月筆○黃鶴樓竹樓丘陽樓の圖三幅陳季○瀧見の觀音一幅寺傳金  
 ○同上一幅瀧筆○開山國師の像三幅補○伽藍の圖一幅寺傳舟○淵明  
 畫傳一卷趙子昂○雪梅松鶴の圖屏風一双益谷等○鍍金の塔一基○繡佛  
 帖一撰○四天王の木像一軀安置す

當寺の東に月輪殿として藤原兼實の山莊の舊跡あり兼實嘗て愛宕山の北  
 造りて之に居る故に月輪右大臣と稱したり今こゝに兼實を祀りて新たに社  
 るより此地にも亦月輪の名を更せたり殿をも造營す社北は溪深く水聲潺湲として微かにきこえ他に俗物の  
 耳底を汚すことなき靜閑幽趣の好地なり

◎泉涌寺伏見街道第一 初めの開基は弘法大師にして法輪寺と號せし  
 が文徳帝の御宇に至り齊衡三年西紀八百十六年に左大臣緒嗣これを再建し  
 て仙遊寺と改めたり仙人來遊せしより仙遊石あり其後數百の歲月を経て遂  
 に荒廢しその寺跡は和州の刺史中原信房の領する所となりをりしを  
 彼その歸依の僧俊仍に寄附せしかば俊仍化院を作りて後鳥羽上皇に  
 奏し上皇の厚き降施を得て當寺を中興すそのころ麓に清泉涌出せし  
 を以て泉涌寺とまた改稱し爾來天台真言禪律の四宗を兼學すること  
 とはなりぬ信房の野晒せしは順徳帝の建保年斯て貞應年中西紀千二百勅  
 願の寺となり四條院仁治三年正を月輪山莊の我禪坊後坊に葬送し奉り

その後また後光院廿九年正月を當山に茶毘し奉りしより以降天子御代々の御葬所となり歴朝の帝陵薨々として後山にあり當寺はかゝる由緒もあれば勅物靈寶等その數甚だ多しかつ境内清幽にして殿堂樓閣翠松の間に陰翳し梢頭の清風は俗耳をすまし崖下の靈泉は濁心をきよむ

開説靈泉涌此中  
遺澤尙思松柏風

更沿回磴到琳宮

五陵七厓栖眞處

伊藤長胤

什寶 ○南天大師靈芝律師俊苾律師の三肖像周丹士筆 ○涅槃像の大幅堅九丈横二丈人物鳥獸など其大價物に均し涅槃像は全一幅堅二尺横一尺餘りの小幅者釋迦三尊の圖 ○韋駄天の像一冊堅二尺横一尺日本畫筆者不詳 ○釋迦三尊の圖明光筆寺傳に御進疏一卷後苾の ○牡丹に獅子の据箱一個 ○詩繪の硯箱二個 ○補陀海山圖通寶關の扁額唐帝の立書 ○銅の佛器五個 ○鞞卷紋付の太刀一振

○五獅子の木造如意

○西大谷五條阪の東 眞宗の開山親鸞聖人の廟所なり聖人は龜山院の御宇弘長二年西紀千二百六十二年十一月廿八日に入滅せしを東山の西のふもと鳥部野の南なる延仁寺に火葬しその遺骨を鳥部野の北邊り大谷に納め後文永九年西紀千二百七十二年また改めて西の方吉水の北邊に墳墓を移し茲に佛閣を建立して影像を安置せしが此地は知恩院山門の北准如上人のとき慶長八年西紀千六百三年台命によりて現在の地に移す斯てなは舊名を呼んで大谷と稱しまた龍谷山と號す當山は高丘の地にして眺望絶佳なり門前歩をとりめて西顧せば浴中浴外一眸にあつまる唐門の前にある池を皎月池と稱し夏日は蓮花池に満ちて清香人衣を撲ち櫻楓翠樹の間に點々して春秋の美觀を呈し冬も亦雪の朝は絶妙なり池上に渡せる石橋を圓通橋と號す俗に目録橋といふ其形花岡石を疊みなして奇巧を盡しゝものにて其名世に高し

にたほかまに

High Otami



門を入ば境内老樹鬱鬱として風景とみに一變し幽邃の趣をなす廟所の北東一町ばかり松杉生茂れる所に聖人の茶毘所ありこの邊り一圓の地を島部野といひ姦なる山を島部山といふ往昔は無常所なりき舊こゝに延年寺と號する無常院ありて親鸞をこの寺にて茶毘す延年寺仁寺に作る、今はこの寺廢亡して延年寺社子てふ名の、島部野、島部山の名存す、親鸞茶毘所の邊を稱して今も延年寺社子てふ名の、は歌にも文にも多く出で無常所として世に知られたり

すゑの露もとの雫も島部山  
かくれ先たつ烟なりけり

家際  
長儀

圓通橋、晚涼  
宿禰寺 雲 叙  
圓通橋上、晚 細々白蓮香、 眞如波底、月 更浦自然、涼  
はちすさく池にかけたる玉橋は 竹屋 春 臣



雨となりてや袖ぬらすらん  
 とりへ山あした棚引かすみこそ  
 空しき春のかたみなりけり

景 樹

◎清水寺 西大谷の東北 當寺の濫觴は大和國高市郡八多郷小島寺の僧  
 延鏡光仁帝の御宇 寶龜七年西紀 靈夢に感じ木津川に沂りその支川の  
 水源なる深の傍にて異人行叙といふ者にあひしに行叙大悲の像材と  
 なすべき靈木を示して東に去る延鏡代てこゝに住すること五年たま  
 たま坂上田村丸この山中に獵して延鏡にあひ其大悲の靈告によりて  
 此所に來り居ることをききて渴仰の思ひを發し觀音寺を建立して延  
 鏡に寄附せしかば延鏡さきに行叙の示したる木材を以て十一面四十  
 臂の千手觀音を造りて本尊とすその後桓武帝都を山城國長岡に遷し  
 再びまた平安城に遷したまへるとき田村丸に殿舎を賜ひ勅して同國  
 愛宕郡八坂郷の現地に觀音堂を造營せしめ給ひければかの千手觀音を

遷して爰に安置し北観音寺と號し後改めて清水寺と稱し又音羽山と稱す大同元年西紀八に至り平城帝紫宸殿を田村丸に賜ひ之を清水寺に移して伽藍とす造營一年を經て大此地もと船舳にして平坦ならざるを以て伽藍の前面は棧を懸崖に架してその上に置る世これを清水の舞臺と稱す臺上の眺め曠然として京城の萬井脚下にあつまり西南の諸山奇を呈し遠くは淡路島模糊として雲烟の間にあらはる堂の軒には土佐狩野等諸名家の扁額畫馬を多く掲げたる其中尤も高名なるは海北友雪が田村將軍東夷征伐の大扁額なり

登清水大悲閣

龍公美

樹杪峻嶒古佛樓

登臨縱目此中遊

九街春老神州色

匹練雲含鴨水流

初地泉鳴懸石上

諸天花散遍欄頭

到來觀世風塵外

始悟吾生如是浮

名もしるき清みつ寺の夏の月うき世の外に影を涼しき泉冷爲村

おはしまに立よりて見んきよ水の

長 廣

うてなにかゝる花のしら雲

とふ人の思案できけりちるさくら

一 滴

奥の千手堂俗に奥の此所は延鎮僧都の住房の跡にして歿後こゝを其廟堂となし千手觀音の像を安すこの堂も前は棧閣を構へ崖によりて起ち眺望頗るよく風景佳絶なり千手堂の傍らに阿彌陀堂あり瀨山寺往昔法然上人この所にて不斷常行念佛を開く今に退轉せずして修行せり千手堂の崖下に三條の飛泉あり之を音羽の瀧と稱しその名世に知らる

清水の瀧の三すちの白糸をふさくる風そより合せける 景樹

結ふ手のははかりに梢より花やおちくる山陰の瀧 黃中

本堂の後なる北の丘上に地主權現社あり祭神は大己命とも云ひ或は田八坂禰の産土神にして臨時は四月九社邊に櫻樹多し其角の發句に京中日に神輿を出して祭式嚴重なりき

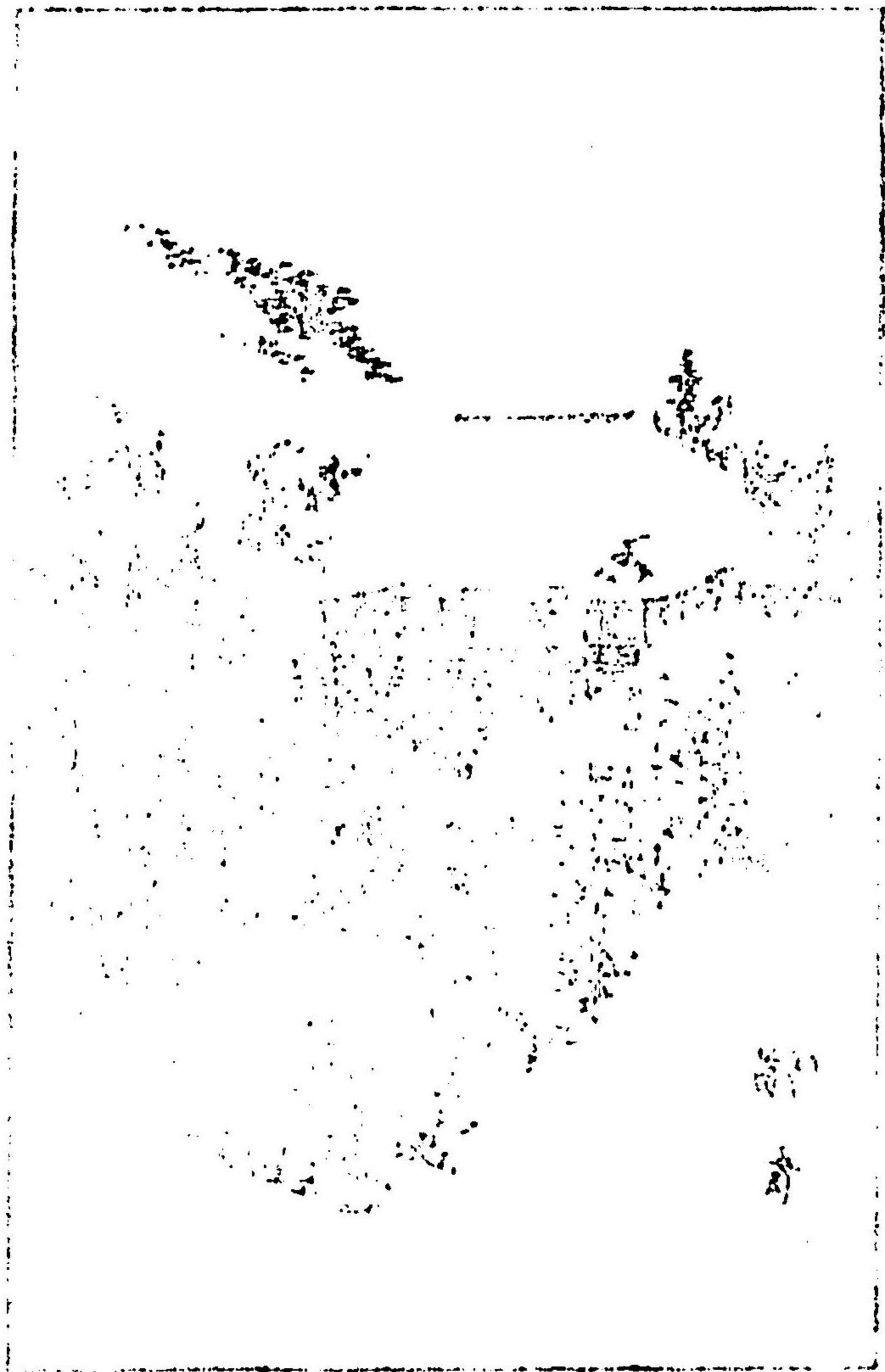
らてづみよき  
Kinomiyu-dera.



彌  
在  
園

へ地主の櫻やとふ小蝶西門の東に三重塔あり子安塔と稱す桓武帝の  
女御全子の田村丸出産の月に病惱ありて藥石驗なく大悲に祈誓し病忽  
ち癒て皇子誕生ましししかば叙威ありて此塔を建給ひしによりて  
の稱ありといふ此はか朝倉堂正前國司朝倉彌田村堂田村堂田村將軍の建立する所にして古昔の本堂  
なりしと云ふ田村丸行經堂等なほ多かれを然のみは言す惣じて當寺は  
眺望の佳絶のみならず春花秋葉の艶麗また類ひなし櫻花爛熳の候に  
はさながら雲にまがひ其散かふは空にしられぬ雪と見え色に香に醉  
つべき風情なり雪景また極めて佳なり前山後峰玉を屏となし万頃玲  
瓏として銀海を現出するの狀譬ふるにもなし  
音羽の瀧の南邊を歌の中山といふその奥に清閑寺と號する一寺院あり  
草創は紹繼といふ法師にて延暦廿一年にあり再興は一條院の御宇  
佐伯公行なりといふ本堂の北一町ばかりの山中に高倉帝の陵石塔あり五輪ありてその傍に楓樹を植たり平家物語に仕丁が御愛樹の紅葉を折觸しを怒らせ給はりして却て御感ありしことを記し





なる因みし又御塔の左傍に小督の塔あり小督は櫻町中納言の女に季定といふ者入道清盛の命を受け當寺に奉てきたり姿を替させて尼とす

盛衰記に云院高倉帝深く思召出したるときは只御極とて夜の御殿へ入らせ給ひけり小督局の心ならず尼になされたる所なれば御なつかしく思召けるにや朕をば必ず清閑寺へ送り納めよと御遺言あるこそ御愛執の罪とは云ながら哀れなれ

はとゞぎす今宵なく音を高倉の

蒼生雄

みさゝき近く聞えわくらん

紅葉見に清閑寺にまかりける時小督の局のはかにて

悲秋

もみち葉は悲しき陰にかくれけん昔のさがもおもはゆるかな  
六條院の陵もこの邊にあるべきなれを所在詳かならず明月記に云清閑寺の堂なり當寺はその名に背かず清閑にして幽静なり翠竹涼を生じて夏に宜しく丹楓錦をかけて秋に宜し

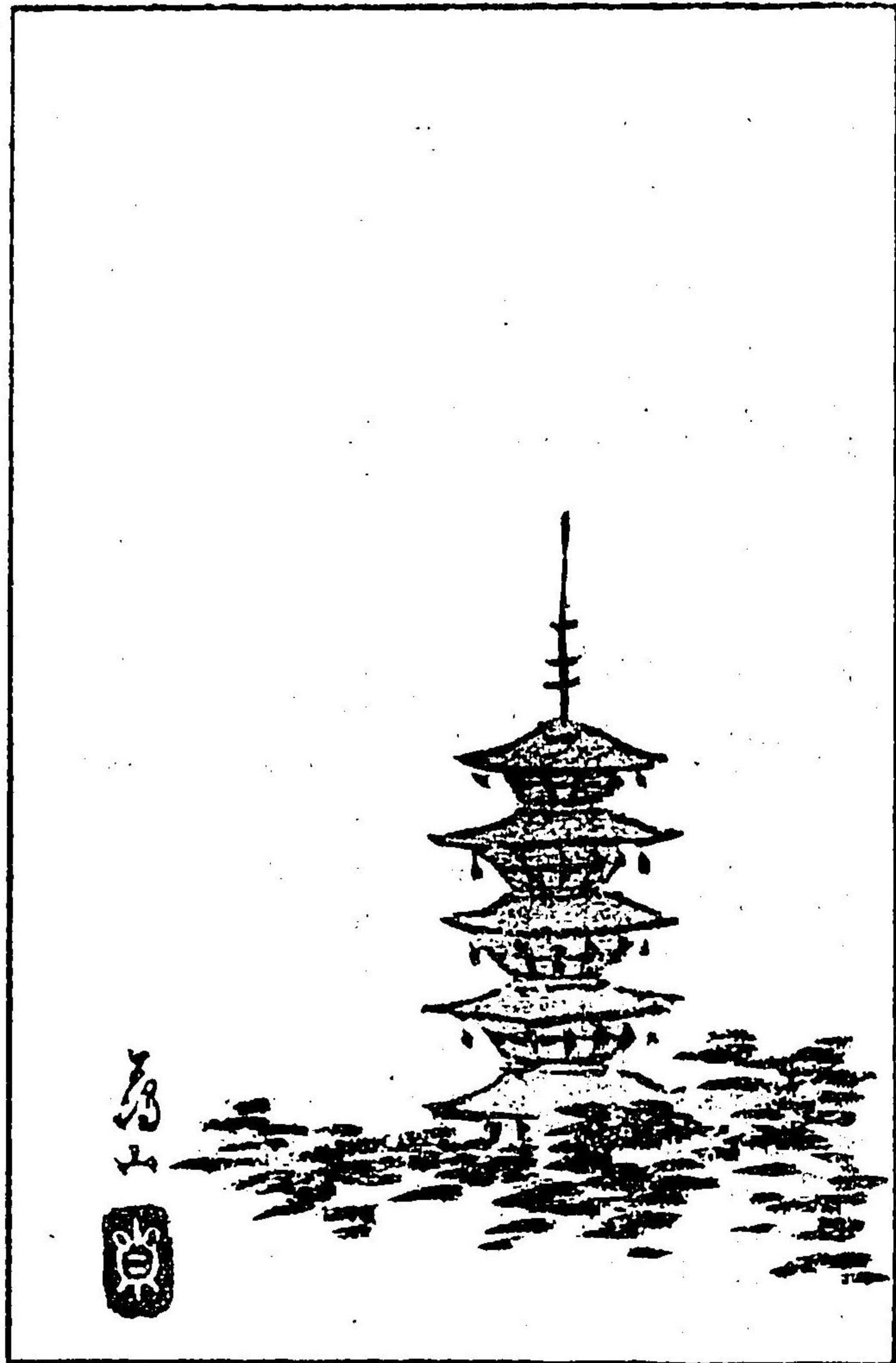


者か又は別に一家を起 爾來製陶の術いよく 進み文化年間 西紀千八  
 に至りて高橋道八、和氣龜亭、水越與兵衛などいふ者、肥前有田の製法  
 をまなび得て青花磁器を造る 肥前有田にては慶長三年(西紀千五百九  
 十八年)朝鮮の歸化人李參平、磁器を創製  
 し正保寛文の頃には愈 當時おはくは指頭を以て造りて模型を用ゐ  
 よ進歩して精巧を極む 當時おはくは指頭を以て造りて模型を用ゐ  
 ず之を畫かく所の畫甚だ巧なり、其後續きて良工輩出し磁器を專と  
 する者には幹山傳七、丸屋佐兵衛、龜屋文平等にして瓷器を兼て製す  
 る者には第二世高橋道八、第二世和氣龜亭、清水七兵衛、清水六兵衛、清  
 風與兵衛、眞清水藏六等いづれも著名なる者なり 以上の良工に次て宮  
 のび云るも 而して仁清は其施釉堅實にして淺黄色の地礎に青緑の着  
 色を被らしめ之に金色を加へ、道八、龜亭、與兵衛等の製する所のもの  
 は白色の地礎に單純なる青畫を施す往々着色畫を描することす  
 れども遠く青華には及ばず、其中幹山のみは永樂風の赤畫描金を善  
 くす、永樂は文化(西紀千八百餘年代)のころ支那永樂年間製の金剛、  
 磁器に木づきて赤色釉に金粉を以て古代の彩紋を描ける一種新様

の精妙美麗なる磁器を製藏六、清風、道八等の家は五條坂の方にありし  
 出して世に賣譽を得たり 藏六、清風、道八等の家は五條坂の方にありし  
 と雖もすべて皆これを清水焼と稱し粟田焼と相並びて名聲あり、其  
 業寛文年間に發達の端をひらき製造の盛なるに及では時に濫造の  
 弊なき能はず且は後世の製品その精妙雅致ひかしの良工の作に及  
 ばざる所ありと雖も技巧大にすゝみ明治の今日に至ては前代見ざ  
 る所の大小各種の新様を燒出して日に月に隆盛を致せり

●八坂の塔 清水寺の西北高 靈光山法觀寺 一には八坂寺と稱す、其八坂郷  
 坂といふ故は祇園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、靈と號し推古天皇の御宇  
 山坂、三年坂、山の井坂、清水坂、八の坂あるに因る 靈光山法觀寺 一には八坂寺と稱す、其八坂郷  
 坂といふ故は祇園坂、長樂寺坂、下河原坂、法觀寺坂、靈と號し推古天皇の御宇  
 西紀千五百九 聖德太子の創建したまふ所の古刹なるが星移り物變りい  
 つか殿堂伽藍は廢亡し五重の寶塔のみは今に昔をおもはせて屹然  
 雲霄に聳也、然と最初のもののは夙く失て建久三年(西紀千九百)に右大將頼  
 朝これを再建し正應四年(西紀千九百一十一年)に圓成禪定尼(北條貞三)個所を造  
 營修補し千の時附す 曆應元年(西紀千三百三十八年)に足利尊氏また修營し氏

ふたのかさや  
 Sasaka Pagoda

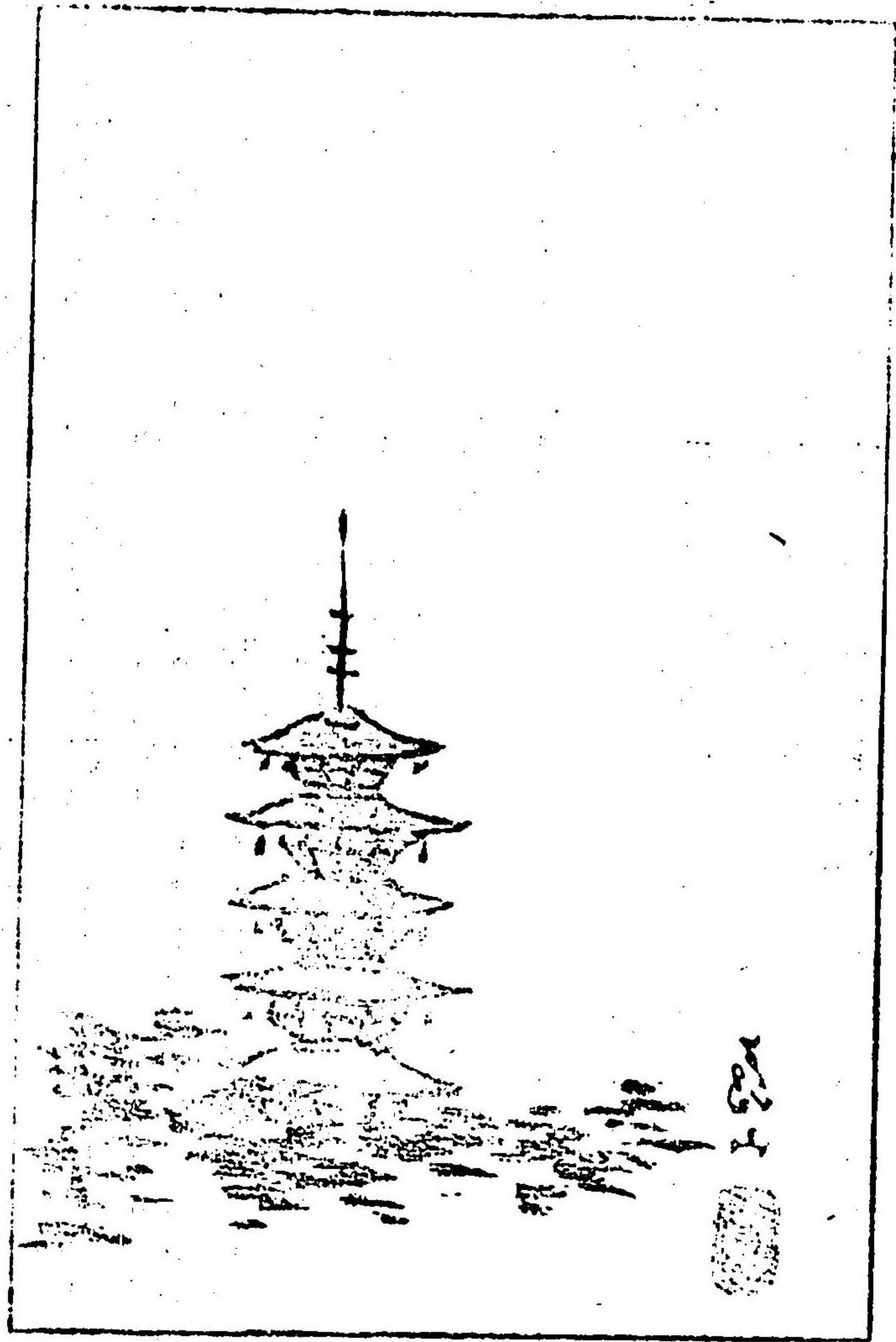


佛舍利を安じ播州永亨年間永亨八年に災あり西紀千四百卅足利義教も修  
 理をなし其後また大破に及びしを元和四年西紀千六百十板倉勝重當時京  
 きり台命を奉じて造營す現今の塔は即ち是なり

層塔崔嵬聳碧空 風動寶鐺響雲中 高僧法驗磨不磷  
 千古壯觀雄洛東 前羅林大 蒼生雄 心

榎引わたる春かすみかな

◎高臺寺八坂塔の北山號を鷲峰山といひ又岩清不動山といふ創め細  
 川満元この地に岩栖院を建立せしが慶長十一年西紀千六百十豊臣秀吉の  
 夫人政所淡野長勝の妻女高その亡母追福のために當寺を造營し岩栖院  
 を康徳寺の舊地に移す此より前に政所その母の菩提のため塔北京極に康  
 徳を交換し更に高臺寺と號す岩栖開基は弓箴禪師長にして曹洞なりしを  
 其後建仁寺の三江長老光建仁寺塔頭常こゝに住して中興の祖となりしよ



り建仁寺に廟して臨濟となれり佛殿唐門形を以て營む方丈征吉朝と  
 は狩野弘意にして東西の間は了溪の筆なり中間客殿の筆にして狩野永徳土佐光信  
 物祖天井唐戸腰障子小方丈及び古法眼の風吹柳の畫法親王の他名手の畫多かり  
 開山堂天井は政所高臺院の車の上屋の天井を以て報る等立列りて善美を盡し  
 が昔て回廊の英に羅り其多くは灰燼となり今僅かに昔の浪殘をと  
 ひるぞ惜き臥龍と號する廊階を登りて小高き所に秀吉及び政所の靈  
 舎あり法形花形の政所の像を鑲はめ五彩を飾る中に唐冠持笏の秀吉の像と  
 かい又その東の山上に時雨茶屋ならびに傘茶亭あり二ツも伏水城し  
 て茶亭は于利休いづれも世にきこはて名高きものなり中島規の詩に云  
 く

英雄猶未免情痴  
 更思海外取鮮夷  
 傘様、第亭容膝時  
 畢竟優遊何耐狄  
 當寺は古より秋の名所にして秋にいたればその花疎松の間に咲亂れ

て恰も翠蓋の下に錦をしきなせるに似たり櫻の大樹数株ありて春花の艶色もなかくに佳し

豊國夫人遊有時 白櫻花後紫胡枝 龍團韻事餘恩賜

名在高臺成寺遺 都人けふもとひ來とあき秋の花のひしろをしきて待かな

蒼生雄 合離

來葉

名も高さつもの臺やはさの花

什寶 ○西湖の圖 後陽成帝の御筆 ○釋迦と五祖六祖の像三幅對 後陽成帝の御筆 ○達磨

の像 古瀧長老の寶 ○十六羅漢十六幅 師月大 ○出山の釋迦 北原 ○孔雀

と鶴双幅 林真 ○琴棋の圖二幅 然坦 ○管公の像 寺傳自筆 ○觀世音と龍

虎三幅對 應舉 ○童子の圖一幅 ○秀吉の書翰 小田原陣中よ ○詩繪の爐

椽同角盤同手拭掛同双六盤 ○沈金彫の食臺 ○龍甲張の卓子 朝鮮 ○推

黒の机 ○唐銅獅子の香爐 ○唐銅龍の花瓶 ○唐銅の燭 ○大和錦の模枕

○詩繪の厨子 盤合の中 ○銅象眼梵字の香爐 ○梨子地膳櫛三組 ○黒漆

螺鈿の硯箱一個 ○綴錦の陣羽織 秀吉の用 ○秀吉の書一幅

○双林寺 高森寺の北、東 金玉山と號し無量壽院と稱す、また雙樹林寺と

稱するを累して雙林寺といふ、延暦年中桓武帝の御願にて傳教大師の

開基に係り、そのうち鳥羽帝も厚く御歸依まし、て皇女綾御前 女綾

宮と稱す、をこゝに居る、土御門帝の御子靜仁親王亦こゝに住職した

まひて由緒おほき寺なるが中世兵燹にかゝりて堂塔灰土となりしを

文和 西紀千三百 のころ國阿上人再興して念佛の一家をたて終に國阿

派の本山となる、昔は天台なりしが此より時宗に改れり、後柏原帝當宗

に御歸依ありて宸翰を染させられ中興開山の縁起を賜ふ、當寺第一の

寶物たり、また嘗て豊大閭この寺の花を愛て花の制札を前田玄以にか

かせて時の住職彌阿彌に予ふ、その文に云く 當寺山林竹木不可伐、採

次花折取事堅令停止之畢仍如件、天正十四年三月五日民部卿法印玄以

んあやまいさ  
Saigyō-an.



紅  
漢  
園

並びに花押あり、この地古へより花紅葉によく又幽邃閑雅の境たるを  
 以て風流の士こゝの風景を愛して此邊に居をトせし者少なからず伽  
 藍はその後また焼亡して今は昔の形をどいめされども隠棲者の古跡  
 はなほ存して遺れるが多し

性昭の塔 本堂の在し所の西側にあり、性昭は平判官康頼の法名なり、康頼  
 承の始め西紀千七百七十餘年、後寛僧部、少將成經等とく流されし家、三年の舟  
 被されて歸洛し、直ちに當山なる舊山莊に歸居し、此の山莊に於て、三、四年の舟  
 思ひしより、坂間の昔むして西行の塔、上と稱し、所にあり、西行は、孫佐  
 衛尉に任せらる族、人、憲、康、の、通、じ、鳥、羽、上、島、に、辭、して、北、面、の、諸、國、を、行、脚、す、兵  
 植、て、その、花、を、愛、玩、し、る、願、望、す、る、所、を、よ、み、て、云、く、この、寺、中、は、に、閑、居、し、も、櫻、樹、を、あ、ま、死、た  
 十八年二月十六日、望月の、卒せし、地、は、或、は、こ、の、邊、に、い、ひ、は、ん、河、内、久、國、弘、川、の、山、千、百、九  
 いろ、西行庵、せ、し、當、寺、が、入、口の、後、南、阿、法、師、西、行、を、尊、び、て、之、を、再、興、せ、し、自、作、の、

像にして、今あるは、茅草の、小、堂、なり、その、中、に、西、行、の、自、作、の、像、並、び、殊、に、阿、の、自、作、の、





き風雅の因みによりて設けられたる者なり  
雷寺の傍らに阿彌陀房上人の庵ありしなれど今は廢してその趾さだ  
かならずたゞ西行の歌と芭蕉の句とのみ今日に遺れり

古へころ東山にありて坊を申しける上人の  
庵にまかりて見けるに哀と悲とをばえてよみける 西行  
柴の庵とさくは賤しき名なれども世にこのもしき住ひなりけり

此うたは東山に住ける僧をたづね西行のよませたまふよし山家  
集にのせられたりいかなる住ひにやと先其坊なつかしければ  
しばの戸の月やそのまゝ阿彌陀坊  
はせを

雙林寺吊古

巖垣 彦明

雨後春流漲碧溪

過橋夜景正凄々

漂零鬼界悲歌異

欣慕鶴林時日齊

苔補敗簷無月漏

花攀古冢有禽棲

一聲寒磬知何處

雙樹澹雲色相迷

花もみち夏のこすゑもはかに似す

宣 長

ならふ林のふる寺の庭

西行和歌などのこも思ひ出されけるに  
わたへなる流れを菊の谷とせしむるに

同

いにしへの人に契りを結ひみん住ける跡とさくのたに水

西行上人すま侍ける雙林寺といふ所に  
庵むすびてよめる

冷泉爲 村

●靈山 雙林寺の東に在り高 靈鷲山を略言せるにて一に鷲尾山ともい

ふ舊はこゝに靈鷲山正法寺と稱する寺院ありき 開基傳教大師莊嚴な  
る佛閣山上にたかく煌きたりしといへど今は荒廢し近時は招魂場と  
なり愛國殉難および勤王戦死者の靈を祀る明治九年十月創めて招魂  
祭を營み爾來年ごとに盛なる祭典を行へり又こゝに表忠の銅碑あり  
明治維新の功臣木戸孝允の墓あり當山は眺望頗るよく古へより花に  
雪に人皆この地のながめを嘆美せり

文永元年の春わしのびて見侍りしに  
花をしのびて見侍りしに

太上 天皇

なつかしき香にこそ匂へ袖ふれし代々の昔のはなの下風

靈山春望

清

絢

鶯峰樓閣倚晴空  
五色雲中花似海

楚客登臨作賦雄  
長安十萬戶春風

渡

秋

けさみれば柳さくらもうつもれて雪こそ花の都なりけれ

◎東大谷北に隣る 大谷の稱は既に西大谷の條に述しどとく親鸞の遺骨を最初に納めし地の名なるを後にその廟所を建たる地に名けしものにて爰も亦然り此所なるは元祿年中西紀千六百九十餘年に造營せる親鸞の廟なりその東本願寺に屬するが故に世人大谷の上に東の字を加へ以て西大谷と別つその殿堂樓閣燦爛として翠松綠樹の間にあらはれ又やよひの頃に及べば喧風花をふらし眞に現世の淨土とやいはまし是また東山の佳境たり

圓山八坂神社の東、東大谷の北に隣る

往昔こゝに圓山安養寺と稱する寺院ありしが

故に今もなほ此名を存す安養寺の開基は佛敎大師にして山門の別院なりして住持し其後また國河法師當山を譲受け爾後天台を時宗にかへ勝興庵正阿彌長壽庵左阿彌花浴庵取阿彌端之寮とも云ふ多福庵也阿彌延壽庵連阿彌多藏庵源阿彌等多くの坊舎は行酒軒を有せしが後世京師第一の遊樂地にして有名なる旅亭割烹店洋料理及び料理には正阿彌左阿彌文阿彌等あり西こゝかしこに景勝を占め綠樹芳草四時之美をそなへ花に紅葉に雪に一年みながら眺めつくることなほ加筋ちかどろ爰に鐵泉浴場をひらきたれば炎夏には一浴して苦熱をわすれ玄冬には浴室のうち常に寒をしらす浴後欄に凭りて一望すれば京城の萬井目中にあつまり西南の諸山奇を呈し笑を獻じ以て心目を娛ましむ明治六年の創開にして浴室客房浴室の爲に設たる庶民あり

一とほり夕日に晴てめに近き山より高きをちの川水 逍遙院

自將鐘磬換笙歌

精舍隨緣迂綺羅

半夜人歸芳樹月

衣香巾影拂塵多

畫餅居士

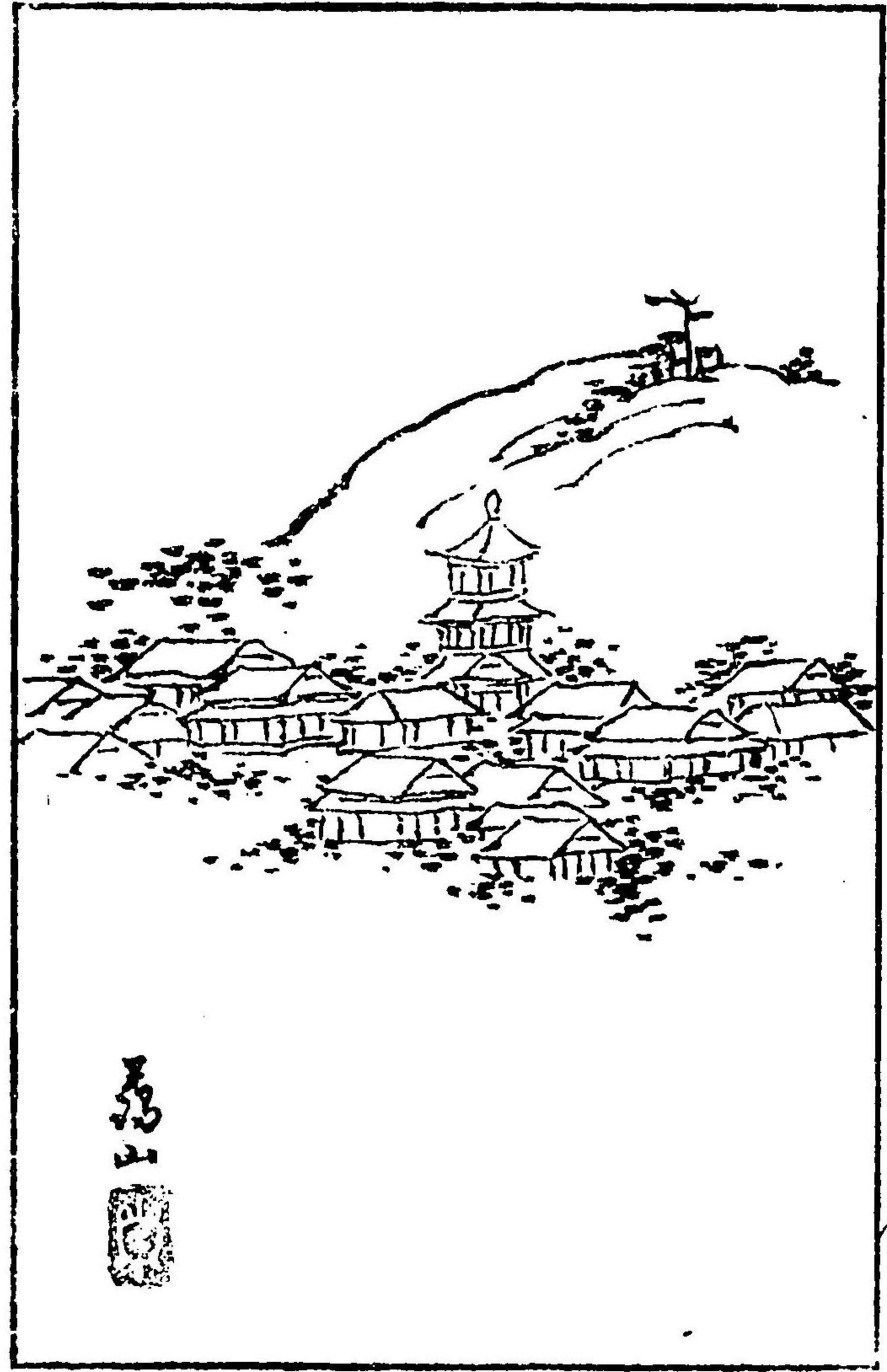
自註して云く圓山、教院古昔皆屬、延曆寺中世紛亂別立、宗門昇平  
 二百年竟化、成繁華行樂之域、云々住僧又貯妻孥、理酒肉以饜客爲  
 事業、香火經梵、蔑然如不曾知者、

圓山の南に隣りて長樂寺と稱する古刹あり開基は傳教大師にして延  
 曆年中の創建なり、この所の地景唐土の長樂精舎に相似たるを以て長  
 樂寺と號く、そのうち年月を経て頽廢せしを國阿上人中興して時宗に  
 改む、文治元年西紀千五百建禮門院平相國清盛の女にして高倉帝の后なり安  
徳帝西海にて御入水のち歸洛し給ひ落  
飾して洛北大原の寂御落飾のとき當寺の印誓上人を戒師としたまひ御  
 布施に先帝安徳帝なり即ち總の御直衣を賜りしを上人この御直衣にて  
 十六流の幢を作りて菩提を吊ひ奉る、之を安徳帝御衣幢とて當寺の什  
 寶たり、藤暲が詩に云く

壽永戦争、歲 西巡遂不歸、 法幢黃楹、色 留看、奮龍衣  
 當山は洛東の中にて、風景殊に勝れたれば古人の詩歌甚だおほし

まやま

Ma-yama.



圓山

長樂寺にて故郷霞といふ心をよみ侍ける 大江嘉言

山九かみ都の春をみわたせばたゞ一むらの霞なりけり

山亞花梢花亞山 相隣石陸不嫌難 試看紫闕金城景

盡出香雲艶雪間

畫餅居士

境内の北なる山上に頼山陽の墓あり山陽は號にして名は墓字は子成通稱  
れも世の文人を風靡す春水の男なり文章を善くし史學に精し名聲風行はれ  
るは日本外史にして止まざりきといふ天保三年(千八百三十二年)九月廿三日  
は伯事(五十三)山水(花鳥)を善くし時文章を巧みにし名聲頗る高し浦上名は選  
の友(四十六)年(五月)二月に歿す碑銘は篠崎翁の撰す所なり春等は山陽と方外  
將軍塚(長樂寺)の傳へいふ延暦十三年長岡の京より此京に遷り給へ  
るとき桓武帝この地を御覽せられ斯の如き勝地なしとて殊に執し思  
召し皇法絶ざる限りは末代まで此京を外へ移すべからずと勅制し土  
にて八尺の人形を造り鐵の鎧冑をさせ鐵の弓箭をもたせて永く王城

を守れと言含め東山の頂きに西向に立て埋めたまふ將軍塚これなり  
とぞ塚上凹形にして老松四五樹あり一望豁然として風景の美なるが  
中におのづから雄大の氣象あらはる

桓武相攸年 神甲鎮皇州 鬱彼一丘松 萬古復千秋  
不同白帝子 金人邁鑄仇 祇園瑜

京都勝覽第三日東都なる大極殿に始まり北

●大極殿南禪寺の西碓水 明治廿八年の平安京遷都千百年祭につき紀  
念のため建設する所にして専ら延暦の制を摸したれば碧瓦朱楹煥然  
として當時の壯麗を追懐せしむ

附大極殿由來 桓武天皇は光仁帝の御子にましくて御母は皇太夫  
人高野新笠大政大なり天皇剛毅英明の資を以て光仁帝の後を承  
け能くその志を嗣ぎ精を勵まし治を圖り平安遷都と東夷征伐との  
二大事業を成し以て帝業を恢弘し邦基を鞏固にし給ふその平安京

經營のとき殊に叙慮を用ゐさせ給ひしものは大極殿なりき大極殿  
は朝堂院八省院又ハの正殿の名にして或は最大殿ともいひ天子臨  
朝即位諸司告朔の所にしあれば百官萬民の仰ぐところなり百王不  
易の都たらしめんと思建られし平安京の朝堂院の正殿ならんに  
は深く叙慮を之に用ゐさせ給へるも當然とこと推察らるれその構  
造の式様を窺ひ奉るに南面なる外門を應天門と稱し三間五その  
東に栖鳳樓方四その西に翔鸞樓方四あり應天門を入れれば東西に朝  
集堂あり各九次に内門あり之を會昌門といふその中に康樂暉章明  
禮承光含章昌福以上永寧修式延祿顯章含嘉延久以上の十二堂東西  
に分れて正殿の前にあり爰にまた高欄を附したる登橋ありこの橋  
階をのぼりて進めば乃ち大極殿なりその東西に廊ありて龍尾道と  
號くこの龍尾道の端に樓あり各八間にして上東なるを蒼龍樓と稱  
し西なるを白虎樓と稱す大極殿の北に並びて後房あり小安殿とい

ふ七四四四面この他なは記すべきこと多かれど餘は大内裡圖に譲りてこ  
 こには言ずさて大極殿の濫觴をたづぬるに皇極帝の御宇西紀六十四年  
 大安殿を唐制に倣ひて造營し殿内に磬砌を敷き其名を書するに大  
 極の字を用ゐたまふ然と當時なは大極殿を音にて呼すして古へよ  
 り稱よ來れるがまゝにオホヤスミドノと訓り但し大安殿は神武帝以  
 降代々天皇の朝政を聽給ふ所なり殿に大極の號を附すること支那  
 にては魏明帝の時西紀二百三十九年頃昭陽大極殿を起しに始まり爾來唐に  
 至るまで代々大極殿を正殿の名とす隋文帝開皇元年大興殿を改てまた大極殿となせり  
 此は文帝西紀六百十八年大興殿を改てまた大極殿となせり斯るが故  
 に太極の字を天皇の朝政を聽召す大安殿に當用ゐしなるが最初は  
 さすがに字音にては呼さりけるを何れの頃よりかオホヤスミドノ  
 とは言でマイコシアンと字音に呼ふことゝはなりぬ想ふにその字  
 音讀は延曆の頃より以降なるべし平安京となりては皇城の諸門諸

殿などに殊に多く唐風の稱號あらはれ日華門月華門紫宸殿また宣命  
 にも大極殿の字載せられて音讀せしと思はるればなり桓武天皇の  
 小安殿蓋謂白虎の阿樓及び延休堂まで燒く此時柏原山殿(桓武帝の殿)に告  
 げ給へる宣命に大爰にその宣命の文を抄出して一はこのころ字音に  
 稱せしと思はるゝ證とし一は當時の大極殿はいかに壯麗なりしか  
 その狀況を想はしめんとす  
 前去月十日大極殿火災乃事在天東西乃兩樓并兩廊百餘間一時  
 爾燒盡爾太傳聞賜此宮乃掛久畏天皇朝廷乃營作其之賜天萬代  
 爾傳賜留介宮利就中爾大極殿波殊爾御意留賜天妙爾麗久造飾賜天國  
 乃面止之百官萬民乃仰久處止定賜留介殿利云々  
 摸倣大極殿

◎平安神宮大極殿の北に在り 當宮も亦遷都紀念祭に際し桓武帝の御威徳を永

く世に仰思せしめんとて爰にその神靈を崇祀して社殿を營めるなり、朝廷これに平安神宮の號を賜ふ社殿は明治廿七年に起工し構造は白木造りにして淨潔嚴肅おのづから人をして畏敬の念を生せしむ

すめらさの惠の風はふきたえす千とせの今もなひく民草

●熊野神社 下岡崎町、一の鳥居は丸 後白河上皇の勅願により熊野新宮を勸請せし所にして創建のときは熊野の土沙を運びて宮殿の地を築き熊野の樹木花草を移して境内に植る宮殿には金沙を鏤め樓門廻廊榎舎經堂等巍々たりしが應仁の兵革に悉く焦土となり爾後社殿再興せられしと雖も昔時の什が一にも及ばず今はたゞ僅かにその形式を存するのみなり

●聖護院 熊野神社の北、聖護院は智願大師にして常光院と號せしが寛治年中西紀千八九三井寺の聖護院増譽僧正當院に住職せしより聖護院と改稱す増譽は權大納言經輔卿の息にして始めて熊野三山の別當職

となる中頃より法親王こゝに住職したまひしが此故によりて代々三井の長吏熊野三山の別當たり門主は即ち修驗道を兼て山伏を管領したまへり

因に云、山伏に天台真言の二流あり、天台は當聖護院に屬して之を本山と稱し、真言は醍醐三寶院に屬して之を當山と稱したり

●高等女學校 土手町、丸 明治五年四月始めて業を開き華士族の子女に英語及び和洋女紅を授け尋で一般人民の入學を許し稱して新英學校及び女紅場と呼しが其後數回の沿革を経て明治廿年一月に至り高等女學校と改稱して高等普通學を授け別に隨意科として茶儀、插花、絃歌の三科を置けり

●療病院 河原町、小路 明治三四年のころ横村京都府知事の創意により府民の健康を保ち窮民の疾苦を救助する目的を以て療病院を設立せんとし弘く慈善家の寄附を募りしに府下の醫師大村達齋、新宮涼民、前田松

閣等創立費を寄附せしを始めとし諸有志者より寄附せし金員頗る多  
くして數萬圓に達せしかば明治五年十一月一日栗田口青蓮院を以て  
假療病院とす其後幾多の星霜を経また沿革を歴て遂に現在の地に新  
築せられ府立療病院となれり又その傍らに醫學校を設けて之に附屬  
せしめ以て醫生を養成す

●梨木神社寺町廣小 贈右大臣三條實萬卿を祀る實萬卿は三條内大臣  
實美卿の父にして勳王の志篤く光格孝明の二朝に歷仕し嘉永六年外  
艦の渡來以降公武の乖離せるを憂ひ百方その調和を圖りしが孝明帝  
の御時攘夷の勅書を水戸に下賜せられしより幕府の忌憚する所とな  
り遂に一乗寺村に閑居して落飾し安政六年西紀千八百五十九年五月薨去す近  
年西紀千八百五十九年に至り社殿を創建して永くその功績を表頌せり

●師範學校寺町通廣小路下る 創設は明治九年五月にして始めは中筋町舊准  
后里御殿を假に校舍に充てしがその後舊中學構内に新築して之に移

り後また現在の所に轉じ校舍も完備し規則も整頓して男女生徒に小  
學教員たるに必要なの學科を教へ附屬小學校を置いて實地を習練せしむ

●下御靈寺町通り丸太町の南にあり 上御靈と共に祭神を同うし早良親王伊豫親王  
藤原夫人文太夫橋逸勢藤原廣嗣吉備大臣火雷神の八靈を祀る下は仁  
明天皇の御宇西紀八百四十年に鎮座せしめ上は朱雀天皇の天慶二年西紀九百

因に云早良親王は光仁帝の御子にして桓武帝の弟なり天應元年太  
子に立られ給ひしが故ありて廢せられ遂に淡路に流され途次食を  
斷て死す後にその靈崇りをなせりとして證して崇道天皇と稱し以て  
その怨靈を慰む○伊豫親王は桓武帝の皇子なりしが謀反によりて  
其母藤原夫人吉子と共に捕へられ藥を服して死せり○文太夫とは  
文屋宮田丸のことにて是も承和十年承和は西紀千五百三年に當る  
謀反の企露顯して伊豆に流さる○橋逸勢も亦宮田丸と同時代の人



にて太子恒貞親王の事に坐して伊豆に流さる○廣嗣は藤原宇合の子なり、上表して奸僧玄昉を除かんとして成す遂に筑紫にて兵を擧げ官軍に生捕れて誅に服す○吉備大臣は久しく唐に留學し博學を以て聞え神護二年西紀七百六十六年右大臣に任ず○火雷神は菅原道真を稱するなりといふ、吉備大臣を除くの他はみな非命怨恨に斃れし者なるが故にその崇を懼れ亡靈を慰て災禍を免れんために斯は祭祀せるものなり、然るに學識を以て卑賤より異數の高官にさへ陞りし吉備眞備を此中に加へたるは如何なる故にや訝かし

●美術學校丸太町寺町西へ入る 舊は京都府立畫學校と稱し明治十三年七月准后里御殿を假校として開業し専ら西洋畫を教授す其後河原町二條或は花頂山麓通照院等に轉移し明治廿四年に至り美術學校と改稱し繪畫工藝圖案の三科を置きて諸規則を改正増補し同廿五年七月御苑内の東南即ち現今の地に校舍を新築し翌年工成て移り次第にその業を

廣め更に彫刻科をも加へ又豫備科を設け校名を改めて美術工藝學校とせり

●京都博覽會場丸太町鉄區町西へ入る北側御苑内に在り 當會は明治四年三月皇居の空殿に於て開設せられしを以て始とし其後これを大宮御所に移し、同十四年に至り更に會場を今の地に築造して毎年三月一日に開會し六月八日に閉會するを例とす、開會中は京都諸名工の妙技一場にあつまり繪畫彫刻陶器漆器織物金銀銅器その他萬種の物品みな此中にありて人の需要を充し燦爛たるその美は人をして眼目まばゆからしむ

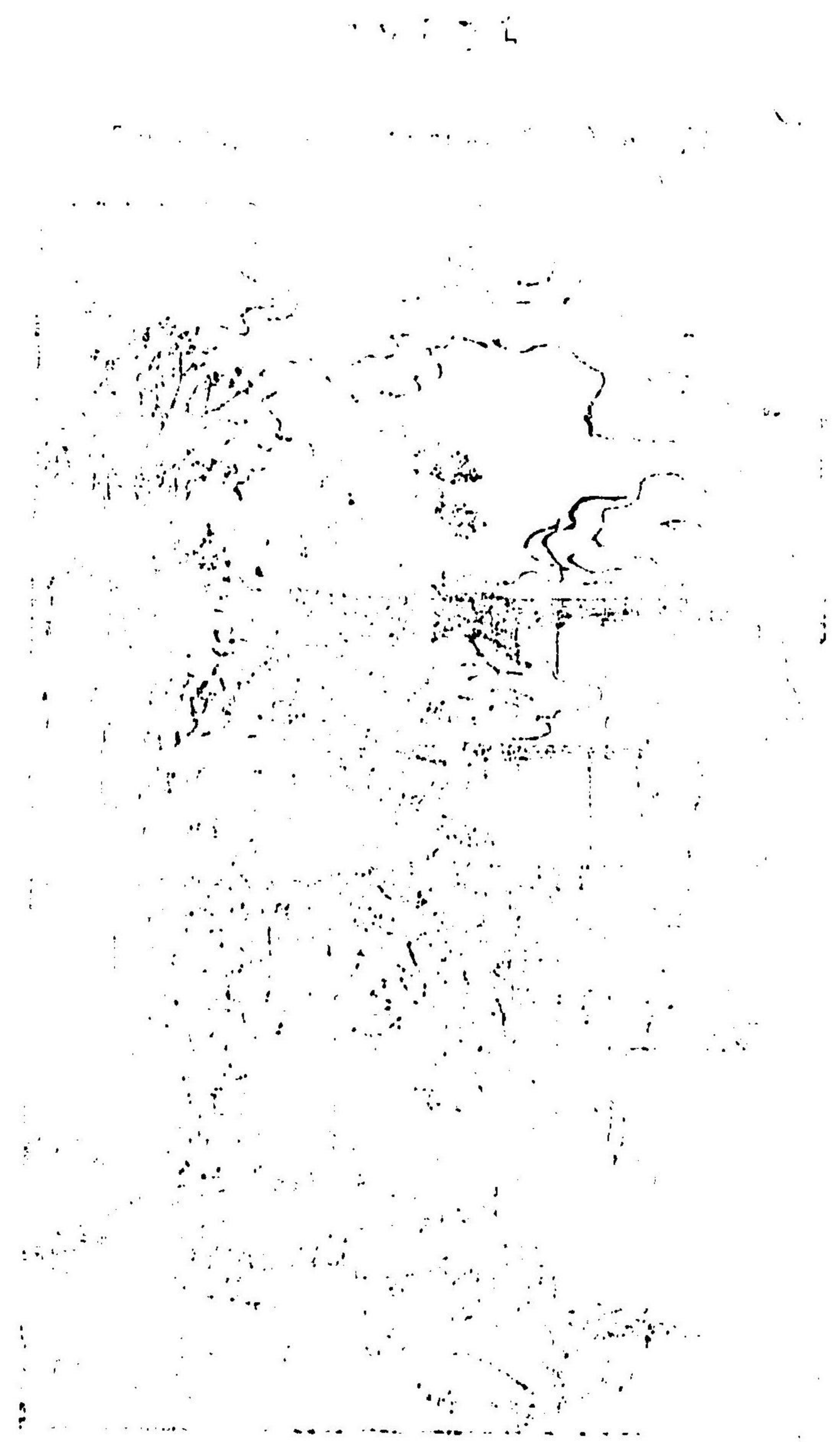
●仙洞御所皇宮の東に在り 舊は上皇の宸居なりしが安政元年西紀千八百四十四年四月炎上せし後は造替なし、然る林泉は今なほ存して幽鳥老樹に鳴き錦鱗清波に戯れ怪石苔むして千古の色あり紅塵の街を去る數歩にして立刻仙境に入しかと疑はる、北に並びて大宮御所あり、此は皇太後の住せ給ひし宮なり

よきうまき

Ko Kyo (Imperial Palace).



● 皇宮 御苑の北部 現存の宮殿は安政災後 西紀千八百五十四年皇宮火の御造營にして外廓東は寺町通り西は烏丸通りを以て堺し南は丸太町通りに面し北は今田川通りに背し面積凡そ廿五萬餘坪四面めぐらすに石垣を以てす 舊日は親王家諸紳の邸第皇宮を回りて外廓内にありき 明治遷都の後皇宮のみ遺りて餘はみな廢趾に歸せしを今は悉く芝生となし 點々小松を植ゑ稀に柳櫻をまじへ 皇宮南門の前に小丘あり丘下の泉水さよく湛へ丘上の老松銀杏の巨樹と相並て蔭涼しく 夏夕尤も佳し 近年これを堺町門内の西手なる九條御邸の丘上に移しが 西部には梅林あり百花に魁して春を告げ清香遠く市街に及ぶまた 白雲神社と稱する小社の傍らに蓮池あり晚香風涼しく 圓青嫩紅に映じて甚だ佳美なり 南の方丸太町にそひて九條殿の舊庭あり泉石の趣なほ存し紅葉の頃にいたれば池頭燃るがごとく水底朱をそゞぎて顔る麗はし 外廓石垣内を御苑と稱し 皇宮はその中央に位し南門を正門



とし東門を日後門と呼び西門を公卿門と呼びその北に並べるを臺所  
 御門と呼び正北に又一門ありて朔平門と呼ぶ正門の内にまた宮垣あ  
 り之に承明正日華方月華方の三門をそなへ紫宸殿は南面して承明門  
 と相對せり紫宸殿の西に清涼殿東北に小御所及び常御殿また北方に  
 准后御殿等あり明治維新前の宮城圖に  
 玉葉集 雲の上こゝのかさねの宿の春 院 御 製

續古今 さらへらさの位の山の小松原 中務卿親王  
 あらしもしらぬ花を長開き

◎同志社學校 相國寺の北 當校は基督教主義に基きて高等教育を授く  
 る本邦嚆矢の學校なり嘗て新島襄氏海外に渡り多年苦學のち岩倉  
 全權公使に陪從して歐米諸國を巡視し文明の本は教育にありて教育  
 の要は智徳の並進にあることを悟り此兩者を兼有して我國に學校を

創設せんと欲し公使に別れて尙ほ米國に留まり千辛萬苦して遂に志望成就の機運を迎へ歸朝のち山木覺馬氏と結社し内外志士の賛助によりて立る所なりその開始は明治八年十一月に在り漸次盛大に赴き年々歳々校舎の敷を増し煉火石造の大夏高堂魏々として碧空に聳也、當社の學校は普通學校の他に豫備校あり、神學校あり、理科學校あり、政法學校あり、又西に隔りて女學校あり、南に隔りて看病婦學校あり、同社病あり、又今出川に面して圖書館あり和漢洋古今の典籍を蒐集して生徒を益し館内更に小室澤邊二氏の紀念文庫ありて弘く衆庶の縦覽に便す、

同志社 諸學校 かのかじり學びの道にわけ入てさどりの奥の花やたをらん  
同志社 圖書館 わたりなば悟りの深さいやまさん書卷川のそこひしられで

◎相國寺 御苑の北、今出川 禪宗にして京都五山の一に位す 寺東福寺、述仁

五山寺及び常寺を以て五山とし南禪寺を後小松帝の永徳三年 西紀三年 百

足利義滿の創建にして開基は夢窓國師なり山號を萬年と稱し、寺號を相國承天と稱し、佛殿には釋迦阿難迦葉達摩大元等の像を安す、鐘樓あり洪音樓といふ、此鐘はもと南都元興寺に在しを其寺荒廢せしが故に義滿こゝに移したりと傳ふ 因に云、元興寺は一に法興寺とも稱し、蘇我馬子殿絶せり又義滿こゝに三百六十尺の七重の大塔を建て應永六年 西紀千九百九 九月その供養を盛に營みしが今は絶果て尋ねべき跡だになし、空しく塔壇の稱を地名に残し又瑞溪の詩ありて徒らに當時を追懷せしむ

七級、浮圖洛、北東 登臨、標渺、步、晴空  
相輪、一半斜陽、影 人語、鈴聲、涌、晚風

佛殿の西に二重塔あり齒髮堂と稱し後水尾帝の御齒髮を納めたる所にして中に宋板の一切經を藏し又樓上には滅金の舍利塔を安す精工を極めたり、又寺中普光院には歌の名家定家の塔あり